

神様のお気に入り

きし川

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

2015年7月30日（水）7時14分22秒（適当）主人公は突然空から降ってきた集団ストーカー（化け物）に襲われ絶対絶命の危機に陥るがなぜか、天の神に気に入られ天の神から十二体のオーディション敗北者と三種のガラクタを貰う。さらに、天の神にコマンドー的殺害予告をされ、放生される。はたして、主人公はこの生き残れるのか……

真に勝手ながら一から作り直すことにしました。応援してくれた方々ありがとうございました。本当にすみません。

目次

お気に入り登録	1
諏訪の勇者と巫女	8
第1回諏訪防衛戦RTA	11分45秒14
今後の方針と光るそば	23
水瓶座の卑劣な技	35
勾玉で出来ること	42
真夏の夜の襲来 前編	51
真夏の夜の襲来 後編	62
引越し準備	70
私は帰ってきたアア!!	79
しんじて	89
(四国へ) 行きてえなあ…	97
またね	103
新たな出会い	125
寒さと熊と勇者と危険を感じる	137
蟹、襲来	152
苦戦	164
船を探せ	175

お気に入り登録

どうも、皆さんはじめまして、私は私です。生まれは四国某所。現在小五です。小五ロリです。悟りです（違う）

突然ですが、皆さんに質問です。

あなたは化け物に襲われたことはありますか？私はありません。というか現在進行形です。

詳しく説明してる暇もないので簡潔に纏めると

修学旅行に行く↓行き先で地震に被災↓クラスのみんなと避難↓化け物襲来（今こ→こ←）

という感じです。お分かりいただけでしょうか？（心霊のテンプレ）最初は何事!?何事!?!:ともう私びっくりしちゃってオロオロしてたら、避難所の壁がパーンッ！（H S M Tさん）って吹き飛んで飛び散った破片が横にいたクラスメイトの子の頭に当たって頭がパーンッ！（H S M Tさん）ってなっていました。

それからもう、一心不乱に逃げまくりました。体中土汚れまみれになって二回も転倒したんや（土方）。その結果私はなんとか逃げ延びました。

ところが（転調）クラスメイトのみんなとはぐれていました。でも、きつと大丈夫でしょう。

だって逃げる途中でチラチラ見ましたが刀振り回してる武者がいたので向こうは大丈夫でしょう。

さて、そうなつてくると今一番危険な立場にいるのはもうお分かりですね？（ノムリツシュ）

そう私です。今私の周りには誰もいません。走り続けて数十分気がついたらこゝんなとこゝろに来てしまいました。周りにはなーんにもありません。あるのは木ばかりです。

どーすっかなー俺もなー（俺っ娘並感）っどこれからのことを考えていると

『FF外から失礼するぞ〜』

「フアッ!？」

いきなり脳内に天の声が響いてたまげた私は大きな声をあげてしまいました。すると、化け物達はその声に反応して群がってききました。

私は向かってくる化け物達を見てもう終わりだあ…(レ)と絶望し、ヤダ…コワイ…アイアンマン…と迫ってくる死に怯えていると

『下がれ』

再び天の声が脳内で響くと化け物達は急に動きを止めました。しかし、戸惑うような仕草を見せるだけで一向に下がりません。

『くどい…くどいって言うてる！』

すると再び天の声がやや怒気を孕んだ口調で言うると化け物達は離れていきました。

あーよかつた〜(KNN姉貴)と安心し天の声に対しありがとナス！と礼を言いました。

『気にするな(魔王様)』

天の声はそう言うと言ってこう言いました。

『あつそうだ(唐突)自己紹介がまだだったな。我は天の神、貴様ら人類に天誅下すためにやって来た』

「フアツ!」(二度目)

私は再びたまげて大きな声を出してしまいました。が今度は(化け物は)誰一人来ることはなかったです(シヤム)

私は天の声もとい天の神になんで？(疑問)と聞きました。

すると、天の神はあつさり教えてくれました。けれど、長いうえにややこしいので簡潔に纏めると

人間が神に近づいてきてるのでやっちなまおうぜ！

ということらしい、ハア…(クソデカため息)もう終わりだあ…(絶望)

私は絶望しました。だってそうでしょう？相手は神様です。敵うわけがありません。でも、それならなんでさつき助けたんですかねえ…

『それは我が貴公のことを気にいったからだ…：：：気に入ったから殺すのは最後にしてやる(コマンダー)』

「ええ…」

私はとても困惑しました。誰だってこんな告白されたら困惑するわ。仕方無いね（レ）

そんな私を無視して天の神は話を続けます。

『しかし、貴公はあまりにも弱い。これでは、我が殺す前に死んでしまう。そこでだ、我から貴公に神の加護を与えようと思う。そうだなあ……駒のモデルに採用したのが十二星座だったから貴公には没にした十二支の力を与えよう地の神の精霊より遥かに強力だろう』

え？……え？

『では神の恵みをウケトレエエ！（我が魔王の肥やし）』

天の神がそう言うとき空から光が降り注ぎ私の中に入ってくる。

「あ……なんか、あつたかい…」

その光はとても暖かく、とても優しい感じがした。

『あつついでに神器もあげるゾ』

そう言うとき天の神は空から錆びた剣と鏡といくつもの勾玉が紐で繋がったものを落とす

『では、良き終末を（ドクター真木並感）』

そして、天の神はその場居なくなつたような気がする（見えてないが感じることはできる）

「やるだけやってとつと帰っていききましたねえ…まるで、嵐みたいだあ…」

「まーでも、もらえるものは貰っていきましょうか。さすがに、素手ではこの先生き残れないでしょうから」

そう思い私は天の神から貰つた神器を手に取りました。すると、神器はひかり輝きまるで新品のような状態になりました。

「おーええやん（称賛） 気に入った！。なんぼなんこれ？（刃渡り）」

私は剣を鞘（いつの間にかあつた）に収めて左手に持ち、鏡は自分の回りに浮遊させ、勾玉は胴体にたすき掛けしていざ鎌倉（行くとは言っていない）と人のいる所へ向け移動しますウウウ…

「あつこれもう（どこに人いるか） わかんねえな」

しかし、歩き出してそうそうに問題発生。人がいる場所ってどこな

んだよと考えていると

《西へ東へ飛んでいく♪ (ポルタ)》

「こいつ直接、脳内に!？」

突然、脳内に懐かしい曲の一部が流れたまげる私。すると、また脳内で声が響く

《やあ、ダニエル (人違い) 君を助けに来たんだ (道案内)》

「おーええやん (渡りに船) 所でどちら様ですか？」

《私は神託担当のものです。今からあなた様のサポートをします。》

「ありがとうございます… (KMR)」

私は方向感覚はナオキなのでこういうカーナビみたいなのがあるとすごくありがたいです。

さて、ではカーナビさん (仮称) (道案内) オツスお願いしまーす

《いきますよ〜いきますよ、いくいく (検索中) …ヌツ!》

ブツ! チツ! パツ! …ポンツ!

頭の中の日本地図に4つのピンが立てられる。

えーと、北海道と沖縄とこれは…長野県? ですかねえ? とやや大きなピンが立てられている香川県の四ヶ所ですね。

ふむ、大きめなピンはメインイベントで小さいのはサブイベントかな (ゲーム脳) 私は基本サブイベ片つけた後にメイン進めるので香川は最後にしよう。

という訳で早速チャートを組んで…ヨシツ! (ガバ確認) 人の温もりを求めるRTAはつじまーるよー (RTAするとはいつてない)

《はい、よーいスタート… (案内開始)》

「すいませくん、木下 (偽名) ですけどもお。まあだ、時間かかりそう

ですかねえ?」

《モシヤモシヤセン!ちよつと(化け物で)道が混んでまして…》

「申し訳なんて聞きあきたわ!!ハァー…:あほくさ」

やめたら?この仕事…こんなあほらしい…

《うるさいんじやい!さつきからブツブツよお!!ほならね、障害物(化け物)退かしてと私はそう言いたい。それとも、こわいのか?(煽り)》
「やってやろーじゃねーかよ!!この野郎!!(杉谷選手)」

渋滞せいでイライラしていた私は、カーナビさんの煽りでどうとう怒りが爆発した。

物陰からチラチラと周囲伺い、すぐさま飛び出し化け物の群れの前に立つ

そして、剣を抜いて構えると近くいた一体が突進してくる。

「スウウウ…:ふううう…」

私はそいつを見ながら深呼吸して自分を落ち着かせる。そして、化け物が間合い入った瞬間

「セイヤアーツ!!」

力任せに振るうと剣は化け物を真つ二つしました。空間ごと…

「フアツ!」

そのせいか剣の軌跡の延長線上にいた化け物もまとめて真つ二つになりました。

「ええ…」

あまりの威力に私は困惑しました。やべえよ…:やべえよ…:ドウスツペと考えていると十二支の力があることを思い出しました。

「じゃけんいまやりましょうねー」

十二支の力を使います。すると、カーナビさんが言いました

《あつオイ待てい(江戸っ子)何を使うか頭の中で選択しないと使えないぞ》

「へえーそうなんだ。…:じゃあ辰で」

私がそう言うとうと空から平成仮面ライダーの三作目にいた龍みたいな奴が降りていき化け物を体当たりで蹴散らし、炎を吐いて消し炭にしていく。

「はえ〜すつ〜い…」

私はその光景を眺めながら、私はあることを思いつき召喚した辰にこっちきてと念じる。

すると、辰はすぐ私の側に飛んできた。そして、私は近づいてきた辰の耳元（どこなのだよ）に顔を近づけてさつき思い付いたことを耳打ちする。

辰はやや首を傾げながらも了承するように短く鳴いた。それを聞いた私はありがとナスと言うと例の確殺キツクの構えをする。

腰を少し落としてから跳躍、辰も私に合わせて私の中心に旋回しながら上昇する

そして、私は何度か体を捻ると飛び蹴りの姿勢になる。そんな私の背に辰は炎を吐く

「たあああああああああッ!!（城戸）」

辰の吐いた炎の勢いに乗ってもものすごい勢いで化け物にぶつかる。ぶつかった化け物は後ろにいた他の化け物を巻き込んで大爆発した。

「やったぜ！（薄汚いオルフェノク並感）」

《やりますねえ!》

カーナビさんも喜んでくれている様だった。道が拓けたので私は辰を空へ帰しながらカーナビさんに聞いてみた

「車で言えばどのぐらいだ？（到着時間）」

《1…か2（時間）ぐらいです》

じゃあ、徒歩じゃもつとかかるじゃないか…トホホ…：はいアルトじやくナイト！（社長並感）

《は？（半ギレ）》

「すみません出来心だったんです。ゆるして」

カーナビさんから読モレベルの殺意を感じた私はすぐ謝りました。けれども、いくら天の神さんから力を貰ったとはいえさすがに体力の限界です。（もう歩きたくないです）

そんな時カーナビさんが言いました。

《この辺りのは粗方片付いたから鏡に乗ってとんでいけばいいゾ〜こ

れ》

「おーええやん（賛同）じゃけんすぐやりましようね〜」

カーナビさんの提案を聞いた私はさっそく乗ろうとしましたが

「小さいですね…」

鏡は一般的なフリスビーぐらいのサイズしかないのでこれに乗って飛ぶのは正直無理です。

《大きくなれって念じれば大きくなるゾ》

「はえ〜すっごい便利…」

言われた通りやってみるとフリスビーサイズから絶版おじさんの時計並の大きさに変わりました。乗って見るとかなり安定しています。

《じゃ最短でいきますね》

オツスお願いしまーす

目指すはここから、一番近い諏訪です。

《あ、そうだ（唐突）諏訪には勇者と巫女がいるからあってみるといいゾ》

勇者と巫女？はえ〜どんな人達なんだろうすっごい楽しみ

こうして、雑に強くなった私のふざけまくった冒険がスタートしました。

諏訪の勇者と巫女

カーナビさんの誘導に従い鏡を飛ばすこと1, 2 (時間) ぐらい飛ばし続け、ようやく人里が見えてきました。

ですが、人はいません。あるのは破壊された建物と破壊した町を我が物顔で飛ぶ化け物だけです。

「ウーン… (悲しげ)」

ここには人は居なそうなので他の場所を探そうと思い鏡を動かそうとした時カーナビさんが声をあげました。

《あ、オイまてい (緊急) この先で戦っている人がいるゾ!》

「それは本当か!？」

私はすぐさま鏡をカーナビさんが指示した方向に向かわせる。しばらく進むと化け物達がだれかに襲いかかっている光景が見えた。よくみると、襲われている人は私と同じぐらいの女の子で鞭のようなもので戦っていた。しかし、化け物の数が多いためか徐々に押されるようだった。

「これはいけない (焦燥)」

私は鏡のスピードをさらに上げ、化け物の群れへまっすぐ飛ばしていく。そして、ある程度近づいたところで鏡から飛び降り鏡を今まさに女の子に噛みつかんとしていた化け物にぶつけて助けると

「生きてる?。」

私も女の子の前に着地して声をかける。

「だ…誰ですか?。」

「びっくりしてるところさん!? 悪いけど話は後でまずは化け物共を倒そう! (提案)」

「ところさん…う…え…ええ、そうですね。助かります!。」

私は女の子と背中合せになって剣を構える。とりあえず囲まれているので突破口を開くことにします。

剣を横に構えて腰を落とし意識を集中

こ→こ← (刹那の見切り)

「ウエエエエエエエイ!! (OWO)」

気合いの掛け声と共に横に一闪、BETA並に群がつてる化け物を一掃する。しかし、次から次へと化け物は群がつてきます。ドウスツペ…ドウスツペ…と次の策を考えていると

《十二支使えつてそれ一番言われてるから（指摘）》

「あつ…そつか…（池沼）」

カーナビさんに言われ、気がつきましたがなにしようか悩みますねえ！じゃけん、一番目からいきましようね

という訳で…子^ね、入って、どうぞ（召喚）

私が念じると空から何かが落下して地面に激突して、カァン！という謎の金属音を響かせる。

落下したものをよくみるとロボットみたいなネズミだった。大きさは…ブルドッグス（パグ）並ですね。

「ええ…（拍子抜け）」

前回の辰に比べると迫力がありませんですがそれは…

《あつオイまてい（江戸っ子）（落胆するのは）早くなあ〜い？（騙されたと思つて、使つて）364364》

（そこまで言うなら）しょうがねえな（悟空）

とりあえず私は召喚した子に突撃いい!!（にほんへ）と念じる。

子は領くと予想以上の素早さで化け物に接近し、切りもみ回転しながら突つ込み化け物に噛みつく。

さらに、子はそのまま回転しながら化け物の体内に入り体を内側から食い荒らしている。そして、体内から2体の子が飛び出てくる。

あれれ〜？おかしいぞ〜？（コナン君並感）なんで増えてるんですかねえ？（当然の疑問）

《あれは子の特殊能力『増殖』だぞ。自分の数をねずみ算式に増やすことが出来るゾ》

はえ〜すつごい……ん？

再び子の方に目を向けるといつの間にかまた増えていた。数は10弱ですかねえ（適当）

そうして、増えていった子達は津波のように化け物達を飲み込み、子の波が過ぎ去った後には化け物達の姿は無くなりました。ま

るで、ピラニアみたいだあ（直喩）

ぬわ〜ん疲れたもおおん……子、ご苦労様もう帰っていいよ（残業なし）

私はチカレタように座り込むと頑張ってくれた子達に礼を言って空へ還す。大量の子達が天へ還っていく光景は大量のピクピクミンが死んだ時みたいだあ（哀しみ）

それはそれとして

「すみません……さつきはありがとうござい……痛っ！」

「おっだいじよぶか？だいじよぶか？」

女の子がこちらに近づこうとして倒れそうになったので慌てて支える。顔を見てみると少し青白くなっており、表情は苦痛に歪んでいた。

「ごめんなさい……さつき、戦っている時に足首やっちゃったみたいで……」

それを聞いた私は女の子をゆっくり座らせるとお体に触りますよ……（触診）と断りを入れ足首を見せてもらおうとひどく腫れており見るからに痛そうだった。

これはちゃんとお医者さんに診てもらった方がいいですね……（診断結果）お医者さんどこにいるかわかりますか？

「みんなが避難してる……諏訪大社に居ますけど」

「諏訪大社ですね……わかりました。鏡！戻ってこおい」

私は鏡を呼び戻すと女の子を乗せて自分も乗る。

カーナビさん道案内オツスお願いしまーす

《あっいいいっすよ（快諾）》

私は鏡をカーナビさんの案内に従って進ませます。その間に女の子と話します。

じゃあ、まず年齢を教えてくださいかな？

「え？……えっと、11歳です」

「11歳？じゃあ高学年なんだ？」

「五年生です…」

五年生？…ふーん（同学年）あつそうだ、名前は？名前は何て言うの？

「白鳥、歌野です」

「歌野さんですね。私の名は…」

ここで突然、私は自分の中に早すぎる厨二心を目覚めさせる。

（身分を隠して、人助けって…かっこいい…かっこよくない？）

「私の名は某^{なにがし}（偽名）です」

「某さん…ですか。…あの、某さんさっきのネズミみたいなのは一体？」

「そうですねえ……んにやび、うまく説明できないです……（説明下手）」

「それと、なんかしゃべり方が安定してないですけど。何か訳が？」

「申し訳ないがその手の質問はNG。イイネ？」

「アツハイ」

そこからは、他愛ない会話を歌野さんとした。特に私が四国の生まれだと話したとき、歌野さんはあることを言った時私達の距離は一気に縮まりました

「ねえ某さん、うどんとそばどっちがおいしいかな？」

もちろんうどんだってはつきりわかんかね！

「いいえ！そばの方がデリシヤスよ！」

「は？（半ギレ）うどんの方がうまいに決まってるダルルオ!?あと、そのルー大柴みたいなしゃべり方は何？」

「じゃあ勝負よ！某さん！どちらが先にうまいと言わせるか!!」

「後悔すんなよ、お前…」

とまあこんな感じにうどんそば対決してたら、いつの間にか私達の距離は縮まっていき。気づけば…

鏡の上で抱き合っていました。

なんで？なんで？なんで？（レ）と思っ
ている方々、安心してくだ
さい。私にもわからん（クソ博士）。とりあ
えず、なんやかんやあつて
こうなりました。（適当）

「某さん…」

アツハイ

「これから、よろしくね」

……オツスお願いしまーす（どうにでもなれ）

*****↑けつの穴がヒクヒクしている

そんな感じで（適当）親睦を深めた私達は目的地である諏訪大社に
着きました。

私は鏡を着陸させると歌野さんに肩を貸しながらお医者さんの所
へ行きます。すると、

「うたのん！」

「みーちゃん！」

建物の中から女の子が飛び出し駆け寄ってきた。さっきの歌野さんの反応からお友達なのだろうか？女の子は歌野さんと一言二言話していると私の方を向いて

「えっと、あなたは？」

通りすがりの某さんです。それと、歌野さんケガしてるのでお医者さん呼んで、どうぞ（至急）

「…っ！す、すぐ呼んできますー！」

そう言うと女の子はお医者さん呼びに走っていきました。私も建物の中に入れてもらい歌野さんを座らせます。

「サンキューね。某さん」

（ケガ人に手を貸すのは）当たり前だよなあ？

私もチカレタ…ので歌野さんの隣に座る

「又ワアアアン疲れたもおおん……」

「フフツ……もう何？変な声出して」

「ん？なにわろてんねん（不満）」

「あ、ソーリーね。某さん……別にバカにした訳じゃないの」

「ほんととお？（疑心）」

「ほんとよー！」

今日会ったばかりだというのにまるで仲のいい親友同士のような感じになっていると

「うたのん！お医者さん連れてきたよー！」

先ほどお医者さん呼びにいった女の子がお医者さんを連れ戻つて来た。

私は治療の邪魔にならないようお医者さんに歌野さんを任せした後建物の外に出る。

伸びをしながら空を見るときれいな月がのぼっていた。

あゝ今日もいいペンキ（満月）

「あゝ……」

ん？

空を見上げていると後ろから声をかけられた。後ろを振り向くとさっきの女の子がいた

「どうかしましたか？（ONDISK）」

「え、えっと、うたのんを助けてくれて、あ、ありがとうございます！」

女の子はやや上擦った声で私にお礼を言いながら頭を下げた。それを見た私は笑いながら女の子に言った

（困っている人を助けるのは）当たり前だよなあ？

「す、すごいですね……こんな状況なのに当たり前だなんて……怖くないんですか？」

「いや全然！（大嘘）」

ほんとは怖い、力を貰った今でも化け物を見ると追いかけて回されたときの恐怖が頭をよぎる。それでも、かっこつけたかったので元気よく女の子にそう言った

「すごいなあ某さんは……やっぱり勇者って某さんやうたのんみたいな人が選ばれるのかな？」

「ん？……勇者って？」

「えっ……もしかして、知らないんですか？」

「しらなくい。じゃけん、教えて下さい！オナシヤス！」

今度は私が頭を下げる番だった。女の子はやや驚きながら私に言った

「……いいですよ。上手く説明できるかわかりませんがそれでもいいなら」

「オツスお願いしまーす！あつそうだ（迂闊）君の名は？」

「あつそう言えば自己紹介がまだでしたね。……藤森水都です。えっと、なんでか巫女に選ばれました…」

「ドーモ藤森水都〓サン、某デス。では、改めてオナシヤス！」

「はい、えつとまずは……」

私は水都さんに勇者と巫女について聞いた。要約すると勇者は神様から力を与えられた力を使って戦う者で巫女は神様の声いわゆる神託を聞くことができる者のことを言うらしい

「ん？……あれ、おかしいね？私、戦えるし神託も聞けるんですがそれは（カテゴリー不明）私は一体何者なんですかねえ？」

水都さんの話を聞いてじゃあ俺はなんだ！（リンクス並感）と考えていると今まで黙っていたカーナビさんがこう言った

《貴女は主のお気に入りですから他の者とは違うんですよ》

「あつそつかあ…（納得）」

カーナビさんのおかげで頭がすっきりした私は水都さんに歌野さんの容態を聞くと水都さんは悲しげに言った

「お医者さんが言うには骨は大丈夫そうだけど腫れがひどいからしばらくは絶対安静だって……どうしよう、もし、襲撃が来たらうたのんは絶対戦うだろうし、でも、あんなケガで戦ったらうたのん死んじゃうよ……。」

水都さんは今にも泣き出しそうだった……しようがねえなく（悟空）

大丈夫だって（私が戦うから）安心しろよくへーキへーキへーキだから

「……いいんですか？」

「かまへんかまへん」

私は水都さんを安心させるようにない胸を張って言った
すると、それを聞いた水都さんはまた頭を下げた

「……よろしく願います」

「まかせんしゃい！」

私は胸をドンツと叩いて答えた。

《あつそうだ（唐突）そろそろ襲撃なんだよね……》

「マジイ!?もう!?……ま、いつか!パパパツとやって、終わり!」

「っ……某さん、襲撃が来ます!」

おや?カーナビさんと水都さんじゃ神託が届くのに時間差があるのか。まあいいや（無関心）

「じゃあいきますよーいきますよいくいく（出撃）」

そう言う私は鏡を呼んで飛び乗り化け物のところに向かっていった

第1回諏訪防衛戦RTA 11分45秒14

まるで終わりのない無双ゲーみたいな防衛戦RTAはーじまーるよー。

はーい、よーいスタート（棒読み）

結界から出た瞬間からタイムースタート。ちなみにこのRTA私他に走者がいなかったたので完走すれば私が世界一位です。レギュレーションもチャートもないんで私が勝手に作りました。目標タイムは10分を切ることです。

まず、十二支の子を召喚し突撃させます。子は放置してればどんどん増えていくので後半役に立ちます。ただ、序盤は数が少なく体も小さいためブロッカーには向きません。

そこで私の出番です、序盤での私の動きは子のうち漏らしをすべて倒すことで、ここがこのRTAの一番の難所です。逆に言えば、ここを乗り越えれば10分切りは確実です。

という訳で子がブロックできなかつた化け物の群れに鏡を使ってブーチャして、近くにいたやつを光波ブレード（剣）で焼き切ります。

ホラホラホラホラ（QB）、ちよつと刃あたんよ（真つ二つ）

向かってくる敵をバツサバツサと切り続けながら、全然歯ごたえがねえじゃねえか、あーつまんね（退屈）とやや飽きてきた頃、RTA特有のガバ運が発動されました。（やめてくれよ…）私の頭の横を何かが通り過ぎたのです。

ファッ!?

私はたまげながら飛んできた方を見ると化け物（いつもの）に混じって見知らぬでかいのがいました。

なんだ!?!あのでっかいもの♂!?!

私が再びたまげているとでかいのは口を開けました。そして、また、なにかを吐き出しました。

あつぶえ！（緊急回避）

たまげすぎて池沼みたいになつた私はギリギリで気づいて避けます。しかし、でかいのも逃がさないとばかりになにかを撃ち込んで

きます。

ヤバヤバヤバヤベ!! (ネイサン)

私は全力疾走で走って逃げます。しかしそこへ

やべえよ…やべえよ… (焦燥) 囲まれちゃったよ (危機)

一心不乱に避難して逃げるに徹していた私はいつの間にか化け物 (いつもの) に包围されてしまいました。絶対絶命です。

しかし、私は諦めません。私の後ろには、こんな身元を明かさないう怪しい小五ロリを信頼してくれた水都さんがいるのです諦めるものか! (建前) 10分切りたい (本音)

私は剣を構えてスウウウウ…フウウウウ…と深呼吸をします。そして、自分を奮い立たせるように叫びながら剣を振り回します。

(目を見開いて)

又ウン!ヘツ!ヘツ!

アアアアアアアアアア

ア→ア→ア→ア→アアアアアア!!!!!!
ウアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!
フウウウウウウウウウウ!!!!!!

フウウウウウウウウウウ!!!!!! (目力先輩)

すると、私の迫真の咆哮に怯んだのか化け物は動きを止めます。そして、動きを止めた化け物を私の剣が切り裂きます。しかし、思いの外さっきの音が響いたのか次々と化け物が群がってきます。

この状況下で私は思いました。これもう(10分切れるか)わかんねえな…と思いました。しかしここで、思わぬ事が起こりました。ほったらかしにしていた子の大群が津波のように化け物達を飲み込んだのです。

勝ったな、畑見てくる。(農家並感)

これは嬉しい誤算です。どうやら、私が化け物達を引き付けたおかげで子達は安全に数を増やせたようです。その数なんと1145148101919匹!! (適当) 勝ちましたねこれは間違いない (確信) 子達は私を包围していた化け物達を食い尽くすとでかいの方に

向かっていきました。いいぞいいぞ（ソロモン）
子で構成された津波がでかいのを飲み込もうとした瞬間

ヴヴヴヴヴヴヴヴッ!!とまるでA-110のAヴェンジャーみたいな（直喩）迫真の銃声のような音が鳴り響いたと思ったら子の波に大穴が空いていた。

ええ：（困惑）そんなの聞いてないよお（泣）おじさん（？）ヤメチクリー（RTAが）壊れちゃう

しかし、そんなの知るかと言わんばかりにでかいのが超高速で吐き出すそれは次々と子達をなぎ倒し、気づけばあれだけいた子達は今は居ないです（状況報告）ノルマンディーかな？（惨状）

あつという間に子を全滅させたでかいのは次に私に照準を合わせ撃つてきました。

私は咄嗟に鏡を立てて盾のようにして銃撃を防ぎます。すると、ガガガガガガガガガッ!!という（耳が）おまんこになっちゃやうな音と共に鏡が揺れます。

こつちにも衝撃が来たあ：あくダメダメダメダメ壊れちゃう、（鏡が）壊れちゃう（危機感）

私は鏡の裏で耳を抑えて縮こまりながら考えました。

あーもう滅茶苦茶だよ（諦め）一体何がダメだったんですかねー（反省会）

《いや、どう考えても作戦が悪すぎるってそれ一番言われてるから（指摘）第一、敵は一方向からしか撃てないんだから子で囲んで一斉に襲えば普通に勝ってたゾ》

あつそうかあ：（戦犯）嫌でもこれは後続の走者のための処置だから：（震え声）：：：後続の走者のために更新ポイントを残す私は走者の鑑!!（言い訳）

《はあく（クソ）でかため息）あほくさ。やめたらこの仕事（辛辣）こんなアホらしい：（采配）そんなんで散っていった子達が）

許すと思つとんのかい！（憤怒）

すいません！許してください！何でもしますから！（謝罪）

《ん？、今何でもするって言ったよね？》

ん、そうですね（返事）

《じゃあ今から言うことを念じて、どうぞ》

やれば許してもらえますか？

《おう、考えてやるよ（許すとは言っていない）……じゃあ言うゾ、返つてどうぞ…復唱！》

返つて、どうぞ！

私がカーナビさんの指示通り念じると鏡の鏡面に当たったものでかいのの方へ返つていきでかいのを蜂の巣にしていく

ファツ!?（驚愕）どゆこと〜？（当然の疑問）

《鏡には攻撃を返すという力が宿っているゾ〜だから、あのでかいの攻撃を利用してダメージを与えることができたんだゾ》

はえ〜すつごい強い…（小並感）

《あ、そうだ。ただ、返す相手がちゃんと鏡に写っていないから返せないゾ（注意点）》

ん、おかのした（理解）

さて、カーナビさんの説明を聞きながら、すっかり穴あきチーズのように穴だらけになってしまったでかいのに近づくとは私は剣を構えます。

（チャートにないことをするのは）やめてくれよなく頼むよ〜、（RT Aが）割れてんだよなあお前のせいだよ!!（憤怒） じゃけん、いまから、おまえに罰を与えるからな（氏刑）

私は剣をでかいのに渾身の力を込めて突き刺します。何度も何度も繰り返すのでかい体に突き刺します。

突くう〜、突くう〜、突くう〜、（ピストン）

そして、私の鬼ピストンの前にとうとう力尽きたのかでかいのはイキスギイ！逝ク…逝ク…逝ク…と天に昇っていききました。

工事完了です…（疲労困憊）

辺りを見回すと化け物はだれ一人いませんでした。そして、ここで

タイムーストップ記録は……

11:45:14……こんなんじや（RTAに）なんないよ。

《はーつつかえ（落胆）》

さて、完走した感想ですがやっぱりごり押しな所が多かった事と不慮のアクシデントに対する対処の悪さが目立ちましたね。もし、次があるなら、この辺りをよく考えないといけませんね……

では、これにて諏訪防衛戦RTAを終わります。終わり！閉廷！以上、皆解散！

「チカレタ……」

クソみたいなRTAを終わらせた私は歌野さんを連れてきた建物に戻ると床に倒れるように寝転ぶ。

あゝこの床の冷たさが疲れた体に心地良いんじやゝ

このまま寝てしまおうかと目を閉じていると

「某さん!?だ、大丈夫ですか!?!」

「んあゝ?」

声が出たので見上げてみると水都さんが血相変えて駆け寄ってきた。

「ど、どこかケガをしたんですか!?!」

「いや、全然（無傷）ヘーキヘーキ（サーバル）」

「そ、そうですか……よかったです……あれ?じゃあなんでこんな所で寝てるんですか?」

「なんでこんな所さんでねてるかって?おねむなの……（幼児退行）」

「こんな所で寝てたら風邪引いちゃいますよ!?!……案内しますから起きてくださいよ」

「やーや(だだっ子)だっこして…(わがまま)」

「えっ!?だっこですか?……わかりました。ただ、だっこは無理なので引きずっていきますね」

「オッス…お願い、しまーす」

私がそう返事をするとう水都さんは私のわきのしたに腕を通してズルズル(変態糞土方)と引きずっていく。

「チャカポコ…チャカポコ…(寝言)」

「フフツ…某さんどんな夢見てるんだろう?」

しばらくして水都さんは私を部屋まで連れてくる

「ちよつと待っててくださいね」

水都さんはそう言うのと押し入れから布団を取り出し敷いていくそして、敷き終わると布団に私を寝かせてくれた。

ありがとうございます…

私はそう水都さんにお礼を言うのと瞼を閉じると連戦の疲れもあつてすぐに眠った

「おやすみなさい。某さん……」

眠る直前でそんな水都さんの声が聞こえた。

「ふあ…よく寝たもおおおん…」

身が覚めると朝になっており、窓の外から鳥のチュンチュンと鳴く声が聞こえてくる。

ん？なにかありますねえ

私は自分の隣に生暖かいものがあるのに気づいた。布団を捲るとそこには水都さんがいました。

「フアツ!？」

やべえよ…やべえよ…（焦燥）出会ったその日に朝チユンかましちやったよ。というか、あそこからなんでこんなことになっちやったの？

「ん…あつ…おはよう、なつちー昨日は楽しかったね」

な、なつちー？えつなにそれは（困惑）まったく記憶にないんですが、それは（超困惑）というか、水都さんしゃべり方がフランクになつてない？

「…覚えてないの？じゃあ、教えてあげるね。まず、これからは一緒に過ごすことになるからもつとフランクにいこうつてことでお互い呼び方を変えたんだ、なつちーは某だからなつちーで、なつちーは私のことみーたんつて呼ぶことになったよ」

「みーたん!?!（グリス）ええ…私なんでそんな大事なことを忘れちゃつたんだらう?！」

「なつちー、すつごくぐぐつすり寝てたから、そういうこともあるよ」

「あつそつかあ（納得）」

少々、いやかなり疑問に思うことが多いですが、まま、ええわ。それに仲良くなつて損はないしね！

という訳でこんな感じに私とみーたんの距離が縮まりましたとき

…：チャンチャン！（井尻）

今後の方針と光るそば

前回のあらすじ

防衛戦RTAはいよいよスタート

←

やったね！私、子が増えるよ！

←

でかいの「やだ、最高（ネズミ）かわいい（ババババ）」子「ホ
ワアアアアア!!（ドーナツ状態）」

←

朝チユン

みーさんと朝チユンかました私は、みーさんにまだ朝食まで時間あるからお風呂入ってきたら？と言われたのでいきますよ〜いきますよいくいく（快諾）と風呂場を使わせてもらうことに（場所は諏訪大社の人にさつき聞いた）それで今現在風呂場に向かっていく最中なのだかさつきから廊下で人とすれ違う度にお礼を言われる。

F o o！（人助け）気持ちいい〜

やっぱりいいこととして褒められるのは気分がいいですねどんどんやりたくなりますよ〜……つと風呂場に着きましたね。じゃあさつそく風呂に入ってきてさつぱりしましょうね〜

風呂に入っさつぱりした私は誰かが用意した着替えを着て一旦部屋に戻ります。というのも私、ご飯食べれる部屋知らないんですよ（迂闊）

部屋に戻ると歌野さんがいた。

「あはようございます。歌野さん」

「グッドモーニングよ。なっちー！」

「お？歌野さん。なぜ、その呼び方を？」

「うん？みーちゃんから聞いたんだけど、私は呼んじゃダメだった？」

「いや、全然！そんなことないですよ」

「ならよかったわ。それじゃ某さんは私のことなんて呼んでくれるの？」

「うーん、そうですねえ……私は王道をゆくう……うーさんで」

「うーさん!？」

（この反応は）ダメみたいですね……これは、さすがに女の子につけるあだ名じゃなか……

「グッド！」

「……え？」

「グッドよなっちー！うーさんいいじゃない！かわいいし！」

「！……それは良かった」

あくよかったー（KNN姉貴）これでもし仲が悪くなっちゃったら気まずいもんね。私達がお互いのあだ名を決めたちようどその時

「二人とも朝ごはん出来たよ」

襖を開けて私達に連絡してくれてのはみーたんだった。

「わかったわ。みーちゃん、すぐ行くわね」

「はい今行きまーす！あつ、うーさん肩貸そうか？」

「サンキューなっちー、でもノープロブレムよ自分で歩けるわ」

「でも、うたのん。あんまり無理しないでね？今はなっちーがいるから諏訪の守りは大丈夫だし、ゆっくり治していこう」

「それはそうだけど、みーちゃん。それだと、なっちーに負担が…」

「大丈夫だって安心しろよ！へーキへーキ、平気だから。ゆっくり休んで、どうぞ」

私が腰に手を置いて胸を張りながらそう言うと、うーさんは観念したのか一瞬、困った顔になったがすぐに、笑顔になりこう言った

「なっちー…わかったわ、一日でも速くケガを治して復帰するわね！」

「ゆっくりでいいですよ」

そして、私達はみーたんの案内で部屋に行くと和風な朝食が三人分用意されていた。

「わあ…！」

「そうね、なっちーじゃ食べましょうか」

私達は席につくと手を合わせ

「いただきます」

「いただきます！す！（マナー）」

昨日晩からなにも食べてなかった私は、汚くない程度に早めに食べる。食べながら、ええ素材やこれは…とか、うん、おいしい！など感想を頭の中で言いながら食べ進める。すると、唐突にみーたんが口を開く

「あのね二人とも…実は相談があるんだけど」

「相談？」

ん？

「実はね、今はまだ神様の恵みのおかげで生活できるけど、それもいつ

かは底をついちやう……そうなたら、あの化け物が襲ってこなくても、食べるものが無くなってみんな飢え死んじやうと思うんだ」

あつそつかあ（理解）たしかにみーたんの言うとおり、このままでは資源が尽きて（飢え）シヌウ……シヌウ！状態になるかそうなる前に食料の奪い合いが起きる可能性もある。最悪の場合人肉ハンバーグを食べることに成るかもしれない……ライダー助けて！（アマゾンズ）でも千翼はこないで（切実）

うーんどうすつかなあ（対策）と考えているとうーさんが手を上げた

「はいー」

お、うーさんなんか思いついた？（期待）

「食糧がないなら作ればいいと思うの」

私はうーさんの言葉を聞いておくええやん（超速理解）と思った。しかし、みーたんはよくわかってなかったようで

「えっと、うたのん……作ればいってどうするの？」

「農業よ！畑で野菜を作れば、食糧不足を乗り越えられるわ！」

「でも、うたのん、農業って言ったって私、全然分らないんだけど……」

「ノープロブレムよみーちゃん！私は農作業を手伝った事があるからだいたい分かるわ」

私も家が農家なんで手伝いますよ！するする（協力）

私がそう言うとうーさんは満面を浮かべて言った

「あつそつなの!? なつちーがいるなら百人力よ……みーちゃんも一緒にやってくれたら千人力なんだけど」

うーさんはそう言いながらチラチラとみーたんの方を見る。私も便乗してチラチラ見る。すると、みーたんは薄く笑って言った

「私が二人に相談したんだから、もちろん私も一緒にやるよ」

「おつし、じゃ、決まり！今日からさつそくさつそく取りかかろう！」
私はウキウキしながら二人に言った。こういうみんなでひとつのことに取り組むのってわくわくする、しない？

「え？……今日から？」

「善はハリーアップよ！みーちゃん！」

「イクゾオオオオオオ!!!」

「でも、その前にご飯食べ終えましょうか」

ん、そうですね（テンション沈静）

朝食を食べ終えた私達はさっそく農業を始めるために土地を探すことになった。

しかし、そう簡単にはみつからずこれもうわかんねえな？（暗礁）と三人で考えるなかで私は切り札を切ることにした。その切り札とは

……

「すいません！畑を貸してください！。オナシヤス！何でもしますから！」

私は土下座をしながら農家の方にホモ特有の交渉術を使いお願いしてみる

「ん？今何でもするって言ったよね？」

「はい……」

「じゃあ、庭の草むしりしてもらおうか」

「やれば貸していただけるんですか？」

「おう、考えてやるよ（貸すとは言っていない）」

とこんな感じに交渉に成功、農家の方から出された条件も三人ではばばッ！と終わらせ、ハゲになった庭を見た農家の方からも

「おうええやん、気に入った（ご満悦）、（そのやる気に免じて）貸してしんぜよう」

と言われたので三人でイエーイ！とハイタッチし合ったんや（変態小五ロリ）

その後、農家の方から準備に時間がかかるからまた、来てくれよな〜と言われたのでありがとナス！とお礼を言って帰った

私達が泊まっている建物に着く頃にはちょうどお昼になっており、昼食をとることにした。しかし、問題が発生した。

「あっお昼はおそばなんだ」

「ナイスなセレクトね！疲れた体にはそばよー！」

「そばよりおうどん食べたい（本音）」

そう、昼食として出されたのはそばだった。しかし、私は四国の生まれ、それに、家の農作業の手伝った後は必ずうどんを食べていた。だからか、つい本音が漏れてしまった。

「むっ！なっちー今のは聞き捨てならないよ」

「そうよ！それに作ってくれた人に失礼よ！」

「すみませんでした」

やっちまったぜ（後悔）と思いながら不機嫌になった二人に謝罪する。しかし、二人の機嫌はよくなるらない。すると、うーさんがあつそうだと思ひ出したように言った

「そう言えば、昨日のうどんそば論争。結局決着がつかなかったわね……ジャストタイミングね、言葉で分からないなら味わってもらえないわ！」

「なっちー郷に入ったら郷に従えだよ。嫌って言っても食べてもらうからね！」

「ええ……」

うーさんはともかくみーたんまで乗っかって来るとは思わなかった。しかし、みーたんの言うとおり、私がいるのは諏訪である、ならば諏訪のルール（？）に従わなければならない。

私は普通のそばでしょ（グミガキ並感）と思いながら、箸を取りそばを一口食べる。すると

フアツ!?

口にいれた瞬間、驚愕と共に私の意識は別世界へと飛んだ。

そこは、ライダーファンの間でムテキエリアと呼ばれる場所でそこではなぜか、白衣を着て胸にそば派と書かれた名札をつけた私と色とりどりの配色の服を着て胸にうどん派と書かれた名札をつけた私が向かい合っていた。

えっなにこれは……と困惑していると白衣を着た私が口を開く

「うどん派、お前との約束を果たす（唐突）」

「約束？なんのこったよ（疑問）」

「お前と私の最後の決着をつける」
うどん派 そば派

「ハハア（苦笑）…いいぜ、やってやるよ（震え声）」

そう言つてうどん派の私が懐からガシヤットギアデュアルを取り出すとそば派の私はマキシマムマイティガシヤットとハイパームテキガシヤットを取り出す

あつ…（察し）

「マックス大変身…！」

「ハイパー大変身…（虚無）」

そして、二人の私はそれぞれパラドクスレベル99とムテキゲーマーに変身する。

「お前と戦うのは今日で最後だ…お前の運命は私が変わる」

「っ…のぞむところだあ！」

うどん派の私はそば派の私に殴りかかるが、軽くいなされ、数発の弱攻撃をもらう。

さらにうどん派が怯んだところでそば派はうどん派の首を掴むとそのまま地面に叩きつける

それを見た私は頭を抱えた。

アカン、このままじゃ（うどん派が）死ぬう！

…いや、待てよ。いくら見たことがある光景だからといって結末も一緒とは限らないだろうし、過去は変えられないけど未来は変えられるって我が魔王も言ってた！

私は自分にそう言い聞かせ顔を上げると…

「ハア…ハア…つ、次こそはお前に勝つ」

うどん派は逃げ出した!▼

「次なんてない…敗者にふさわしいエンディングを見せてやる…!」

光るそばからは逃げられない!▼

ダメだ、やっぱ(諦め)

我が魔王やっぱりダメだったよ…と私は天を仰ぎながらそう思った。

しかし、今ここでうどん派に勝って貰わなければ私は二度と四国の大地を踏めない気がする。

そう思うと自然と体が動きだし柵から身を乗り出しながらこう叫んだ

何をやっているんだ!私(そば)!

すると、私(そば)はこう答える

「四国民だからとうどんにばかり固執し他の麺類を馬鹿にする君の考えを矯正する…だから」

そば派はそう言うともテキガシヤットのボタンを押す

キメワザ!

「まずはその原因となっているうどん派の考えを倒す」

「ま、待ってくれ!わかった、君の言うとおりだ!うどんも美味しいが他の麺類も美味い!特にそば!…けれど、私の中にあるうどんを思う気持ちも大切なんだ!だから…」

「……」ガチツ（ボタンを押す音）

ハイパークリティカルスパーキング!!
しかし、無慈悲にも刑は執行された

「…ハッ!」

ハイパー無慈悲は飛び上がった。それを見た私は思わず声をあげる。

「やめろおおおおお
!!!!!!」
（迫真）

「うわあああああ
!!!!!!」

そして、ハイパー無慈悲の無慈悲な一撃はパラドクスうどんに叩き込まれた。パラドクスうどんは数秒、耐えたが抵抗むなく爆発した。

爆炎が晴れると今にも消えそうなうどん派の姿がそこにあった。

「イヤだ、イヤだ、ヤダア…ヤダア…!」

うどん派は迫真の悲痛な声を出しながら消えかけの体を抱く。そんなうどん派にそば派が近づくと、うどん派はそば派の方を見るとすぐのように呟く

「そ、そばあ……」

「うどん派……私の…勝ちだ」

そう言ってそば派はうどん派にとどめをさした。

なんてことを…（絶望）

わたしはめのまえがまつくらになった！▼

「なつちー？どうかしたの？」

「ハッ！」

私はみーたんの声を聞いて意識が戻る。どうやら、そばが美味すぎてトリップしてしまったらしい。

そして、なにかとても大切なものをなくしたような気がするけど二人がさつきから心配そうにこちらを見てくるのでどうでもいいや

「なんでもないよ」

「それでそれで！なつちー、そばを食べてみてどうだった？」

うーさんが机の上に手をつけて身を乗り出して聞いてくる。

そして、私は満面の笑みを浮かべながらこう言った。

「あゝうめえなあゝ」

それを聞いたうーさんはドヤ顔でこう言う。

「フッフーン、これでうどんよりもそばの方が美味しいということが証明されたわね！」

「やられてしまいました……まさかこんなにも美味しいとは思わなかった」

「フフツ……そうだね。じゃ、私達も食べよつかうたのん」

「OK！、みーちゃん」

そう言つて、二人もそばを食べ始める。その表情はとても嬉しそうなものだった。

それを見た私はあゝいいつすねえ〜と思いながらこんな日々が続けばいいなと思った。

こうして、私とうーさんによるうどんそば論争はそばの方が美味しいという結果で決着がついた。しかし、これのせいで後々地獄を見ることになるうとはこのときの私は思いもしなかったのだった。

水瓶座の卑劣な技

前回のあらすじ

← 歌野と水都との仲が深まる。

← 水都、飢餓を懸念。

← 歌野「ないなら作ればいいじゃない（マリー並感）」

← 畑を借りるため農家と交渉、無事借りられることに

← 某、そば派に寝返る

「あー…疲れた」

ここへ来てから何回言ったかわからない言葉を言いながら座り込む私。
諏訪

というのもここに来てから一週間経ちますが化け物達の進攻が止みません。むしろ増えてます。しかも、先日決めた自給自足のため、農業をすることになったため、その準備のために周辺の農家さんを行ったり来たりしながら諏訪の防衛もしなくちゃなんからで正直イヤ〜きついですと言いたい。

一応、うーさんやみーたんには「畑の方は私たちでやるからなつちーは休んでいいよ」と言われたが農家さんに貸してもらった畑は

そこそこ広がったし、周辺の農家さんにも手伝いをお願いした手前、私だけ作業に参加しないのはちよつとアレな感じがしたので私も参加している。

それにしても、今回は特に化け物の数が多かった。子だけでは足りなかったため辰も召喚して戦ったけどなかなかにてこずった。

さらに、先日の戦闘で姿を見せたでかいのが出てきたこともあつてとても辛い。

「もういないよね…?」

《あつ敵の第1-4波がもうすぐ来るぞ》

「ふざけんな!」

カーナビさんの報告にキレながらも渋々立ち上がり周りを見る。すると、いつもの白いのがわらわらと現れ私の方へ向かつてくる。

「来い!子!」

私はいつものように子を出そうとして思い付く。

「…子を出しっぱで放置してたら楽じゃないかな?」

《そんなことしたらドラえもんのバイバイン回みたく大変なことになるゾ》

「それはそれでいいかもしれない」

もう世界中化け物だらけだろうし今さらネズミが増えても問題ないでしょ…と私は思った。

私は仕方なくいつもの戦法(増やした子で蹂躪)を行おうため子を召喚した。しかし、

バシユン!

召喚した子を先日と大型の狙撃してくるやつにリスキルされる。

「うっそお!」

《あゝあ、リスキル警戒してないから…》

私が突然のことに驚いている間に狙撃型はさらに撃つてきた。

「うわわっ!」

私は攻撃を避けながら鏡を大きくするとそれに飛び乗り狙撃型に向かつて全速力で飛ぶ。

「こんにやろっ!」

当然、でかいのも近づいてくる私を撃ち落とそうと弾を発射してくるが私はそれを剣で捌きながら、でかいのに近づいて行く。

まるで、メタルギアライジングやってるみたいだ…そんなことを考えながら狙撃型に接近し

「細切れにしてやるッ！」

と、殺意マシンマシで狙撃型をブツタ切る。

「おらおらおらおらーっ！」

私はブラボのフンフンおじさんのようなすばやい動きでスパスパ切っているといつの間にか狙撃型は消滅してしまった。

「はあ…しんど…さっさと帰ろう…」

《残念ながらまだ残ってんだよなーこれが》

「もう嫌だ〜ッ!!」

こつち事情も考えてよと私は訴えるが、あちらさんはえ、そんなの関係ないでしょと攻めてくる。全く諏訪は地獄だぜ！

「お…っーらあ…っ!!」

鏡から降りて剣をフルスイングして白い化け物を薙ぎ倒す私。やらなきゃならないことだけどさすがに数が多い。

「ん？」

およそ半数（適当）を倒した辺りで異変に気づいた。

《どうした？》

「なんかこの辺濡れてませんか？」

良く見ると周りの道路や建造物に何かの液体で濡れてテラテラしていた。

「…なにこれ？」

《…全然わからんけど、触らぬ神に祟りなしゾ。とりあえず、無視しとけゾ》

「そうですね」

という訳で謎の液体については無視して、さっさと終らせて帰って働くか……

私は早期解決のために大技を放とうと居合い切りの構えで力をためる。

すると、そこへ連戦の疲れからか見逃した一体が横から突っ込んできた。

「おっと、危ない」

ただ、そんなにスピードは出ていなかったのを見てから回避余裕だった。

しかし、この時私は失敗しました。回避先の地面をよく見ていなかったんです。

……まあ何があったかと言うと回避した先に謎の液体でできた水溜まりがあつたんですよ。えー、それで私その水溜まりに思いつきり足突っ込んだんですよね。ほならね、足が思いつきり滑りましてね、派手にスツ転んだんですよね。えー、そのせいで体中謎の液体でヌルヌルなっちゃって、一瞬にして私は全身ローションまみれの小五口りにされました。

「…やられたな〜」

《……ヌツ！（見抜き）全身ローションまみれでしかも服も若干透けてセクシー、エロい！》

「…変態ですね」

《あっそうですね（自覚）》

ほんと…今日は厄日だわ！どうしよ、これみーたんから借りた服なんだけど。こんなヌルヌルしちやったら絶対怒られるわ…：まあ、それは後で考えるとして、コレ撒いたやつを殺す…！

「カーナビさん…この液体を撒き散らしたやつを探してください」

《かしこまり！》

ユグドラシルぜってえ許さねえ!!とばかりに殺意マシマシで周りを睨み付け見渡す私。すると、カーナビさんから報告がきた

《見つけたゾー！11時方向4514メートル先！》

「遠…：っ！けど、見つけてくれてありがとうカーナビさん！#よっしゃー！いっちょ殺ってやるか！」

私はローション野郎に落とし前をつけさせるべく立ち上がろうとする。

「うお…!?…ヌルヌル過ぎて立てないや…」

ヌルヌルのせいで立てないのである。ヨツンヴァインになり生まれたの小鹿のように手足をプルプルさせるところまではできたがそこから立ち上がるうとするとなちまち地面にビターンッ！である。《…なんというか不様だな》

「…何も言わないでください」

これは困った。コレでは落とし前をつけにいけない。しかし、動くにもヌルヌルすぎて動けない。

そこへカーナビさんが突然、鬼気迫る声で私に言った。

《まずいゾ！目標がこつちに向かってきてるゾ！（警告）》

「ちよ…！こんな時に!？」

これはまずい…！何とかして脱出しなきゃ一方的にやられる…！

私は何とかヌルヌルゾーンから抜け出そうとするが、焦りからか力リキんでしまい倒れてしまう。そして…

「あ…」

《…こいつは…終わったか？》

とうとう脱出が間に合わなかった私を嘲笑うかのように見下ろすでかいのそれに対してローションまみれで地べたに這いつくばり睨むことしか出来ない私。しかも、よく見れば新型だった。

…悔しいな、こんなに強くなったのにこうもあっさりやられるなんて…お父さん、お母さんもしまだ生きてたら先立つ不幸をお許しください。

でかいのを見ると周囲に小さな水玉のようなものを浮かせていた。そして、小さな水玉を集め一つの大きな水玉を作ると私に落としてきた。

「！……！ぼ…っ！」

私は水玉の中に閉じ込められ、慌てて水玉から出ようとしても体は一向に水玉から出ない。

ヤバイ…！息が…！

水玉の中でもがいていた時だった。

「いぼ…っ!？」

突然背中に何かがぶつかって私は水玉から弾き飛ばされ地面に転

がる。

「げほ…っ！げほ…っ！」

吹き飛ばされた私は水を吐き出して、咳き込む。そして、先程ぶつかってきたのは何だったのか確認すると

「鏡…？」

そこにあつたのは鏡だった。しかし、私は操作した覚えがなかったため、なんで？と思わざるおえなかった。

すると、そんな私にカーナビさんが説明してくれた。

《おそらく、お前が心の底から死にたくないと思つたからだろうな。そのため、無意識に鏡を操作してこうなつたのだと思われます。》

「なるほど…」

カーナビさんの説明で疑問が解消されたのでよっころしよ、と立ち上がって気づいた。

「あつヌルヌルが取れてる…」

どうやら、水玉に閉じ込められた際にローションは洗い流されたようだった。

「よし、じゃあ反撃と行こうか…！」

私は同じ失敗をしないよう今度は鏡に乗って新型のでかいのに向かう。

そんな私を狙つてでかいのは水玉を飛ばして来るけど弾飛ばしてくる奴に比べれば全然遅いのでスイスイ避けていく。

「あれ？もしかしてよわいのかな？」

私はそう思いながらでかいの頭上に行くと鏡から飛び降りて、剣を上段で構える。

「はあーっ!!」

そして、そのままの勢いででかいのを上から下まで真つ二つにしてやった。…なんてきれいな断面なんだ、これには断面図大好き兄貴もにつこりすることだろう。

「…さてと、後は小さいのだけっぼいしパパパつとやっちやうか！」

その後、特に問題なく残党を処理したあと私は諏訪に戻り死んだように眠った。

シユー… (第5話終わり)

勾玉で出来ること

前回のあらすじ

← 全く、諏訪は地獄だぜ!!

← 化け物の新種登場

← ローションまみれにされクソザコナメクジ化

← 溺れる！溺れる！（水責め）

← パツカーンッ！（水瓶座が二つに切られる音）

← こうして、平和は守られた。

やあ、おはよう。もしくは、こんにちは。または、こんばんわ。某です。ここに来て早いもので1ヶ月経ちました。

ところで（唐突）皆さん覚えていますか？

私が天の神からもらった三種の神器の一つ勾玉のことを以前、うらすじ（あとがき）の方で地味に能力が開示されたのにも関わらずほんへでは未だに出番がない。しかもその能力も戦闘では鏡があるため、

役に立たないかわいそうな存在を……

なぜ今こんな話をしているかと言うとどうやらこの勾玉君戦闘面では使えないがそれ以外では凄まじい力を発揮する。

どんな力があるのかという先日畑に種を植えたんですがついでに害獣防止用の柵もつけようかなと思っ時にこの勾玉君の能力を思い出したので使ってみることに

そして、次の日に畑を見に行ったら芽が出るどころか、もう実をつけ始めてました。これには、私、とてもたまげてファツ!?と大声をあげてしまいました。

急いで二人（うーさんとみーたん）を呼んで畑を見せると二人も驚いていました。

「えっ、なんでもうこんなに育ってるの!?!」

「アンビリーバボー!?!ほんとにいったい何がどうなってるの!?!」

と、悲鳴に近い声でふたりは言っていました。

手伝いに来てくださった農家の方々もファツ!?ウーン……と驚きの余り失神したりと大混乱になりました。

で、後でカーナビさんに聞いたら勾玉君の力だとわかった訳です。

もう大助かりでしたよ。ええ、ほんと。ただ、これを見た農家の方々が一斉に私に押し寄せて勾玉を貸してください。お願いします！と血走った目で頼んでくるのは止めてほしい。こわい……

うーさんのケガが完治して前線に復帰することになりました。

ただ、病み上がりだから心配だなあと思ってたんでさっそく試しにうーさんに勾玉君を着けてもらったんですよ。

そしたら、うーさんこんなこと言っていました。

「!?……軽い！体が軽いわ！なっちー！フェザーのように！しかも、とてもパワーアップしてる気がするわ！」

と、とても病み上がりとは思えない軽やかな動きをしながら嬉しそうにしてみました。

おかげでその日の戦闘は楽々だったのですが、あまりにも楽だったので油断してしまいうーさんがでかいの（射）に狙撃されてしまいました。が、勾玉君の謎バリアのおかげで無傷でした。よかったよかったです。

ただ、戦闘中のうーさん、スーパーハイテンション状態だと興奮からか攻撃一辺倒になってるから注意しないと、いくらバリアがあるとはいえ安全とは限らないのだから……

その後、謎バリアのおかげで危なげなく化け物達を駆逐して、現在、

寮の食堂でそばを食べてます。

「やっぱり思いっきり動いた後に食べるそばはデリシヤスねえ〜♪」

「うん！そうだね。うたのん」

「そうだねー」

「あつそうだ、ねえねえ、みーちゃん聞いてさっきのバトルの時なんだけどね」

「うん？何かあったの？」

「なつちーが持つてる勾玉を着けてみたんだけどね。そしたら、スーパードでハイパーなパワーが湧いてきてとっても戦いやすかったの！」

「そ、そうなんだ……」

「しかもね！これだけじゃないのよ！なんと……バリアーが出てくるのよ！おかげで——」

先程の戦闘でのテンションがまだ落ち着いてないのか興奮状態で喋るうーさん。そして、そんなうーさんを見てやや引き気味のみーさん。

さらに、ここは食堂なので当然私達以外にも利用している人たちがいる。そして、人々の視線が騒がしい私達（主にうーさん）に突き刺さる。

しかし、うーさんは気付かない。いまだに喋っている。一方私とみーさんは周りの視線に気づいて、恥ずかしさのあまり顔を赤くして俯く。

「う、うたのん！」

「ー私は向かってくる敵を千切ってはスロー千切ってはスローして……ん？何、みーちゃん？」

とうとう周りの視線に耐えかねたのかみーさんがうーさんの話を止める。そして、小声でこう言った。

「周り、見て……」

「え？周り？……あ」

うーさん、ようやく自分が周りからすごくみられていることに気づく。そして、先程までの自分を思い返したのか顔を真っ赤にして周りの人々に

「ソ、ソーリー……」

と、謝罪して席につくと真っ赤になった顔を両手で隠して俯き、一言小声で言った。

「ホールがあつたらインしたい……」

え？……穴があつたら入れたい？唐突になにいつてんだこいつ？と思いましたが、多分穴があつたら入りたいたいと言いたいんだと思います。まあ確かに自分が同じ立場だつたら死ぬほど恥ずかしいですけどね

「うたのん、自業自得だよ」

「うーさんドンマイ」

同情はしますが私達も恥ずかしい目にあつたので厳しく対応します。

「うう……確かにそうだけど……でも二人もわかってたのならもっと早くストップかけてほしかったわ」

と、うーさんは涙目で顔を赤くしながら私達に訴えます。

……か”わ”い”い”な”あ”う”ー”さ”ん”

「そうは言うけど、うたのん。こつちも早く止めなきやと思つたんだけど、話がなかなか止まらなかったから止められなかったんだよ……それに、話してる時のうたのんスツゴク嬉しそうだったから余計にね」

「うー……それでも、ストップしてほしかった……」

・とりあえずそばを食べよう。そんなもって、さっきのことは忘れて、午→後←の農作業に集中しよう

「そうするわ……なっちー……」

そう言うとうーさんは悲しげにそばを食べ始めた。うーさんの奏でるそばを啾る音が私には何故か啾り泣いているように聞こえた。

……か”わ”い”い”な”あ”う”ー”さ”ん”

ひじよゝに恥ずかしい目にあつた(主にうーさんが)昼休憩を終え、私達は畑に来ています。

「いやゝそれにしても、野菜が育つのが早いのはいいけど、雑草まで育つのが早いのは厄介だよね」

「そうよねえ、それさえなければスツゴく便利なんだけどねえ」
「そうだね」

実は、この勾玉君の野菜というか植物の成長を早める効果。当然、雑草にも適応される。これが、とても厄介な代物であり、ほつとくとあつという間に畑が草だらけになってしまう。だから、こうして毎日草抜きをしなければならぬ。それも、一日に二回。

ただ、この作業かなり精神的にくるものがある。想像してほしい。自分が抜いたの所を後で見ると新しい芽がこんにちわしてくるのだ。たまつたものじゃない。

そして、この苦行、手伝いに来てくれる農家の方からも嫌われている。最初は皆、積極的に参加してくださつたが今では、やれ用事あるなど、やれ腰が痛いだのと何かと理由をつけて拒否する人が増えた。

そして、私達も無理を言つて手伝つてもらつている手前強制なんて出来ないのです、私達だけでやっています。

「しっかし、今日もホットねゝ」

「夏だからね……。それに、今日も熱帯夜になるみたいだよ……」
それを聞いたうーさんは顔をしかめた後、ため息を吐いて一言言った。

「はあー……。早く、オータムにならないかしら……」
「ホントにね……」

わかるよその気持ち、私も毎年、夏に入ると思ってます。早く秋になれと……

「……ねえ、なっちー」

「なに？うーさん」

うーさんが手を合わせてお願いするようにして私に言ってきた。

「今晚だけ勾玉使っちゃダメ？」

「ダメだよ」

「お願い！どうか、今晚だけ、今晚だけだから！」

「ダメだったらダメだよ」

「もー、うたのん。暑いのはみんな一緒なんだから一人だけ涼もうなんてしたらダメだよ！条約を忘れたの？」

さて、唐突に条約という単語が沸いてきたところで皆さんに説明をば

実は、また、みーたんの方から提案というかお願いがありました、なんでもこの諏訪を守ってる神様の力をもつと結界の方に回せるように神様からの恵みである水や電気を節約しようということになりました。

ただ、この暑さですからさつきも言ったように熱帯夜の日は地獄です。

どうしてもものかと考えていたとき、また、勾玉君が真価を發揮しました。なんと、勾玉君結界の範囲内の温度調整もできるみたいで見つけた時は

やるじゃない……（ニヤツ）

と、思わずにやついてしまいました。が、このことを私だけ知っているのはずるいと思いい二人にも言いました。

ふたりは大喜びでこれで安眠できる〜！なんて言っではしゃいでました。

そして、うーさんが言いました。

「私達だけ使うのはずるいから他の人たちにも分けましょう！」

それを聞いた私は良いアイデアだと思いましたが、よくよく考えてみたら数が全然足りません。そして、私はその事を二人に言うときみーたんが言いました。

「順番に使えばいいんじゃないかな？」

それを聞いた私はお前は甘い！とみーたんを注意しました。そして、二人にこう言いました。

「このご時世ですからみんないろいろとストレスが溜まってると思います。で、そんなところにこんな数に限りがある便利グッズ放り込んで争いの種になりますね。だから、この事は私達三人だけの秘密にして他の人には話さないことにしましょう……当然、私達も勾玉君を使いません。当たり前です。みんな我慢してますからね。何か反論はありますか？」

私が二人にそう聞くと二人はしゃいでました首を横に振って同意しました。

「では、これにて諏訪条約を締結します」

こうして、諏訪条約が生まれました。以上、説明終わり！

「うー……でも、ここ最近のホットナイト続きで寝不足なの、だから、お願い！どうか今晚だけ！」

「お断りします」

「うー……あつーじゃあ、私の秘蔵の最高級そばをあげるから！お願いー！」

——最高級そば……だど？そういうのもあるのか（孤独のグルメ並感）食べてみたいなあ……でも、ここは我慢して

「…賄賂は受けとりません」

「…わかった、我慢、します」

…うーさん、若干泣きそうになってない？何かすつごい罪悪感が沸くんですがそれは

と、思いましたがどうか理解してほしいです。これも葦名……じやない、諏訪のため……がんばろう、うーさん！

シユー…（第6話完）

真夏の夜の襲来 前編

前回のあらすじ

勾玉君スツゲー

←

うーさんパワーアップ!

←

だめです (無慈悲)

←

これも葦名諏訪のため……

ほんへ、はいよいよいスタート (棒読み)

「——今日もまた、一段と敵の数がメニーね。なっちー」

・そうですねえ…… (同意)

時刻は深夜一時、化け物の襲来を知らせるサイレンにたたき起こされた私達二人は結界の外にある高い建物の屋根の上に立って、こちらにゆっくり近づいてくる化け物の群れを見えています。

それにしても、今日は敵の数が多いです。いつもなら、20〜30ぐらいの白いののなかにかいのが1か…2ぐらいいる群れなのに対し、今日のはざっと200〜300ぐらいの白いのと見たことあるタイプののでかいのと新型のでかいのが合わせて20程いる大群。これはいけない。(警戒レベル最大)

……さて、どう守ろうか。向こうは大群に対しこちらは二人、辰や子を使っても捌ききれるか(これもう)わかんねえな。けど、大丈夫っしょ、私には(アーク○イツで培った)経験がある。

「……ねえ、なつちー」

・何ですか？

私がア○ナイトで培った知恵をフルに使って作戦を考えているとうーさんが話しかけてきた。私が応えるとうーさんは続けてこう言った。

「私達は……いつまで、諏訪を守っていられると思う？」

・そうですねえ……1、か2年ぐらいですかね……(推測)

「なつちーの力でも？」

・そうだよ(肯定) 戦いは個人の力量じゃなく数だっけはつきりわかんかね。というか、この広い諏訪を私だけでカバーするのは無、無理です。

「そっか……あのね、なつちー」

「話の途中で悪いが敵との距離が近くなってきたゾ」

！………わかった。ありがとうカーナビさん

カーナビさんの言葉で周りを見ると敵の群れがすぐそばまで来ていた。

・ごめん、うーさん！話はまた後ででいい!?

「……別に構わないわ。さっさと倒しちゃいましょう！」

・わかった。じゃあ、作戦を説明するね。今回はシンプルだよ
「へえ、どんな作戦？」

・高度な柔軟性を維持しつつ臨機応変に対応作戦

「?………それってどういっ……」

・つまりは行き当たりばったりってことです

「なるほどそう言うことね！理解したわ！……って待つて!?それって作戦!？」

・そうだよ（肯定）

「それって作戦っていえないんじゃない？」

・大丈夫だって安心しろよ！（危なくなったら助けに行くから）へー
きへーき、平気だから

「……わかったわ。こっちもなっちーが危なくなったら助けに行くからね！」

そう言うとうーさんは屋根から屋根へと飛び移るように離れていく。私はあんまり遠くいかないでねーどこにいるかわからなくなるからーと思いつながらうーさんが向かった方向を確認しておく。

「あいつの今着ている勇者服っていうやつ結構目立つから大丈夫だと思っぞぞ」

・いや、それでも一応確認はしとかないとね

実は少し前に諏訪大社の方から今後はこの装束を戦ってもらいたい。ということを言われた。理由は不明、しかも、何か特別な力とかが有るものでもないのによく分からない代物である。なので、勇者服に勾玉君を仕込んで強化している。

・それにしても、あの服かわいいなあ……私もほしかったなあ……
（羨望）

なお、私の分は無かったので私はTDNジャージ（上長袖、下半ズボン）です。ハアー（クソデカため息）

そんなことを思いながら私は離れていくうーさんをしばらく見た後、剣を抜いてうーさんとは別方向に移動する。

・さあ〜と化け物さん達、最近暑すぎてロクに寝れてないんだ。しかも、今、君達のせいでたたき起こされたんだよね、だから、今すつごいストレス溜まってるとだよねー。だからさ……

多分、今、私はすごく悪い笑みをしていると思います。でも、しょうがないよね。どんな人でもたまにはガス抜きが必要なのだ。

・お前らでストレス発散させて貰うね！答えは聞いてない！

そんな理不尽極まりないことを言いつつ私は手始めに斬撃を飛ばす。すると、射線上いた白いのは跡形もなく消滅する。これにはごちやごちやした戦いが好きじゃない緑の牛のライダーの人もにっこりだろう。

・F O O！気持ちいい〜♪（ぐ）満悦）！……おととと、危ない危ない

地球防衛軍に出てくる虫のように大量にいた白いのを一撃で消せた爽快感で笑顔になっているとそれを隙と見たのか残った白いの間を通過でかいのの正確な射撃が私を襲う。しかし、こいつとはここへ来てから何度も殺り合っているのを見てから防御余裕でした。

・じゃ、（そちらに）流しますねえ（反射）

鏡の能力を発動させて射撃をする。すると、反射された射撃は白いのを数体巻き込んで、でかいのを貫き。でかいのは爆発四散！サヨナラ！

・いや〜それにしてももうかれこれ一ヶ月経ったけど化け物退治も大分慣れてきたなあ〜もうこの辺の奴に負ける気しないわ（慢心）

・暴れんなよ……暴れんなよ……

飛んできた水玉を左右にステップして避けながら近づいていく。

・殺す…ツ！コロスウツ！！（アマゾネス）

殺意全開で全力疾走してある程度近づいた所で奴に飛び付きそのまま奴の体を蹴って頭上へと飛び上がる。

・オリヤヤヤヤヤヤヤツ！！

そのまま落下致命を奴の脳天に叩き込む。私の落下致命を喰らった奴は特に断末魔とかを叫ぶことなく静かに逝った。

・なんとか言えよ、変態（不満気）

しかし、私はその死に様が気に入らなかった。出来ればギリギリまで苦しませてから殺したかった。でも、まだたくさん敵が残っているのではないね。

・次は誰にしよツ！？

その時だった。私が次のターゲットを探していると
ギユイイイイイン！！

というオーバードウエポンの駆動音が聞こえたと思ったたら長い尾の先に丸ノコが付いた新種のでかいのが丸ノコを回しながら私に振り下ろしてきた。

・ン”ン”ン”ン”ン”ン”ン”ン”ン”！！（ふんばり）

突然だったため避けれず剣で受け止める。その瞬間今まで感じたことのない衝撃が私を襲い、剣と丸ノコが火花を散らす。

・ちよっ!?アツ!アツイ!!

頭上で散らされる火花が降りかかりめちやくちや熱い、しかし、上から丸ノコで押さえ付けられているからああ、逃れられない!

アツ!ちよつと服の中に入った!あつつい!!

・この……いい加減にしゴフツ!!

上からのくる圧力と火花を耐えていた私に横から白いのがタツクルしてきた。そのおかげか私は丸ノコのプレスから抜けることができた。

・イテテ……でも、たすか——

が、安心したのも束の間ふたたび丸ノコが振り上げられ私に振り下ろされようとしていた。

・ちよっ!?ちよつと待つてください!待つて!助けて!待つてください!お願いします!ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア” (迫真の悲鳴)

そして、丸ノコが振り下ろされようとした瞬間

「なっちー!!」

うーさんが持つてる鞭を私の腹に巻きつけて引っ張ってくれた。おかげでフェイタリテイされずにすんだ。

・ごめん!ありがとう、うーさん!

「言ったでしょ！危なくなったら助けにいくつて！」

私は立ち上がると丸ノコ野郎を見る。……全くもつて殺意が高いデザインである。しかも、でかいくせにそれなりに早いときた。……
実に厄介だ。(フィリップ並感)

「どうする？なつちー？」

・一つだけ方法があるよ……でも、これで状況が好転するかは分からないけどね

「それってどんなプランなの？」

・まだ召喚していない十二支があと10体いるからその中からあいつを倒せるやつを引き当てる！

「えっ？……それってガチャじゃ？」

・そうだよ(肯定)

さあていいの出てくれよなく頼むよー。

そう願いながら私は念じる。なんか龍騎のストレンジベントみたいでドキドキするなあ。

すると、空から小さな流れ星のような光が降ってきて私から少し離れた場所に落ちる。やがて、落ちた光は大きくなり形を変える。その姿はまるで――

「ゴリラ？それもビツクな……」

・さらにマッシュにしたキングゴングをメタリックにしたみたいな感じスツね……カーナビさんあれは何の十二支ですか？

《あれは申の十二支だゾ。見た目どおりのパワータイプゾ》

ギューイイイイイン！！

私達が召喚した申に対しそれぞれ感想を述べていると丸ノコ野郎が丸ノコの回転数を上げながら召喚した申に突進してきた。

そして、振り上げられた丸ノコが申のメタリックな大胸筋に叩き込

まれるが申は微動だにしない。それどころか、そんなもんか？とでも言いそうな雰囲気である。

私は思った。勝ったな（確信）とそして、私は申に言った。

・おもいつきりやつちやつて!!

私がそう言う waited ましたと云わんばかりに申は丸ノコを掴んで止めると尾の部分掴んで引っ張りそのまま、ぐるぐると回し始める。

やがて、遠心力に耐えられなかったのか丸ノコ野郎のしっぽがちぎれ胴体が複数の民家を巻き込んで吹っ飛ぶ。そこへ申が飛びかかり胴体の上に踏みつけるように着地するとそのままマウントポジションで殴り付ける。そんな豪快な戦いっぷりを私達はしやがみながら見ていた。

・おもいつきりやつてとは言ったけど周りのことも配慮してくれよなー頼むよー

「そ、そうね……それにしても、すっごくストロングでワイルドな戦い方ね！とつても頼もしいわ！」

・そうだよ（同意）

でもね、（街が）あーもうめちやくちやだよ。まるで、怪獣映画をみてるようだもの。建物が発泡スチロールでできてんのかっていうぐらい軽々と吹き飛んでんだもの。これもう（どっちが味方か）わかんねえな？

「なつちー！あのゴリラ君に任せつきりしないで私達も戦わないと！」

・あっそうですね（うっかり）

さて、とはいってもでかいの達は申が一番脅威だと感じたのか知ら

シュー…
(第七話完)

真夏の夜の襲来 後編

前回のあらすじ

← サイレンに起こされ（深夜一時）

← いつもより多めの化け物と戦うことに

← 丸ノコvs申

← もうあいつだけでいいんじゃないかな

← この辺に何もせずサボってるやついるらしいつすよ

← じゃけん殺りましょうね↑今こ→こ←

・しっかしあいつかなり高いところ飛んでますね。カーナビさん、あいつ今どの辺りにいるんです？

《10000メートル程ですねぇ》

・はえくすつごい高い……でもまあ、鏡あるし余裕しょ！

私はそう言うのと鏡に飛び乗り一気に飛び上がる。音速の一步手前ぐらいのスピード（適当）で上昇していると敵の姿がはつきり見えてきた。

……あれー？おかしいね、何にもしてこないね
カーナリー（誰？並感）近づいたけど、まったくのノーリアクションでなんか寂しい…寂しくない？

・カーナビさんこいつ何にもしていきませんが寝てるんですかね？

《死んでんじやない？（コマンダー並感）もうさ、パパパツと殺って終わりでもいいんじゃない？》

・それはそうなんですけどね…何か、こうアクションが欲しかったっていうか無抵抗のやつ一方的に殴るのはちよつと…

《お前は甘い！（マコト兄ちゃん並感）いいか！殺れる時に殺っておかないと要らぬ犠牲を生むんだゾ！（半ギレ）》

……すいません（素）

今まで聞いたことがないような怒声で叱りつけられ謝るしか出来ない私、いやあんな怒鳴られたらふざけられないわ

・すいませんカーナビさん真面目にやるんで許してくれませんか？

《許してしんぜよう》

ほつ…（安堵）よかつたあ、カーナビさんいなかったら色々困るんだよなあ…さてと、カーナビさんに言われた通りさっさと殺りますかあ

私は鏡を右足でとんとんと軽く蹴ってから

・オリヤヤヤヤヤヤヤヤツ!!（五代並感）

と、叫びながら思いつきり蹴り込んだ。すると、化け物はびっくりしたのかビクツと体を動かした。そして

ブツチツパツ!!

・あっなんか出た

《ウ○コじやない？》

こいつ、驚いた拍子に何かを落としたな…：：：？
いつか、じゃ…：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：？（無慈悲）

私が化け物に止めを差そうとすると

ドオオオオオオオオオオツ!!

という爆発音が下から響いた。

・フアツ!?何の音!?

下を覗いて見ると私の真下にある地上からキノコ雲が昇っていた。

・カーナビさん!?

《おそろくさつきこいつの落とした物だゾ!どうやらアレは爆弾らしいゾ!》

・ナンテコツタイ／(ゝqゝ)／…:はっ!うーさんは、カーナビさんうーさんは大丈夫!?

《生体反応はあるから生きてはいるぞ。ただ、無事かどうかはわからんゾ!——!不味いですよ!奴さんまた催してる!》

・(町の上で) 出すな、出すな、出すな!!

しかし、私の制止の声を無視して奴は漏らした。私は思ったお前、う○こ爆撃機かよと

・ヤバイよヤバイよ!カーナビさんどうしよ!?

《回り込んで受け止めるんだよ!あくしろよ!!》

・ウオオオオオオ!!間に合ええええ!!

私は急いで鏡を垂直して急降下させ、落とされた爆弾を追う。

・桂ア!!今なんキロオ!!(爆弾との距離)

《残り14メートル!》

・もつと飛ばせえええ!!

《無理だゾ!!これ以上はスピードが出ない!!》

・だったら!こっから飛び込んでブツタ切つてやる!

《無茶だ!!出切るわけがない!!》

・それでも、やるんだよ!人間の根性舐めんなああアア!!

私は鏡を思いつきり蹴つて加速して爆弾に向かって落ちる

・オオオオオオ!!とどけええええツ!!

あんなに遠かった地面が猛スピードで迫ってくる感覚のなかついに私は爆弾に追い付いた。

・セイハアアアアツ!!(鎧武)

そして、爆弾を剣で真つ二つにした。

・やったぜ

《やったぜ》

私とカーナビさんは喜びと同時に安堵した。ところが、切った爆弾が突然光を放ち始めた。それを見た私は

あつ（察し）ふーん…（諦め）

とこの先の展開が大体分かったので諦めた。抵抗しようがないからねしようがないね。

そして、私は光に包まれた。

・ホワアアアアアアアアツ!!

と、どこぞの司令官のような悲鳴をあげながら地面に向かって落ちる私。そんな私を先回りした鏡が受け止めた。

・ゴフツ!

ただ鏡なので当然硬いだから、スゲー痛い（主に背中が）でも、生きてるから良しとしよう。

《全く無茶をするなあ（呆れ）》

・ハハハ…でもまあ、おかげで爆弾は防げましたし、いいんじゃないですか？

《それでももう少し自分の体を気遣え、自分は良くてもあいつらが悲しむゾ（忠告）》

・う”……（罪悪感）そうですね、気をつけます

《↑——また、落としてきたゾ!》

・またですか!!あいつ貯まってんなあ……とりあえずさつきと同じ方法でいきます!

《いや、それよりもっと安全かつ迅速に爆弾を処理できる方法があるゾ!》

・何ですかそれ!?

《酉とりを呼ぶんだゾ!》

ここに来て新しい十二支か!それも酉かあ、多分飛行タイプなんだろうな。

私はカーナビさんに言われた通りに酉を呼び出す。

おいでー酉ちゃん（ゼロワン並感）

私がそう念じると空から小さな流れ星のような光が落ちてくる。その光は落ちながら形を変え大きな鳥の姿になる。その姿は猛禽類

…特に鷹や鷲に似ていて申の時同様メタリックだった。

・おー…ええやん、かつこええやん（感想）

《感想なんかいつてる場合じゃないゾ！早くそいつに乗るんだゾ！》

・はい！じゃ乗りますね

私が背に乗ると西は大きな翼を広げ一気に飛び上がった。そのスピードは鏡とは比べ物にならないくらい速かった。

・はやーい！サラマンダーよりずっとはやーい！

《ヨヨ死ね（お約束）…一応、簡単に西について説明しとくゾ。こいつは高速機動が得意でな、戦い方としては一撃離脱が主だゾ》

・なるほど、大体分かった（ディケイド並感）

私は西にさらに加速するよう目立つから念じる。すると、西はさらに力強く翼を振るい加速する。

・！——見つけた！

私は先程落とされた爆弾を発見した。そして、そのまま近づきながら剣を構える。

・タイミングを合わせて……そこッ！

そして、すれ違い様に爆弾を切る。少し間を置いて私の後ろで爆発が起こる。

・よし、うまくいった！

《この調子で本体も殺るゾ！》

・わかった！

私は西にヤツの所に向かうように念じ、真っ直ぐ本体へ向かう。

《また、落としてきたゾ！それも複数！》

・全部落とす！

西をさらに加速させ、爆弾を切りながら上昇する。

・あつ！また！

ヤツがまた爆弾を落としてきた。私は再び爆弾を切ろうと構える。すると、切る前から爆弾が輝き始めた。

・ちよっ!?そういうタイプもあるの!?

私は慌てて鏡を前面に構え、爆発から身を守る。

・あつぶえ…鏡使えなきややられてたな…（冷や汗）

あと、今ので気づいたけど酉使うと鏡での防御ができるってのは非常によろしい。今まで空中だと防御手段なかったからね。……よし、このまま一気に行こう！

私は先程と同じように本体に向かって上昇する。近づくと爆発するタイプの爆弾は鏡で防御して、そうではない普通のタイプの爆弾は切り飛ばす。

そしてついに――

・フツハツハツ!! (上をとったア!! (ゲナム並感))

勢い余ってこのう〇こ爆撃機の頭上をとった。

・これで決める!

《必殺技音声は任せろバリバリ》

・ハアアアアアツ!!

《キングギリギリスラッシュュ!》

我が魔王の事実剣のようにエネルギーで出来た刀身をう〇こ爆撃機に叩き付け真つ二つにする。それでももう大丈夫だろうと私は思ったが断面から中にあつた爆弾がぶち撒かれ地上に落ちていったのを見て叫んだ。

・アカアアアアアアアアアアンツ!! (お祭り男)

慌てて落ちていった爆弾を処理するが時すでに遅しいくつか爆弾は地上に落ちてしまい、ここに町があつたとは思えない程に破壊されてしまった。……おのれデイケイド (言いがかり)

ついでに地上にいたでかいのも白いのも戦っていた申も爆発に巻き込まれたようで見当たらなかった。そして、うーさんの姿も見えなかった……

地上に降り、改めて町の惨状を目の当たりにして私は思った生存者はいないと、絶望のあまり建物の残骸の上で膝をつき涙を流しながらマモレナカッタ…

と一言呟いて。先に逝ったうーさんに泣きながら土下座で謝罪した。

・うう……ああ、ごめん、なさい……ごめんなさい……！

本当なら……ヒヤシンスでも供えたかったけどそんなものここにはないのでひたすら謝り続ける。

・うーさん、うーさん……！ああ、うううさあん！！

「呼んだ？」

ウワアアアアアアアアツ！！（OMG）

私は聞こえるはずのない声を聞いて顔を上げるとうーさんがいて私は驚きのあまり恐怖心の表情で残骸から転げ落ちた。

「ちよつ!?大丈夫、なつちー!？」

そんな私にうーさん慌てて駆け寄って手を差し出した。

一方、私は目の前のうーさんが本物と思えなくて罪悪感から生まれた幻覚だと思った。しかし、差し出された手をつかむと温もりを感じ、目の前いるのが本物のうーさんだと実感した。

・あ、うう……う、う”う”う”う”う”う”う”う”う”さ”あ”あ

”ん”ツ!!

「ワツツ!?どうしたのなつちー!？」

実感した途端、安堵からかうーさんに抱きついた。

・う”わ”あ”あ”ん”よ”か”った”、よ”か”った”無

事”でえ”え”え”!

「……あー、ごめんなさいね。心配させちゃったみたいね……」

・私、私の方こそごめん……！、私のせいでうーさんにひどいこと

をオオン!! (大号泣)

「そんなことないわ!それに、私はこの通り無事よ!」

・ぐすつ…………え?…………あつほんとだ

うーさんの体をよく見ると全身煤だらけだがケガはしていないようだった。

・でも、何で?あんな絨毯爆撃みたいなことになったのに?

「あーそれはね、爆弾が降ってきた時にゴリラ君が庇ってくれたおかげでケガせずにすんだわ!…………もしまた会えたらお礼言わなきゃね」
…………うん、そうだね

いや、ほんと今回の戦いはお前がMVPだよ申…………本当にありがとう (感謝) これからもよろしくな

そう思いながら空を見上げると申がサムズアップしているように見えた。

「…………夜が明けるわね」

・ほんとだ…………もうそんなに時間が経ってたなんて

気がつけば、もう日の出の時間だった。それを認識した途端緊張が解けたのか急に睡魔が襲ってきた。

・ふあく…………今日も疲れた…………帰ろっか、うーさん

「…………そうね、今にも眠りそうよ…………もういつそこで寝ちやおうかしら」

・それは危ないからちやんと帰ろうね。

こうして、真夜中の襲撃から諏訪を守った私達だったが結界の中に入ったと同時にわずかに残っていた緊張の糸が切れたのか二人同時に倒れてしまい、そのまま眠ってしまった。

そして、これは後から聞いた話なのだがあのあと、みーたんが私達の帰りが遅いことを心配して迎えに来たらしく、そこで倒れている私達を見て諏訪中に響く程の悲鳴をあげて諏訪の住人全員が起きたとか…………心配かけてごめんね、みーたん (謝罪)

シユー………… (第8話完)

引っ越し準備

前回のあらすじ

真夜中に化け物の襲来を知らせるサイレンが鳴り響き、諏訪の防衛のため出動した主人公と白鳥歌野。結界の外で化け物を待ち構えている二人の前に現れたのは今までの規模を大きく上回る大群であった。しかし、主人公が新たに呼び出した十二支「申」「酉」のおかげで見事、諏訪を防衛するのだった。

真夏の夜の襲撃を乗りきった日からさらに一ヶ月が経ち、私達はいつものメンバーでそばを食べていた。そんな時、私は二人にあることを提案した。

・引っ越そう、二人とも（唐突）

「……………へ？」

「……………え？」

私の唐突な提案にそばを食べていた二人の動きが止まる。そこかしらしばらくその状態が続く。やがて、いち早くフリーズから立ち直ったみーたんが口を開いた。

「……………えっと、なっちー、引っ越すってどこへ？」

・四国へ

「……………私達だけでいくの？」

・まさか！諏訪にいる人全員連れていきますよ！

「……………どうやって？」

・諏訪にある車を全部使ってます！あ、道中の安全は大丈夫です。

私とうーさんが全力で守ります！

「ちよつと待って!?何かすごい簡単に言ってるけどそれは無謀すぎない!?!」

「ここでようやくうーさんのフリーズが直る。そして、無謀だと私に言った。」

「そうだよ！それに、諏訪に住んでる人の中にはお年寄りの人もいるんだよ!?ここから四国までの道のりを耐えられるかどうか……」

「……ここまでは私の予想通りの返答だ。」

・フツフツフツ……そうだよね、確かに二人の言うとおりの案は正直言ってガバガバもいいところではある。しかーし！、そんな二人の懸念を同時に解決できる方法を昨日思い付いたんだよね〜！

「……それってどんな方法?」

「みーたんが若干ひきつった表情で私に聞いてきた。……そんなに聞きたいかい?なら、教えてしんぜよう」

・じゃあ、さっそく説明するね。……と、その前にこの地図見てください

「私が机の上に地図を置くと二人は地図を見る。」

「?……諏訪から明石海峡大橋までレツドラインが書いてあるけどこれはなに?」

・おっさすが、うーさん！良いところに目をつけますねえ！

「いや、それしか書いてないんだけど……」

・まあそれはおいといて、その赤い線だけどそれが実際に移動するコースだよ。」

「えっ?ちよつと待ってなっちーこれ地図に載ってる道とか無視してるけど、どうやって進むの?」

「みーたんが地図に書かれた赤線を指差しながら私に言った。それに対し、私はドヤ顔でこう返した。」

・簡単だよ、その赤線の通るところにある建物とか山を壊して一本道にするんだよ！

「バーンツ!と後ろでそんな効果音がなりそうな感じで私は言った。どうですかあ〜?このあらゆる面で1000%のプロジェクトは〜」

？（自信満々）

そんなことを思いながら二人の反応を見ると二人は困ったような表情でお互いの顔を見合うと小さく頷いて私の方を向いた。そして、二人同時にこう言った。

「いや、無理でしょ」

・いや、無理かわかんないだろ！（ヒゲクマ並感）

「いやいや、無理だよなっちー、それにその道を作るのっていつまでかかるの？」

・一週間ぐらいでパパパツと……（楽観的）

「えっ!?一週間でこの距離をやるうとしてたの!?そんなの絶対無理よ！」

・できらあ！（鋼の意思）

「うたのん、多分なっちーは疲れてるんだよ。最近、忙しすぎて頭が回らなくなっちゃったんだよ……休ませてあげないと……」

どうしてわかってくれないんだ二人とも……しかも、みーたん遠回しに頭おかしいって言った？、そつか……あつたまきた、二人してそんなこと言うんだったらやって見せてやろうじゃねえかこの野郎……！

私は残ったそばを一瞬で食べた後、皿を返して食堂を出た。後ろで二人の制止する声が聞こえるが聞かなかったことにしよう。

諏訪く明石海峡大橋までの一本道を作るRTAはーじまーるよー。
結果を出てからタイムスタート、目標タイムは一週間以内（これっ

てRTA?)このRTAを走ることになったきつかけですが話す時間も惜しいので話しません。まずは、方角をコンパスで確認、これをミスると再走案件です。(0敗)

方角を確認したら後は簡単です。ただひたすら真つ直ぐ進みながら邪魔になるもの全てを破壊するだけです。まずは手始めに住宅街を破壊します。ここで気をつけることは一撃目で必ず粉々にする事です。うまく粉碎できていない分攻撃回数が増えるからです。

そして、ある程度建物を破壊できたら子たちを召喚して処理できなかった小さな瓦礫や建物の土台をきれいにします。では、ここからは単調な作業になりますので

みーなーさーまーのーたーめーにー

真夜中の襲撃

あの日からの一ヶ月で起こったことを話したいと思います。といっても、そこまで重要なことは(起こって)ないです。

ただ、あの日からも襲撃はあるものの今度はいつもより少なすぎるんですよええ……いや、まあ少ないならそれはそれで楽でいいんですがね、実際少ないときはうーさんと一緒に喜んでましたから楽できるわ……ってでも、私にはこれが嵐の前の静けさにしかならないんですよ。これが、さつき二人に引越しの提案をした理由の一つだったりします。

……え?、他の理由は何かって?……そうですね、この前カーナビさんに聞いたんですけど四国には勇者がなんと五人いるらしいんですよ。なら、味方の多いそっちに行った方が二人で守るよりかは全然楽だろうと思ったんですよ(負担の分散)

それに、四国は神様の集合体であ神樹様のお膝元ですからここよりは資源も豊富でしょうし行くしかないですよええ……

その為にも1日でも早くこの道を開通させねば!(使命感)

あつ……尺がもたないわこれ……しようがない、カットしていきま
スウウウ(RTAでカット?)

1日目終了

長野県県境付近

・やられてしまいました……まさかこんなに作業が難航するとは思
わなかった（予想外）

《バツカじゃねーのお前（辛辣）》

・うるさいんじゃない！（半ギレ）全く誰だよこんなの一週間でやるつ
て言ったやつは！

《お前じゃい！あんなにあいつらが止めてたのにそれを無視して強行
したのはお前じゃい！》

・モシヤモシヤせん……（反省）

《ハアー（クソデカため息）……とりあえず今すぐ戻って二人に謝ろう
（提案）今ならまだ許してもらえるって、な？》

……出来ぬ（鋼の意思）

《は？（半ギレ）》

・あんな大口を叩いたにもかかわらず、出来ませんでしたでは格好
がつかぬ、やると言ったからにはやらねば……！

信頼関係って築くのは難しいけど壊れるのは簡単だからね。しよ
うがないね。

《ハアアアア……（くそ長ため息）どうなっても知らんゾ》

・とりあえず今日はもう寝ます。朝イチから作業いきますよ〜いき
ますよ、いくいく……スヤアア（就寝）

二日目開始

長野県県境

・朝だアアアアアア御満公！（挨拶）

《うるせえ！（半ギレ）》

今日も張り切って安全第一にいきましょう。そして、今回は昨日の反省を生かして、辰と申で破壊して私がその瓦礫を吹き飛ばして最後は子できれいにします。それでは、作業開始い！

《はいよいよいスタート…（呆れ）》

作業のためカットしまーす。

最終日開始

兵庫県神戸付近

・いや、カットしすぎい！！

《うるせえ！（全ギレ）》

・ちよつとどういうことですかカーナビさん！どうして私達のこれまでの苦勞がきちんと書かれてないんですか！？

《（カットされて）当たり前だよなあ？ただただ、町やら山やら破壊する5日間とか単調すぎて使えるか…このたわけが（憤怒）》

・そんなことないです！いろいろありましたよ！この5日間！

《例えば？》

・化け物の襲撃を見事に返り討ちにしました！

「ああ、あつたなそんなこと」

・じやあ何で使わないんですか!?

《襲撃ついても白いのが20か30ぐらいの小規模のものだったし、それもお前が一撃で処理しちゃったしどう使えつてんだよ》

・う”……な、なら……山を崩したところとかは……? ”

《“主人公の放った斬撃は山を分かち道を作った。”の一文で済むからな、使えねえよ……このたわけが》

・そんなあ……(絶望)

私はカーナビさんの慈悲のない言葉を聞いて、ショックのあまり膝をつき、……あーマジカーファントム生まれそーとか思いながら涙を流しました。さらに、カーナビさんは話を続けます。

《それになー、お前がよかれと思ってやってるこれも端から見れば化け物達と変わらんゾ》

・は? (困惑) 何でそうなるんですか? ”

《あの化け物達の……というより、主の目的は人類の抹殺と人類が今まで築いてきたものを破壊することだからね、つまり、この時点でお前は化け物の仲間入りつて訳》

・そんな……つもりじや……(焦燥)

《お前にそのつもりが無くても周りの人間はそう思うだろうな》

ナンテコツタイ／＼(q)＼みんなのためにやっていたことがまさか、あいつらと同等の悪行だったとは……!これはいけない。早く中止しなければ……!

そう思い、私が作業の中止を命じようとした時だった。

《まさか、ここまでメチャクチャやった挙げ句、何の結果も出さないまま諏訪に帰るなんて言わないだろうな? 》

・えっそれは……(凶星)

《始めたからには終わらせないとな? 》

・ッ!わかりました!わかりましたよ!最後までやりますよ!なんだったら、石ころ一つないきれいな道に舗装してやりますよ!

《ほう、いい心がけだな。何事にもベスト尽くす姿勢、実に良い。しかしだ、そんなに時間をかけて良いのか? お前が諏訪を離れてからもう、かれこれ一週間近く経つが? 》

・うっ……そうだった。(考えなし)

《ハァー(クソデカため息)いいか?お前がみんなのためにこんなことをするのは勝手だ。けどそうなった場合誰が諏訪を守ると思う?》

《……歌野だ。歌野はお前が抜けた分の穴を埋めようと努力するはずだ。だからお前が帰って来なきや、どんな敵にも立ち向かうだろう。けど、今のあいっじや諏訪を守りきれない。そうなれば、化け物の連中はよってたかって諏訪を攻める。……お前が早く帰らないといけないんだよ(スターク並感)》

・あつそつかあ……(池沼)私としたことが作業を優先させ過ぎて肝心なことがお座なりだったよ……

《なら、やるべきことはわかるよな?》

・はい!速攻で作業を終わらせて、速攻で帰ります!

《その通り!さっさと終わらせてまた三人でそばを食べようじゃないか!》

・はい!

剣を横に構えて意識を集中、刀身にエネルギーを貯めていく。そして、十二支達に射線上から離れるよう念じ、離れたのを確認したあと、思いつき振るうと同時にエネルギーを解放する。

・ハアアアアアツ!!

放たれた巨大な斬撃は地面には傷をつけない絶妙な角度で十二支達があらかじめ破壊した建物の残骸を飲み込み。大橋を越えて……ん?越えて?

そのまま四国の結界にぶつかつた……(事故)

・アカアアアアアアアアン!!(迫真)

《ウツソだろお前w笑っちゃうぜw(爆笑)クツハツハ!だから、人間は面白い!(エボルト並感)》

・笑い事じゃないですよ!不味いですよ!やべえよやべえよ……どうしよう、力みすぎた。(焦燥)

《まあ確かにやべえな、見てみるよ。ヒビ入ってるぜ》

カーナビさんにそう言われ結果を見てみると、ここからでも見える程に巨大なヒビが入っていた。……やっちゃまったぜ(後悔)

・ どうしましょう……

《そうだなく逃げるしかないな》

・ あっそうですね（即同意）

じゃけん空飛んで逃げましょうね〜（いそいそ）

《あっおい待てい（江戸っ子）》

西を呼ぼうとする私をカーナビさんが止めた。

《どうせなら（逃げ）帰りながら道の確認をしよう（提案）という訳で新しい十二支の出番だゾ》

・ わかりました……けど、何を呼ぶんですか？

《午うまを呼べ》

・ 午ですね、わかりました！

私は指示通り午を呼び出すため念じる。——来い！午！

いつものように流れ星のような光が私の近くに落ちて、形を変え、
これまたメタリックな一角獣の姿になる。……カツコいい（感想）

《さあ、さっさと乗った乗った！早く帰らないといろんな意味でピンチだぞ》

・ は、はい！……では失礼して、よっこいしょつと！（騎乗完了）

《諏訪までノンストップでいくゾ！》

・ はい！……それでは、四国の皆さんごめんなさああああい！！

こうして、私は脱兎の如く逃げ出した。（乗ってるのは馬）……四国の人達、本当にごめんなさい。

私は帰ってきたアア!!

前回のあらすじ

諏訪の防衛の限界を感じた某は四国への移住を思い付く。しかし、その事を歌野と水都に相談したところ無理だと断じられてしまう。真つ向から否定された主人公はなぜか怒りに燃え、直情的になり自らの案を強行。なんとか道は出来たもののその過程で四国の結界を損傷させてしまい。諏訪へ逃げ帰るのであった。

.....

・うおおおおお!!足を止めるなアア!!(オルガ並感)
どうも、某です。ただいま、大急ぎで逃げてます。

……ん?逃げるなつて?嫌だね、私はまだ死にたかねえんだ!
チキショー!何であの時もつと加減しなかつたんだ!そしたら、こんなことにならずにすんだのにー!

こんな感じで後悔しながらすさまじい速度で進んでいると
・あつ!見えた!諏訪だ!

諏訪の街が見えてきた。しかし、スピードは落とさない。
というのも、午に乗って走り出してすぐから誰かにみられているような感じがしてならない……しかも、その気配は時間が経つにつれ増えていってるような気がする……!(恐怖)具体的に言うとなんかぐらいに……!(分析)

そして、私はそんな恐怖と戦いながら結界の近くに来た。

やった……!あと少し……!

もう少しで帰れると思いき気が緩んだときだった。

つつん

・ひゃん!?

何かが私の背中を固いなにかでつついた。私は驚きのあまり体が固まってしまおうと同時に思った。

やっぱり何かいるうう…… (恐怖)

やはり、後ろでずっと感じていた気配は気のせいではなかった。

今、私の後ろには確実に「何か」がいる……!

・あわわわわわわ…… (パニック)

もう恐怖で気が狂う……! 状態である。

つつん、ポフポフ、ポンポン

ふええ……何かやわらかいよお……! 肩叩かれたよお……! (戦

慄)

そんな私を追い詰めるように更なる攻撃が私を襲う。

・すいませんすいませんすいませんすいませんすいませんすいません

ん……!

もはや謝るしか出来ない私。そこへさらに

シヨギョームジョー

・イヤアアア……シャツベッタアア……アツアツアツ…… (マジ泣

き)

とうとう喋りだした何かに私は恐怖のあまり泣いてしまう。

もうやだあ……許し亭、許し亭……

と、泣きながら懇願していると

ガリツ

・イッタアイ!

今度は、何かが私の二の腕を噛んだ。しかもそれは、噛み千切るのではなく、すり潰すように噛んでくるのだ……すぐく痛い。

・あー! 痛い! 痛い! 痛い!! 痛いんだよお!! (半ギレ)

私は痛みに耐えきれずとうとう振り向いてしまった。そして、そこにいたのは――

・ん?……あつ!みーたん!

声が出た方を見てみるとそこにはみーたんがいた。農作業帰りなのだろうか手に軍手をつけ、鎌を持っている。

・ただいま、みー「なつちいいい!」ゴフツ!!

みーたんにただいまを言おうとしたら泣きながら抱きつかれた。なんで? (困惑)

・ゲホツ……み、みーたん、どうしたの急に?

「う……ぐす、だって、食堂で私とうたのんがなつちーにひどいこと言ったせいで……なつちーがどこかに行っちゃって、慌てて追いかけたけど、いなくて……探しても見つからなくて……!」

あー、そう言えば私頭に来てそのまま強行したんだっけか……しかも、一週間……そら心配しますわ。

「ごめんなさい……ごめんなさい……!なつちーがみんなのことを思っただけでくれたことなのに……!」

・大丈夫だよ、みーたん。私、気にしてないよ (五代スマイル)

「でも……」

・それに今回は私が悪いよ。もつと、相談してたりすればこんな喧嘩みたいなことにならなかったから……だから、今度は一緒に考えよう!
う!

「なつちー……うん、そうだね!」

みーたんはそう言って笑顔で頷いた。

「じゃあ、早速うたのんも呼んで道作る以外の案も考えようね」

・あつそれももう終わりました。

「……え?」

・開通しました!諏訪から四国までの一本道が!

「ええーっ!」

...

あのあと、うーさんとも出会い。先程と同じような感じになったが同じように解決したので気まずくならずにすみました。(適当)

そして、現在私は二人に開通した道を見て貰おうと現場に向かっていきます。

・さあ皆さんこれが私の作った道です！

「……………」

あれ…………？二人とも反応が薄いね。アピールが足りないのかな？しようがないなあ

・私の作った道って美しくないか？(自画自賛)まるで、平坦で石ころ一つない道だ(そのまんま)つまり、この道を使って四国へいこ「ねえ、なつちー…………」な、なんですかうーさん？

突如うーさんが私の話を遮った。それもなにやら不穏な雰囲気を纏いながら

…………え？なんですかなんですか？(恐怖)

と、うーさんの変わりように困惑しているとうーさんはこう言っ
た。

「この前、なつちーが私に特撮を薦めてくれたじゃない？」

・あ……………ありましたね。そんなこと…………

「それでね、私見てみたのそしたらすっかりハマっちゃってね…………特に好きなのが『仮面ライダーサガ』なの」

・は、はあそうですか…………あのうーさんそれ今言うことですか？

「ええ…………今言うことよ。だって今から…………王の判決を言い渡すもの」

…………え？

「(農業)王の判決を言い渡すわ…………ギルティよ！」

・グエツ！〜っ！イツタ〜！

頭から落ちたためかなり痛かったが目には比べればマシ

・ハアー……この短時間に痛い目に遭いすぎじゃない？

私が最近の出来事にうんざりしていると、卵のようなマスコットが近づいてきて私の頭を優しく撫でた。

・お前、良いやつだな……

ムシャムシャ

……ん？

私がマスコットのやさしさに感動しているとピンクの牛みたいなおマスコットが縄を齧っていた。そのお陰で縄はボロボロになっていた。

これなら、力づくで千切れそう。

そう思い、思いつきり力を込めるとブチッ!!と縄が千切れた。

・F O O! (解放されて) 気持ちいい〜

うーんと、体を伸ばしながら体の調子を確認していると六体のマスコットが寄ってきた。

・さつきはありがとうね。おかげで、自由になれたよ。

もう私にはこのマスコット達に対する恐怖心は無くなっていた。むしろ、愛着が湧いてきていた。

よく見ると可愛いんだよね……

まず、緑色の毛玉みたいなマスコット。この子は、見た目通り柔らかくあと、何か良いにおいする。

次に先程、私の頭を撫でた卵のようなマスコット。この子からはやさしさを感じる。あと、卵から出ている小さい手がかわいい。そくと、手を差し出すと握手をするように私の指先をその小さな手で掴んだ。メチャクチャかわいい。

次に犬のようなマスコット。この子はしっぽがフサフサですつごく触り心地が良い。首にしっぽを巻き付けるとこそばゆいが気持ちいい〜♪

次に私の目をどついた紫の鳥のようなマスコット。この子は正直よくわからない。他の人はかわいいと言うかも知れないが私は微妙

だ。まず、なに考えているのか全然わからない。ボーっとしているのか、それとも何か企んでいるのか、全くわからない。

次に縄を切って私を自由にしてくれた一番良い子。ピンクの牛みたいなマスコットは、このぷにぷにのお腹が触って見ると、とっても気持ちが良い。あと、目もまんまるでかわいい。

すると、ピンクの牛みたいなマスコットが私の手に顔を近づけてきた。

……ん？撫でてほしいのかな？しようがないなあ〜♪

頭を撫でてやろうと手を伸ばした時だった。

ガリッ

・いったああい!?

突然、噛みつかれた。それも、すり潰すように

・離せ、オイイ!

私は腕をブンブンと振り回してマスコットを手から外す

・お前は悪い子だ! (半ギレ)

とりあえず、こいつの口に猿ぐつわしなくちや (使命感)

私は牛のマスコットに縄で猿ぐつわする。すると、縄をムシヤムシヤしでした。

……これでしばらくは大丈夫かな、よし、二人の所に行こう

とりあえずの対処すんだので私は二人の所に行こうとした時だった。

シヨギョームジョー

私の行く手を遮るように甲冑を着たマスコットが前に出る。どうやら、自分には何かないの?とコメントを要求しているようだ。

しかし、この子には特に言うことがないので(かわいくないし)せいぜい、喋れるんだ、すごい(棒)くらいである。

・あー……ノーコメントで

しかし、気を使って嘘をつくのもかわいそうなので正直にコメントすることになります。

すると、甲冑のマスコットは落ち込んだのように黙ると一言喋った。

ゲドウメ…

・ええ…… (困惑)

お前そんな言葉も喋るのか……というか、誰だよこの子に言語登録したの。もつと使いやすい言葉を登録してやれよ。

まあ、いつか。では、イクゾー！ (デッデッデデンカーンッ！) という訳で？新たに六体のマスコットが増えました。敵か味方か分からないから、安心は出来ないけど今は一緒に行動しよう。

……ペット大丈夫かな？私達が住んでる所……

しんじて

六体の謎のマスコットを連れ、うーさんとみーたんがいるであろう宿に着いた。そして、無断でペットを中に入れるのは不味いと思いき、関で二人を呼ぶ。

・うーさん、みーたんいるー？

しかし、二人どころか誰も返事をしてくれない。

・おかしいな？いつもなら、誰かしら居るんだけど……

不審に思い、マスコット達にここで待機するよう言っただけで……すたすたと廊下を歩きながら部屋を確認してみるが誰もいない。

(あれー？おかしいね、誰もいないねー？……何かあったんですかね？)

と、心配になりながら廊下を歩いていると

「——出来るわけがない!!」

と、男性の怒鳴り声が聞こえてきた。

何事!?!と驚きながら、聞き耳をたてるとどうやら、この先にある大部屋に何人が集まっているようだとなった。そして、なにやら揉めているようだった。

(なんで、揉めてるんですかねえ?)

不思議に思った私は大部屋の前で座り込んで盗み聞きすることにした。

すると、また男性が怒鳴った。

「だいたいなんだ、この無茶苦茶な移動計画は!あまりにも雑すぎる!」

「そうだ、そうだ!」

あつふーん……大体分かった。これ私の言った四国への移動計画について会議してるんだな……そして、おじさんの言うとおりで思うよ。私の計画、雑すぎるもの……いや、雑どころじゃないね。だって——

「計画内容がまっすぐ直進ってどういうことだ!」

これだもの(呆れ)……もはや、計画じゃないもの。何かの案内み

たいになつてるからね。しょうがないね

「しかし、このまま諏訪にいてもいつまで持つかわからんぞ。だから、勇者様が我々のためにわざわざこのようなことをしてくれたんだ」

「だからといって、これは余りに杜撰過ぎるだろう。もつと事前にもんなに相談するべきだったんじゃないか？」

……おつしやる通りでございます。(反省)

「……そんな時間もないほどに危機的な状況と言うことじゃないか？でなければ、このような強引な計画を実行するとは思えない」

「それならば、なおさらみんなと相談すべきだったのでは？」

「そんなことしてみろ、あの夜の出来事で精神的に病んだ住民達が恐怖でパニックになるぞ。勇者様はそれを分かっていたからあえて、全員には計画を伝えず白鳥様や藤森様といった身近な者にしか伝えなかつたのだろう」

「さすが勇者様じゃ……！」(感涙)

え、なにそれは……？(困惑) そんなこと考えてなかつたんですけど、フツに二人に話しただけなんですけど……

「だが、どうする？四国に行くにしてもそこまでの距離をどう進んでいけばいい？燃料は？食糧は？」

「四国までの道はなっち……某さんが(物理的に)切り拓いてくれたので問題ないです。食糧の方は沢山取れた野菜を某さんの勾玉の能力で保存して持っていきます。燃料の方は……諏訪中からかき集めてなんとか用意します。」

あつ、みーたんいたんだ。

「だが、移動中に化け物に襲われたらどうするんだ？とてもじゃないが大人数で移動する関係上守るのは難しいぞ」

「それについては安心してください。某があらゆる脅威から全員を守ります。」

え？待って、みーたん？

「……そんなことができるのか？」

「そうだ！いくら勇者様でも無茶じゃないか？」

そうだ！そうだ！(他人事)

「……いえ、できます。……某さん、いえ、なっちーならそれが出来ます！……今までなっちーは諏訪の人達のためにすごい事を起こしてくれました。だから、今回も必ず全員を無傷で四国に送り届けます！……どうか、なっちーを……私の友達を信じてください！」

えええええ!?待って、みーたん!?ハードル上げないで!?

「し、しかし、住民の中には体が弱いものや病人がいます。そういった者はどうするおつもりで?」

「そういった人達の乗った車にはお医者さんも一緒に乗っていたいただいて異常があればすぐ診てもらえるようにします。……もし、それでダメなら、なっちーが何とかします!」

もうやめて!みーたん!これ以上ハードルを上げないで!?!というか、病人の治療なんてしたことないよ!?

「み、巫女様それはいくらなんでも——」

「信じてください。なっちーを」

「し、しかし——」

「信じてください」

「で——」

「しんじてください」

「アツハイ」

みーたん、まさかのごり押しである。いや、いい大人が小学生に負けるなよ……(困惑)

「では、皆さん、採決を取ります。……四国行きに賛成の方は手を上げてください」

あれ?この会議、みーたんがしきつてたの?

「賛成です」

「賛成じゃ」

「賛成です。巫女様の言葉を私は信じます」

「同じく」

「……全員、賛成のようですね。……では、皆さん明日より準備に取り掛かってください。準備が完了次第、みんなで四国へ柔らかな向かいます。……皆様、どうかよろしく願います」

「お互い頑張りましょう。巫女様」

「はい、そうですね。……では、私はお先に失礼します。」

「お疲れ様でした。巫女様」

あつやババ。みーたんが出てくる。

私は急ぎつつ、静かにその場を離れた。

...

大部屋の前から部屋に戻った私は先程の事について考えた。

・あー……どうしまひよ……

まったく困ったもんじやい。みーたんめ、とんでもないこと言ってくれたなあ。……あーヤバい胃が痛くなってきた……（不安）ただまあ、あそこまで言われたならもうやるしかないよね。……よし！

・カーナビさん

《なんだ？》

・十二支に回復系の能力持っている奴っている？

《ああ、いるぞ。それも、高性能な奴》

・どのくらいの性能なの？

《体の欠損以外であればどんな傷や病も治せる程度には》

相変わらず十二支の能力はすごいなあ（小並感）

・充分すぎるぐらいだよ。カーナビさん……もうこの際だからさ、他の十二支のことも教えて……今回はぶっつけ本番でやるわけにはいかないからさ

《しようがねえなく（悟空）……今夜は寝かせねえぜ（イケボ）》

・わあー気持ち悪い（辛辣）

《ああん、ひどい（レ）》

さて、責任重大だ。真面目に行こうか……

・じゃ、カーナビさんオツスお願いしまーす

あ……マスコット達忘れてた。……しゃーないずっと玄関においてくわけにもいかないから呼びにいくかあ。

・よっこいせ……

私がマスコット達を呼びに行こうと立ち上がると私の前にマスコット達が現れた。

・うおっ!?!びつくりした……急に出てこないでよ

私は突然現れたマスコット達に文句を言ったが卵みたいなのマスコット以外は知らん顔で好き放題やっている。卵みたいなマスコットはすみませんと頭を下げるような動作した。……お前、ええこやね
・お前らも見習わんといかんのちゃうんか？

私は他のマスコット達にそう言ってみるがまったく反応がない。まったく自由な奴等だな（呆れ）……ハァー（クソデカため息）

もういいやと私は畳の上に寝転んで、カーナビさんに言った。

・じゃ、気を取り直してカーナビさんお願いしまーす

《やるのはいいが、あいつらほっといいていいのか?》

・もう宿に上がり込んでますからねえ……ま、怒られたら外に放り投げますよ。

《……そうかい、じゃあ、始めるぞまずは——》

私はリスニング学習に集中するため目を閉じた。

・
・

ガリツゴリツ（手を噛まれる音）

・いつてえええええ!?

突然手に走った激痛に私は目を覚ます。慌てて手を確認するとピンク牛がまた噛みついていた。私は思いつきり腕を振ってピンク牛を手から外す。外れた勢いでピンク牛は吹っ飛んでいき近くにいた甲冑のマスコットにぶつかる。

ゲドウメ……

・近くにいたお前が悪い（王蛇並感）

ピンク牛に齧られながら甲冑のマスコットは恨み言を私に言うがとりあえず無視する。

・ふあゝ……結構夜遅くまで教えてもらってから若干寝不足だなあ……

ちらりと時計を見ると少し朝食まで時間があつた。

・あつまだこんな時間か……復習でもするか（勤勉）

復習のためカーナビさんと呼ばうとした時だった。

「なっちー？起きてる？」

・あつ、みーたん。起きてますよ

私がそう言うときみーたんは襖を開け入ってくると、おはようと挨拶されたので私も挨拶する。そして、みーたんは座っている私の前に座り込み。そして、小さく深呼吸をしてから真剣な表情で言った。

「今から大事な話をするけど、その前に聞いておくね。なっちー、もしかして昨日の会議聞いてた？」

・はい、聞いてましたよー本人のいない所で無理難題をできると宣言する巫女さんの声が（半ギレ）

「……それについてはごめんなさい。……でも、なっちーならできるって思ったから私はあの場で言ったんだ。だから、どれだけ周りの人が信じなくても私は信じるよなっちーのこと」

・まあ、信頼されてるのは悪い気はしないけどさあ。それでも、相談くらいはしてほしかったよ

「ホントにごめんね……」

・許す（即決）

私がそう言うともみーたんは手を合わせて謝った。そのしぐさがないか可愛かったので私は許した。かわいいは正義、異論は求めん（ごとき氏並感）

「ありがとう、なっちー。……それでね、事後確認になるけど、昨日私が言ったことって出来るの？」

・出来ますよ（サムズアップしながら）

「本当!?……なっちーってなんでも出来るんだね」

・さすがになんでもは出来ませんよ。それに、私自身の力でもないですから

あくまですごいのは十二支であって私じゃないともみーたんと言うとみーたんは首を横に振って私に言った。

「ううん……それでも、なっちーのおかげでたくさんの人達が助かる。だから、なっちーはすごいよ」

・……じゃ、そういうことにおきますね

ここまではつきり言われて謙遜するのはアレなので素直にみーたんの称賛を受け入れることにした。

「あ、もうこんな時間……」

・ん？

壁の時計を見てみるともう朝食の時間だった。今思えば昨日晩飯を食いそびれたので無性に腹が減っているので早く食いたいと思った。

・じゃ、行きますか〜細かい話はそのあとで……いいよね、みーたん

「別に大丈夫だよ……あつそうだ、ついでに聞かせてね、一週間の事」
・いいよ〜たっぷりと聞かせてあげるね。私の活躍を！

そんな会話をしながら私達は立ち上がって食堂へ向かう。部屋を出ていく時に卵のマスコットがいつてらっしやーいと手を振っているのが見えた。……あいつらのことも言わなきゃ……

こうして、四国へ向け移動するための準備が全体的にスタートするのだった。

・そういえば、うーさんは？

「さあ？朝早くにどこかに言ったみたいだけど？」

同刻 諏訪某所

「なっちいいいいい！どこいったのおおお!!」

大声で叫びながら必死で友を探すために諏訪中を走り回る勇者がいたとかなんとか

(四国へ) 行きてえなあ…

某と水都は宿の食堂にやって来た。食堂には、すでに何人か利用していた。二人は、カウンターにて朝食を受け取ると空いている席に座る。

「おー、今日も美味しそうだ。いただきます」

「いただきます」

「ん〜♪美味しいね、みーたん」

「そうだね、なつちー。特にお野菜が美味しいよね」

「同感く、こういうのって自分たちで作ったから余計にそう感じるのかもね」

「そうかも」

二人はそれぞれ料理の感想を言いながら、嬉しそうに食べ進める。すると、そこへ――

「ハア…：…ベリーハングリー…：…」

まだ太陽が昇り始めたばかりだと言うのになぜかへとへとになっている歌野が腹を押さえて食堂に入ってきた。

「あ、うたのん。おはよう〜、今までどこ行ってたの?」

「いや〜それが、昨日なつちーを吊るしたまま忘れてて…：…つて、アアアアア!!」

「わっ!、うるさっ!」

水都と一緒に食べていた某を見た途端、某を指さして叫ぶ歌野。その大音量の叫びに食堂にいた全員が耳を塞ぐ。

しかし、歌野はその事に気づかないのか、はたまたどうでもいいのか。そのまま、某に詰め寄った。

「なつちー! いったい、今までどこにいたの!?! というか、どうやってあの拘束から脱出したの!?!」

「いや、声大きいしそんな一辺に質問しないでよ。まず、私は拘束から脱出した後はずっと部屋にいたよ」

「…：…へ?」

「それで、どうやって脱出したかという…：…帰る途中で付いてきた

マスコットに助けられたんだ」

「は？……マスコット？」

「えっ？……なに、それ？」

某の予想外の返答にポカンとする歌野と困惑する水都。そして、某はそんな二人の反応を見てこう言った。

「やっぱり、そんな顔になるよね。今から説明するからうーさんも早く朝ごはんもらってきなよ」

「わかったわ、取りに行ってくるわね」

歌野は朝食を取りにカウンターへ向かった。その間、水都が某に話しかけた。

「ねえ、さっき付いてきたって言ってたけど、もしかして、ここにいるの？」

「うん、部屋にいるよ。私とみーたんが話してるときも普通にゴロゴロしてたとけど……あれ？気づいてなかったの？」

「……全然気づかなかったよ……？本当にいたの？」

「いたよ」

「本当に？」(ズイツ)

「本当に」(ズイツ)

某と水都は身を乗り出して見つめ合う。方や本当です信じてくださいと真剣な眼差しでもう一方はほんとお？と疑うようなジト目で

「……何か隠してることない？」(ズズイツ)

「……誓ってそのような事はやってません」(目を逸らしながら)

「なっちー。なんで目をそらすの？やっぱり何か隠してない？私怒らないから言っごらん」

「(そんなことは) ないです」

「じゃあなんで目をそらすのかな？」

(しまった……！)

水都がさらに顔を近づけて某を見る。その一方で某は内心焦った。なぜなら、四国へ行った時に四国の結界にヒビをいれるということでもない事をやらかしている。もし、その事が二人にバレれば昨日

よりもきついお仕置きが執行されるだろう。

「そ、それは……」

「それは？」

「み、みーたんの……かわいい顔を、至近距離で見るのが恥ずかしくつて……」

「え？……あ／＼／うう……！／／／」

水都は某の言葉を聞いて思わず赤面してしまう。そして、思いの外顔を近づけていたことにも気づき引つ込むように席に座り、顔を下に向け恥じらっている。

当然、先程の某の発言は話を逸らすためのものであり本心ではない。が、水都は純粋な心の持ち主なので信じてしまった。

そんな水都の様子を見て某は安堵する。

(……うまく誤魔化せてよかった)

そこへ、朝食を持った歌野が戻って来た。

「二人ともお待ちせ……ってどうしたの？二人とも？」

「いや／＼にでもないよ」

「そ、そうだよ！うたのん！何にもなかったよ！」

「そう……？」

「それじゃ、うーさんも来たことですし始めますか」

歌野が席に着くと某は二人にあの一週間の事とマスコットのことを話すのだった。

・・・

朝食を終えた某、歌野、水都の三人は部屋の前に来ていた。

「さあ／＼と、ではお二人にお見せしよう。私を救った恩人……いや、恩マスコットを！」

「本当にいるの？ なつちー？」

「いーるーんーでーすー！ ねえ、うーさんは信じてくれるよね？」

「……じつは私も正直なところ信じていないわ。ソーリーなつちー」

「そ、そんなあ……うーさんまで信じてくれないなんて」
話を信じてくれない二人に対し某はシヨックを受けるが気を取り直して襖に手をかける。

「口で言ってもしんじないなら……その目でしかと確かめよ!!」

某は襖を左右に勢いよく開けた。そのことに驚いたのか中にいたマスコット達が一齐にこちらを向いた。

某は二人の方に向き直り、部屋の中を指さしながら言った。

「はいーこの子達が例のマスコットです！」

「……」

「あれ？ どうしたの二人とも？」

思ったよりも反応がない二人に首をかしげる某。すると、水都が首をかしげながら言った。

「？……どこにもいないよ？」

「え？ なんいってんのみーたん目の前にいるよ？」

某はそう言いながらちようど目の前に置いてある座布団の上で寝ている牛のようなマスコットを指差しながら言うが

「リアリー？……どこにもなつちーをレスキューしたマスコットはいないけど」

「うーさんまで!?!……そうだ！」

某は座布団で寝ていた牛のようなマスコットを掴むと二人の前に突き出す。

「これなら、わかるよね!?!」

「ん〜？……ごめんね、なつちーやっぱりわかんないや」

「あ、でも、なんとなくなつちーがなにかを持ってるように見えるわね……パントマイム？」

「持つてるようにじゃなくて、ホントに持つてるんです〜!……は!? まさか……!」

某はここまでの二人の反応を見てある考えに至った。

(もしや、このマスコット達は私以外には見えないのでは？もし、そうだとしたら二人のこの反応も頷ける！)

どうやら、二人にはマスコット達が見えないようだった。そこで、某はマスコットの存在を証明するために次の行動に出る。

「ねえ二人とも！今私が持つてるこの子触つてみてよ！」

見えないのなら触れてもらおうと思い、某はマスコットを突き出したまま二人に言った。

「どれどれ……何にもないわよ？」

歌野が某の持つマスコットを触れようとするが、なんと歌野の手はマスコットの体をすり抜けてしまった。

「なん……だと……？」

某はその事に驚愕するが続けて水都にも触つて貰う……が、やはり、すり抜けてしまった。

「そんな……お触りもダメだなんて……」

某はショックのあまりその場でペタンと座り込む。もうマスコットの存在を証明することができないのかと諦めかけていたとき、某は部屋の隅に立っていた剣を見て思いついた。

(……これなら、行ける気がする！)

思い立ったら即実行とばかりにさっそく某は牛のマスコットを置いて剣を取ると

「ほら、キャッチしな！」

ポイッと剣を放り投げた。すると、卵のようなマスコットがキャッチする。そして、それを見た二人は悲鳴のような声を上げる。

「え!?……嘘、なんで、なんで剣が浮いてるの!?!」

「ア、アメイジング……!」

そんな二人の反応を見て某はどや顔で嬉しそうに言った。

「ね、だから言ったでしょ！マスコットはいるって！」

「ほ、本当にいたんだ………ごめんね、なっちー、今まで疑ったりして……」

「私の方もごめんなさい」

「いいよ、いいよ！二人とも謝らなくなつて！それに、見えないし触れ

ないんじや仕方ないもん！」

剣が浮いている光景を見てようやくマスコット達の存在を信じた二人は某に謝った。一方、剣を卵のようなマスコットから受け取りながら某は気にしていないと返した。

「でも、そのマスコット達って何者なの？」

「それが私にも分からないんだよね……けど、悪いやつではないと思ってるよ。それに、結構かわいいんだよね」

歌野の疑問に某は近くに来ていた緑色の毛玉のようなマスコットを撫でながら答える。すると、水都は羨ましそうに言った。

「可愛いんだ……ちよつと見てみたいけど、残念……」

「そうだよ。このかわいさを二人と共有できないのが本当に残念だよ」

某も少し残念そうな表情をしたがすぐに表情を戻して水都に言った。

「でも、いつかは二人にも見えるようにするよ」

「そっか……ありがとう、なっちー」

「期待して待ってるわ！」

「うん！待っててね！必ずやって見せるから！」

三人の間の空気が良い感じになった頃、ヤツがまたやらかす。

ガリッ（手を噛む音）

「イツ……タアアアアイ!!!」

「なっちー!?!」

「どうしたの!?!」

諏訪のとある宿で少女の悲鳴とそれを心配する友の声が響くのであった。

またね

長くかかると思われた四国への大移動の準備は某達三人と自治会の役員達の頑張りで思いの外スムーズに進めることができた。

特に、高齢者や病人達の説得では某が堂々と「皆さんは私が守る!!」とRX式安全宣言をしたおかげで今まで移動することによりあまり乗る気ではなかった彼らを納得させることができたことが大きいだろう。

そして、今日——ついに四国への大移動が決行された!

...

時刻は早朝まだ太陽が登り始めた頃、某達は泊まっている宿にて

「みーたん、うーさん荷物ちゃんと全部持ったー?」

「オーケーよー! なっちー!」

「こつちも問題ないよ、なっちー」

某達は昨日まとめた荷物を再確認していた。といつても三人ともそんなに自分の荷物がなないのでリュックサック一つで済んでいるが

「なんか、あれだね……こういうのやっていると修学旅行思ひ出すよね……」

「あー確かに……」

水都の言葉に某は同意すると同時に思い出した。

「そういえばあの日も修学旅行だったんだよね……」

「え? 何の話?」

「あつ、ごめん。声に出ちゃってた?……関係ない事だから気にしないでいいよ」

思わず声に出してしまいその声を聞いた歌野に事情を聞かれるがひらひらと小さく手を振って気にしないでと言う某。

しかし、歌野は某へ近づき真剣な顔で某を見る。そのことに某は何事？と戸惑いながら歌野に聞いてみる。

すると、歌野は真剣な表情のまま某に言った。

「今思えば、なっちーのことってあんまり聞いたことないなあ……て思ってる」

「あーそういうえば、そうかも」

「あれ？そうだったけ？」

歌野の言葉に水都も某が来てからのことを思い出しながら同意した。一方、某はすつとぼけたような声で応える。

「そうよ、それにすつごい今さらだけどなっちーの本名って何て言うの？」

「そういうえばそうだよね。某って本名じゃないよね？」

「あはは……やっぱ、バレた？」

歌野と水都の指摘に頭をかきながら笑う某（偽名）。

「バレたってやっぱり偽名だったの!？」

「いや、当てずっぽうかい」

自分で言い出したのにも関わらず一番驚く歌野。そんな歌野にツツコミを入れる某（偽名）。すると、歌野はペタンとその場に座り込むと両手で顔を隠して泣き始めた。

「そんな……なっちーが私たちを騙すなんて……ウツウツ」

「うわーそんなへったくそなウソ泣きする人初めて見たー」

誰が見てもウソと分かるウソ泣きをする歌野に感情のこもってない棒読みで呆れる某（偽名）

「あはは……ところでなんで偽名なんか？」

「あーえつと……すつごいしょうもない理由なので聞かないで下さい」

水都の質問に某（偽名）は困ったような表情で回答を拒んだ。

「えーせつかくだから教えてよー」

そこへ立ち上がった歌野が某の両肩を掴んで某の体を揺らしながらめんどくさい酔っぱらいのように絡む。

そんな歌野の手を退かしながら某は若干嫌そうに歌野に聞いた。

「教えて教えてって……うーさんどうしたの？こんな朝っぱらからこんな絡んで……？」

「いや、その……ちよつと昨日怖い夢を見ちゃったの……」

「怖い夢？どんな？」

「なつちーがね、私たちを置いてどこかへいつてしまう夢。」

「私が……二人を、置いて？」

「そうよ、私たちがいかないで！って言ってもそのままどこかにいつちやつて、それで私たちは追いかけるんだけど全然追いつけなくて最後に見えなくなってしまうの」

「……」

「だから、私思ったの……もし夢みたいになつちーがどこかにいつてしまふ前になつちーのことをなんでもいいから知っておこうって……」

「……ん？あれ？私が居なくなることは確定なのうーさん？」

「もちろんそんなことになってほしくないし、させないわ。でも、なんでかすごく不安なの……」

「あはは……うーさんは心配性だなく、大丈夫だって安心しろよ夢は所詮夢だよ」

「なつちー……」

「それに、私が二人と離れるわけないでしょ。」

腰に手を当て笑いながら歌野を安心させるように言う某。そんな某を見て水都は口を開いた。

「いや、ついこないだ勝手に四国へ行つたよねなつちー……それも、私たちの静止を無視して……だから、うたのんは不安なんじゃないかな？」

「あつ、そうよ！きつとそのせいだわ！なつちー、貴女その辺り信用ないのよー！」

「ぐっ！それを言われるとなにも言えぬう……」

水都の鋭いナイフのようなツツコミと歌野の槍のような非難の言葉が某の胸に突き刺さる。あまりの威力に某は胸を抑え座り込むが自業自得なので誰も助けない。

そんな某を見下ろしながら歌野はお構い無しに聞いた。

「それで話を戻すけどなんで偽名なんか使ってたの？」

「一種の憧れというか気の迷いというか……まあそんなもんですね」

「……は？」

某の言葉に納得がいかない二人。某自身もこんなことは言いたくなかったがそれ以上に「かつこいいから」なんてくだらん理由であるの非常時に偽名使ってしまったなんて二人に言いたくなかったのだ。

「……とにかく！そんな感じの理由なので………はい！この話はもう終わり！閉廷！解散！」

「ちよつと待って！言いたくないのは何となくわかったわ！じゃあせめて名前だけは教えてくれない？」

「あついいつすよ」

「ええ……そこはすぐに了承するんだ……」

偽名使用の理由は頑なに言わないくせに本名開示は簡単にOKしたことに困惑する水都。

「それじゃあ言うね。私の本名は——」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「いや、なつちー……早く言つてよ。もうそろそろ出発時間になつちやうから」

「……？、なつちーどうしたの？顔色が悪いよ」

「……れた」

「……え？」

なぜか顔色が悪い某を心配して水都が声をかける。すると、某は小さくなにかを呟いた。二人は聞き取れなかったので聞き返すと某は汗をかきながら青ざめた顔で言った。

「名前………忘れた……」

瞬間、空気が凍った。そこから数分の間を置いてから
「ええーっ!!!」

某の言葉を聞いた二人の絶叫が宿に響いた。

「ちよ、ちよつとなつちー!?それ本当なの!」

「な、なつちーウソだよね……? 私たちをからかっているだけでほんとは覚えてるんだよね?」

「いえ……ほんとです」

「ど、どうしよう!?!うたのん!」

「どうしようって言われても……あつそうだわ!頭を叩けば記憶が戻るんじゃないかしら!」

「やめてください死んでしまいます(´q´)」

拳を振り上げ自分の頭に振り下ろそうする歌野を止める某。そして、ひどく落ち込んだ様子で壁に背を預けて座りブツブツと喋り始めた。

「いや〜マジか〜……マジか〜……自分の名前忘れたか〜……もう私、ダメかもしれんね」

「でも、なんで忘れちゃったの?」

「あく多分、某って名前を使ってる期間が長かったからかな〜」

「ええ……それだけで名前を忘れちゃうものなの?」

「以外とね……自分は某なんだ自分は某なんだって思い込むともうすっかり某さんの出来上がりだから」

「ええ……」

「でもどうするの?名前思い出せないんじゃない?」

「まあ……多少はね?それに、四国帰れば嫌でも思い出すでしょ……じゃあ、もう行きましょう」

某はそう言って自分の荷物を持つと終始俯いたまま部屋を出た。

「あつ、待ってなつちー!」

水都も慌てて荷物を持って部屋を出る。

「あれは相当シヨックでやられてるわねえ……」

歌野も某の様子に苦笑いしながら二人を追うように部屋を出た。

...

宿を出た某達三人は集合場所にたどり着いた。そこにはすでに、今日まで生き残った諏訪の住人すべてが集まっていた。

それを見た某はうわ、すご。となんとも語彙力のない気の抜けた感想を心の中で言った。

すると、人混みの中から一人の男性が三人の元にやって来た。その男の顔をよく見るとあの会議にいた偉い人の一人だった。

「某様、白鳥様、藤森様、お待ちしておりました。お三方が到着されるまでの間に住人達のチェックは完了致しました」

「ありがとうございます。それと、私たちが一番早く着いてなくちゃいけないのに遅れてしまい申し訳ございません」

「いえいえ、遅れた言われましてもまだ出発時間には間に合っておりますし、それに、これぐらいはやらせて下さい。何から何まで貴女方に任せきりでは申し訳ないですから」

「そうですか……それでも、なにかできることはありませんか？」

歌野が偉い人に聞くと偉い人は顎を手で触りながら少し考えるところになにか思いついたのか顔を三人の方に向け言った。

「実は……今回の四国への大移動に不安になっているものがまだいるのです。なので、お三方には不安になっている住人達を勇気づけてやってほしいのです……突然で申し訳ないですがお願いできますか？」

「それぐらいならお安いご用ですよ！」

「そうですか！ありがとうございます！では、さっそくマイク等準備

しますので少々お待ち下さい！」

偉い人は歌野の返事を聞くと大喜びで準備に入った。そのやりとりを聞いていた某は「スゲーな、うーさんはあんな大勢の前で勇気づけろって言われてできますって言えるんだもん」と感心していた。すると、ちよいちよいと歌野が某の肩をつついた。

つつかれた某が歌野の方を向くと歌野は小声で言った。

「じゃあ、なっちーよろしくね」

首をわずかに傾げ、手を合わせるお願いのポーズで歌野は某に丸投げした。そんな歌野からのキラーパスを食らった某は少し固まった後、静かにこう言った。

「四国ついた途端ぶん殴ってやるからな」

「what!?!」

「いや当たり前だよ、うたのん」

水都の言うとおりである。むしろ、この場で殴り合いにならないだけまだ有情であろう。

「ハア~~~~~……」

久々にくそでかため息について天を仰ぐ某。 “なに言おうかな”と考えていると歌野が言った。

「ため息ついているとハピネスが逃げるわよ?」

(うん、そうだね。じゃあハピネスチャージするために四国着いたらうーさんにハートキャッチするね)

一発殴るだけで許してやろうと思った某だったがハートキャッチにしようと思心を決めた某であった。

・
・
・

数分後、偉い人が戻ってきて準備ができたと言われたので案内してもらおう某。内心先程の件でイライラするんだよ……！状態であるためもう住人を勇気づけることなんか忘れており、この場で思いつきりぶちまけてスツキリしてやろうと思っていた。

偉い人からマイクを受け取り壇上に上がる某。すると、住人達から歓声上がる。

「勇気様ーッ!!」

「某様ーッ!!」

「ダサジャージのねーちゃん!」

「ライダー好きのねーちゃん!」

ニコニコと笑いながら手を小さく振って歓声に応える。しかし、内心では何人か見殺しにしてやろうかと思っていた。特に最後の方のクソガキ誰がダサジャージだ。

守らねばならぬ住人からの思わぬ燃料投下のせいで怒りのボルテージが上がりマイクを握り潰しそうになるがなんとか耐える某。そして、住人達が静かになるのを待ってから口を開いた。

「皆さんおはようございます。我々は今から四国へ向け危険な大移動を始めます。そのことに不安を抱えている人は多いでしょう。しかし、ご安心下さい。ここには、今日まで諏訪を守り抜いた勇者とそれを支えてくれた巫女がいます。それに、これは逃げではありません。人が再び平和を、自由を取り戻すための戦いの一つです。この大移動の成功は必ず未来へと繋がるでしょう。だから、皆さん。」

某は少し溜めてから大きな声で力強く言った。

「——生き残りましょう!!誰一人欠けることなく四国へ行こう!!そして——人類に黄金の時代を!!」

某の演説?が終わると住人達から一斉に拍手と先程よりも大きな歓声上がる。

「いいぞおおお!!勇者様ーッ!!」

「背中は預けたぞおおお!!」

「勇者様万歳!巫女様万歳!」

「ねーちゃん、ダサカッコいい！」

「アマゾンズおもしろーい！」

「ちくわ大明神」

「誰だ今の」

「やりますねえ！」

「先輩?!不味いですよ！」

無数の大歓声を浴びながら某は笑顔で壇上を降りた。内心、この演説で大丈夫か心配だったが成功したつぽいのでホッとした。

偉い人にマイクを返すと壇上を降りた某。入れ替わるように偉い人が壇上に上がり今後の動きの説明を始めている。

それを聞きながら休憩しようと思った某は場所を探していると水都と歌野が近づいてきた。

「お疲れ様なつちー!とつてもグレートなトークだったわよ！」

「お疲れ様なつちー、すぐくカッコ良かったよさっきの演説！」

「いやー、ぶつつけ本番だったから変なこと言っていないかちよつと心配だけどね」

「全然、大丈夫よ!やっぱりなつちーに頼んでよかったわ！」

「そう……?なら良かった〜これで、もし一言でも文句言ったら殴り付けてやるところだったよ」

笑顔で怖いことを言う某に歌野は恐る恐る聞いた。

「あーやっぱり怒ってる?」

「うん、怒ってる怒ってる……四国着いたら覚悟しなよ」

「……ヒエ」

某は笑顔から真顔に表情を一転させ歌野に処刑を宣言する。それを聞いた歌野はどんどん顔を青ざめさせていきそして、助けを乞うように水都の方を見る。しかし、水都は目をそらした。そのことに歌野は絶望するが自業自得である。

・・・

某の演説から一時間後、すべてのチエックを終え大移動が開始した。守備配置は歌野が前方半分担当某が後方の半分を担当する。もちろん、これだけでは足りないもので十二支のなかで戦闘力の高いものを最初から配置している。ちなみに水都は最前列の車内で神託があつた場合連絡することになっている。

「さあーて、頑張りますか！」

最後尾を走る大型トラックの上で某はそう言うトラックの上に寝転ぶ。

「じゃあ、カーナビさん索敵よろしゅー」

《いや、お前頑張るって言ってたそばからそれかい》

「いいじゃないですかーどうせ敵が来るまで私は暇ですから、という訳で敵が来たら起こしてください。朝早かつたからもう眠いんですよ」

《ハイハイ……》

・・・

そこから、数時間が経ったがなぜか化け物は来なかった。某はそのことを疑問に思ったがこう言うこともあるかと気にしなかった。

化け物が襲ってこなかったことで予定よりも順調に道のりを進めることができた。途中休憩と給油を挟み、移動の中疲れや痛みは某の召喚した十二支の一体「未」で無かったものにした。そして、初日で距離の半分以上を消化することができた。

歌野と某は交代で見回りをしたおかげで住人達は不安を抱えることなく一晩過ぎた。

そして、二日目の今日

「見えてきたわ！みーちゃん！見えるー!？」

「見えてるよ！うたのん！」

最前列を走る車の上にいる歌野と車内にいる水都がついに四国の姿を捉えた。

「やつと、やつとここまで来たんだね……うたのん」

「そうね。みーちゃん……やつと終わるのね」

「あっそうだ！なつちーに連絡しよ！」

水都はトランシーバーの電源を入れ某に連絡する。

「なつちー聞こえる!？」

『……んあ？もしもし、みーたんどうしたの？』

「なつちー……もしかして寝てた？」

『い、いや全然！私はビンビンに起きてますよ、はい!』

「寝てたんだね……まあいいや、それより四国が見えてきたよ」

『おっ！やつとかあ……ようやく終わるなあアああ!?!』

「ど、どうしたの!？なつちー!」

『全く、最後の最後で……！みーたん、うーさんに伝えて化け物が来た!』

「わ、わかった！うたのん!」

「どうしたの!？」

「なつちーから連絡！後ろの方で敵が来たみたい!」

「わかったわ！」

水都から某の報告を聞いた歌野は後続の車両の屋根の上を通って某の元へ向かった。

・・・

水都との通信を終えた某は剣を抜いて敵を待つ。

「カーナビさん、数は？」

《これまた、随分と多いな。もしかしたら今まで一番多いんじゃないか？》

「マジっすか……勘弁して下さいよ……」

《まあ、頑張れ》

「もちろん、頑張りますよ……ここまで来て被害を出すわけにはいきませんから！」

某は剣を横に構えると刀身にエネルギーを溜め、思いつき振り抜いて敵の群れに三日月型の大きな斬撃を飛ばす。斬撃は群れの前面にいた白い雑魚と中型の個体を消し飛ばした。しかし、無駄だと言わんばかり後方から次々と雪崩れ込んでくる。

「ッ！——それがどうした！いつまでも数だけで勝てると思うなよ！」

某は剣を上に掲げ、スウと息を吸うと

「総員、突撃ッ!!」

剣を振り下ろしながら叫ぶように号令を放つ。同時に十二支達が群れに突撃する。

子が津波となって雑魚を食い荒らし、辰が上空から炎を吐き、申が大型の個体を文字通り叩き潰し、午が群れに超高速で突進し群れに穴

を空ける。

さらに、今回が初参戦となる寅、卯、巳、戌、亥、も群れを蹂躪する。

寅は大型トラックを上回る巨体でありながらしなやかな動きで素早く近づきその鋭い爪で切り裂き、卯はその強靱な脚力を持つて蹴り碎き、巳はその大木のように太く十二支の中では最長の体を大型の個体に巻き付け碎き、戌は体こそ参戦している十二支の中では小柄だがその小さな体に似合わない大きな咆哮で音撃のように敵を破壊し、亥も戌と同じく小柄の方だか突進を繰り返し確実に敵を倒していく。

「らあッ！」

某も斬撃を次々と飛ばし群れを切り裂いていく。

「……………くそッ！多すぎる！」

しかし、某が減らす数よりも投入される数の方が圧倒的に多かった。そんな中でカーナビが場違いなことを言い始めた。

《今まで襲ってこなかったのは他のところの奴らが合流するのを待ってたからか……………だいぶ賢くなってきたな、あいつら》

「冷静に分析してる場合じゃないですよ！」

呑気なカーナビに怒りを露にしその怒りをぶつけるように斬撃を群れに飛ばす某。

「なっちー！大丈夫!？」

そこへ、歌野が合流してきた。

「うーさん！」

「なっちー！状況は!？」

歌野は某のいるトラックに飛び乗ると横に立ち状況を聞く。某は険しい表情で歌野に言った。

「かなり厳しいよ……………十二支の中でも戦闘力が高い連中を全部投入してるけど全然減らない……………」

「想像以上にハードな状況ね……………でも、諦めないわ！」

「もちろん！絶対生き残るよ！うーさん！」

「イエス！なっちー！」

某は拳を歌野に突き出しながら言う。歌野も突き出された拳に自

分の拳をぶつけながら返した。

「そうだ、うーさんこれ使つて!」

某はそう言うのと酉を召喚しトラックに並走飛行させる。

「うーさんの鞭じゃここからじゃ届かないでしょ?これなら近づけるよ!」

「なつちー、……ありがとう!」

歌野は某に礼を言い酉に飛び乗るとそれを確認した某は酉を群れへ飛ばす。

「うまく使いなよ……うーさん。」

某は歌野を見届けると剣を構え、群れを見る。

「さあさあさあ!!ここが踏ん張りどころだ!!全員気合い入れろおーツ!!」

某の激励に各々の咆哮を上げ応じる十二支達。しかし、戦いは激化する一方であった。

・・・

某と歌野そして、十二支達の戦いが激化していく中水都の方はとうとすでに大橋を渡り四国の結界内に入っていた。

「やった!……ついにはたどり着いたぞおーツ!!」

「助かったんだ俺たち!」

「ねえ、お母さんもう大丈夫なの?」

「ええ、そうよ……!もう大丈夫よ!」

次々と住民達が四国入りを果たしその喜びを家族と、友人と、分か

ち合う中水都は大急ぎで来た道を引き返すように走り出した。

「藤森様!?どちらへ!？」

慌てて偉い人が水都を呼び止めるが水都は足を止めて振り返り叫んだ。

「私はうたのんとなっちーを出迎えにいきます!大丈夫、境界の手前で待つだけですから!」

「しかし、もし境界を突破されたら……!」

「されません!うたのんとなっちーが戦ってるんです!絶対に突破されません!……それよりも住民の方のチェックをお願いします!」

水都は再び走り出して境界へと向かいながら願った。

(神樹様……どうかお願いしますうたのんとなっちーを守ってください……!)

...

一方、群れの足止めをしている某達の戦いも熾烈を極めていた。小型、中型の個体の数は減ったものの大型の個体数がだんだん増えていた。原因はその地味に高い耐久力小型、中型の個体に比べやや頑丈であるため処理が遅れ敵の物量に押されていた。

「おおらあーっ!!」

某の最大出力の斬撃が大型を両断するがその背後から射撃型の攻撃放たれる。

「あぶっ!」

咄嗟に鏡で防御し攻撃を返して射撃型を倒す。すると、群れの方からなにかが飛んできた。よく見るとそれは申の腕だった。慌てて申

の方を見ると丸ノコ付と交戦中だった。申は残った右腕で丸ノコ付を叩き潰すがそこを射撃型の攻撃がまるで豪雨のように降り注ぎ、申をその場に縫い止める。あれでは、消滅するのも時間の問題だろう。他の十二支達の方を見ると申と同様に破損または一部欠損しているものばかりでかろうじて戦えている状態だった。

(不味いな……もう、戦線がもたない……!)

この状況に某は焦った。まだ、半分以上の住民が四国入り出来ていないからだ。

「なんとか、時間を稼がないと——ッ!？」

その時だった十二支と鏡の防御を抜いて射撃型の攻撃が某の乗るトラックの近くに着弾する。

「——うわっ!」

直撃こそしなかったものの衝撃でトラックが横転し某も地面に落とされ転がる。

「イテテ……ちくしよ……やられたあ……」

頭を手で抑えながら某は立ち上がりながらトラックの方を見る。するとトラックから黒煙が上がっているのが見えた。

「!——まずい!!」

某は血相を変えてトラックに走り寄り運転席の窓を叩きながら運転手の男性に声をかける。しかし、運転手の反応はない。それを見た某はドアの隙間に剣を突っ込んでそのままテコ原理で抉じ開け、運転手を救出した。

運転手を担いだままなんとかこの場を離れようとするがそうはさせまいと射撃型の攻撃が飛んでくる。怪我人を担いでいる状態のため回避ができない某は攻撃を鏡で受け止める。

飛んでくる攻撃を鏡で受け止めながら移動する某に別方向からの攻撃が飛んできた。

「しまっ——」

攻撃に気づいたがどうすることもできない某に攻撃が迫る。

「ハアーツ!!」

そこへ割り込むように西に乗った歌野が鞭で攻撃を打ち払う。

「ありがとう、うーさん。助かった！」

「お安いご用よ！」

西から降り某の近くに着地した歌野は某の感謝の言葉に余裕そうにウインクしながら返すが疲労を隠しきれていない。そんな歌野を見た後、回りを見ると十二支の中でも体が大きい個体である辰、申、巳、寅がすでに消滅しており残っている十二支も先程見たときよりも動きが悪くなっているのがわかった。

一通り状況確認を終えた某は歌野に向かってこう言った。

「うーさん！私が最大出力で攻撃するからその隙に運転手さんと一緒に四国へ入って！」

「ええ!?……でも、それだとなっちーが……！」

「私も急いで追い付くから！急いでこのままじゃ運転手さんが危ない！」

「……わかったわ。でも、絶対、ぜーったい！追ってきてね！」

「うん！絶対に追い付く！」

某は運転手を歌野に託すと群れの方を向き剣にエネルギーを込める。そして、最大限エネルギーが込められた剣を横風ぎに振るい斬撃を飛ばす。斬撃は大型の群れを消滅ないし戦闘不能まで追い込む。それを確認した某は歌野に言った。

「行って!!」

「——ッ！」

それを聞いた歌野は四国へ向け走り出した。離れていく歌野の姿を見た後某はさらに斬撃を飛ばし再生しようとしている個体とその後方から進んできた大型を消し飛ばす。

「よし、いくか！」

某もまた踵を返して歌野の後を追った。

...

某が殿を引き受け数十分後

歌野を追いかける某はついに大橋まで到達した。しかし、大型の追撃は止まない。

「しつ……いっ！」

某は振り向き様に斬撃を飛ばす。そして、すぐさま走り出す。先程からずっとこれを繰り返している。

「もう相手するのもしんどいな……無視するか」

某はもう一発斬撃を飛ばすと西に乗って一気に大橋を渡る。

(もう少しだ……！)

十二支最速の西はあっという間に結界の境界付近に到達しこのまま四国へ入ろうとした時だった。

「ぎゃんっ!!」

四国に入ろうとした瞬間、見えない何かに弾かれ橋の上に落ちる某と西。落ちた某はよろよろと立ち上がり今度は歩いて境界を越えようとするが

「ツ！……やっぱり弾かれるか」

やはり見えない何かによって弾かれてしまう。

(どうする……?)

《おーい、ちよつといいか?》

某が入る方法を考えているときカーナビが話しかけてきた。

「何ですか?」

《神樹からなお前宛に伝言だ》

「神樹? 神樹って確か四国を守ってる神様でしたっけ?」

《正確には土地神の集合体だ。そんなことより伝言についてだが、神樹曰くお前を四国へ入れたくないとさ》

「……え?」

某はカーナビの言葉を聞いて固まった。同時になんで？なんで？と頭のなかで原因を考えている中そんな某を無視してカーナビは続ける。

《それで入れたくない理由だが二つある。一つは、先日の結界の破壊未遂だ。覚えてるか？》

「あああああ!!それかあああ!!」

理由を聞いた某は頭を抱えて崩れ落ちた。そして、心の底から後悔した。やはり、あの時逃げずにきちんと謝罪しておけば良かった死ぬ程後悔した。

《クククツ……！続けるぞ、ククツ……！》

そんな某の様子に笑いをこらえながらカーナビは続ける。

《次に二つ目だか、お前の力が主……天の神由来の物だからだ》

「……そマ？」

《以上の理由により立ち入り拒否だだよ》

「……そんな」

某は絶望した。そんな某を追ってきた大型の照準が捉えた。そして放れる攻撃。それも一発ではなく一発目を皮切りに次々と放たれそのすべてが某へ向かう。

無数の矢のようなものが迫る中某はそのことに気付かない。否、どうでもいいと感じていた。もう二人と過ごすことができないのならばここで死んでいいとすら思っていた。

しかし、そんな某の心境とは裏腹に鏡は某を守ろうと射線に割り込み攻撃を防御する。

(余計なことを……)

しかし、そんな普段なら喜ばしく思う行動も今の某にとっては腹立たしいものだった。そんな某にカーナビが話し掛けた。

《落ち込んでるようだが……そんなことでいいのか？》

「……なに？これ以上何をやれって言うの？……ここまでやったのに最後の最後でこれだ……もう、どうでもいいよ」

《そうだよなくわかるわかる。俺もこんなことされたらブチギレちゃうね》

「同情ですか……」

《まあ俺のことはどうでもいいとして……お前が諦めるのは勝手だが、お前を倒した後あいつらはどこにいくと思う？……四国だ。四国の境界は先日の破損から修復は済んでいるがまだ完全に四国を守れる状態じゃない。あいつらは守りの弱いところを攻めるだろう。そして、あいつらは境界を越えてくる。だが今、四国にいる勇者の実力じゃあいつらに勝てない。そうなれば、あいつらはよってたかってお前が守った諏訪の民と四国の人々を襲うだろう……お前がやるしかないんだよ》

「……」

《お前もわかってるんだろ？……だからそうやって、動かないようにしてるんだろ？そうして、なにかが起るのを期待してそこにいるんだらう!?》

「うるせえ!!」

カーナビの改変万丈構文に某がとうとうキレた。

「あることないこと適当に言いやがって!!わかったよ!やってやるよ……!こいつら全部倒して……守ってやるよ!!」

怒りの声を上げながら立ち上がる某。その心に悲しみはなくあるのはカーナビに対する怒りと殺意だけである。

《よく言った某イ!!そんなお前にイ!!いいものをくれてやる……!神の恵みを受けとるがいい!!》

カーナビがそういうと近くにいた酉の体が輝き始め光の粒子となつて某の体に入っていく。

「え!?なに!?なにこれ!?!」

突然のことに驚く某。やがて、光が収まると酉の姿はなくなつており某の背には金属製の翼が生えていた。

「なんじゃこりゃーっ!!?!」

某は背中に生えた翼を見ながら叫ぶ。すると、カーナビが笑いながら話し出した。

《クククッ……喜んでくれたかな?それが神の恵み……お前の新しい力“融合”だあ……!》

「融合……?」

《融合とはその名の通り十二支と融合する力ア……!十二支と融合することによりイ……身体能力の更なる向上と十二支の能力が使用できるようになるう……!》

「……マジっすか、パネエすね」

某はカーナビの説明を聞いて自分の体の具合を確かめる。確かにカーナビの言うとおり普段より力が湧いてきて背中に生えた翼もまるで最初からあったかのように違和感がない。

「なんか——イケる気がする」

《気がするじゃない……出来るんだよ今のお前なら》

「——わかった。ここままでしてもらったんだ。必ず守るよ……でも、その前に」

某はトランシーバーの電源を入れて水都に通信をする。

「みーたん聞こえる?」

『なっちー!?今どこにいるの!?うたのんは戻ってきたけど、なっちーだけ全然戻ってこないから心配したんだよ!』

「あー……ごめんね。ちよつと手こずっちゃってね……それと……ちよつと忘れ物しちゃってさあ……だから、諏訪に戻るよ」

『え!?なに言ってるの!?今更過ぎるよ!』

「ごめんね……でも、とても大事なものだからさ……どうしても取りに行きたいんだ……」

『でも……でも……ッ!』

トランシーバー越しに聞く水都の声に罪悪感を抱くがそれでも某は続けた。

「約束する。——必ず、必ず戻るからさ。待ってて」

『……わかった。待ってるよ、うたのんと一緒に……だから絶対戻ってきてね……』

「……うん。……じゃ、またね」

某はトランシーバーの電源を切った。そして、トランシーバーを橋から投げ捨てると翼を大きく羽ばたかせ一気に上空へ上がる。

上昇する某を射撃型が撃ち落とそうとするがその攻撃が某に当た

ることはない。

「すごい……今までよりずっと飛びやすい！」

新たな力に某が感激しているところへ射撃型の攻撃が飛ぶ。しかし、その攻撃が当たる直前で某の姿が一瞬ブレた後消えたことにより不発に終わる。

「——遅い！」

一瞬にして某は射撃型の背後を取ると剣で直接両断する。さらに、高速機動を繰り返し次々に大型の個体を両断していく。

「ここから先は通さない。一匹たりとも……！」

某は翼を羽ばたかせ群れの中へと突っ込んだ。

新たな出会い

「ん……んあ？」

どこぞの廃ビルにて某が目を覚ますと知らない天井が見えた。これはもう、あのセリフを言わなければなるまい（使命感）

「知らない天井だ……」

《よう、目え覚めたか？》

一度は言ってみたいセリフを吐いた某にカーナビが声をかけた。

「おはよう、カーナビさん……あれから何時間たった？」

《何時間どころか3日経ってるよ》

「そマ？……いくらなんでも戦いすぎだろ私イ……」

某は水都達と別れた後、一人で化け物の大群と三日三晩戦っていた。

新たな力『融合』の力は凄まじく、化け物達を終始圧倒していた。その結果、戦線を徐々に押し上げていき、最終的には襲ってきた群れを全滅させた。そして、疲れ果てた某はこの廃ビルにて休憩することにしたのである。そして、現在に至る。

「ちな、どこです、ここ？」

《本州の最北にあるリングゴで有名なところ》

「そマ？道理で寒いと思つたよ」

某は二の腕を擦りながら呟く。窓から外を覗けば雪が降っており、大地を白に染めていた。

「とりあえず、なんか服……上に着る服を探さないと凍え死んじゃう……」

《どっち近くにデパートとかあるだろ、そこで調達すればいいだろ》

「じゃあそこにいくために服を探そう」

《どつか近くに服屋があるだろ、そこで調達すればいいだろ》

「じゃあそこ《もういいだろツ！》……そんなキレイな氷川さんみたいに怒鳴らないでくださいよ……」

耳を指で塞ぎながら某を迷惑そうに言う。ちなみにカーナビの声は脳内に直接方式なので耳を塞いだところで意味はない。

寝るわけないですもんね……ナンマンダブ、ナンマンダブ」

《うん?……おい、奴さんの服を見てみる。暖かそうな服装だし、状態もきれいだ。まだ、使えるんじゃないか?》

「なんて罰当たりなこと言うんだアンタは!」

見知らぬ誰かの遺体に合掌している某にカーナビが提案すると案の定キレる某。

《そうは言ってもだ、このまま探したところで見つかる保証もない。

それに、アレはもう奴さんには必要ないものだ。そうだろう?》

「うくん、でもなあ……」

《奴さんも大事に使ってくれるなら恨みはしねえよ。それとも、お前も奴さんの仲間になりたいのか?》

「そう言うわけではないですけど……はあく、仕方ない服を拝借させていただきますか……」

某は渋々遺体から服を拝借するために近づく。すると、遠目では分からなかった遺体の様子がわかった。

遺体は先程まで生きていたかのようにきれいな状態で見た目から判断すると某に近い年頃の長い白髪の少女だった。

(……失礼しますね)

申し訳なさそうに某は恐る恐る少女の服に手をかけた。

その時だった。

ガシツ!

(キイイイイアアア!!ウゴイタアアア!?)

死んでいるはずの少女の手が某の腕をつかんだ。突然のことに某は心の中で悲鳴をあげていた。

某の腕を掴んだ少女は某の腕を引き、某の顔を自分の顔の近くに寄せると呟くように言った。

「……死体漁りとは……感心しないな……」

少女は某の腕をはなす。某は自由になると数歩後ろに下がる。そして、少女の方はゆっくりと立ち上がり

「……でも、わかるよ……。秘密は甘いものだ——」
右手に西洋風の槍を出現させ

「——だからこそ、恐ろしい死が必要なのだ……!」
語気を強めて槍の矛先を某を向けながらそう言った。

「すいません許してください。なんでもしますから!」

某は最高速で土下座を決め込み、少女に謝罪する。一方、少女は特になにも言わない。

チラツと土下座しながら見上げると少女は槍を向けたままポカンとしていたが槍をしまうと申し訳なさそうに某に言った。

「……すまない。今のは冗談だ……。顔をあげてくれないか?」

「じよ、冗談?……本当に?」

「……本当だ」

「……あくよかつた。本当に殺されると思つた……」

某は少女の言葉を聞くと土下座をやめて安堵する。すると、少女は頭を下げた。

「……改めて先程はすまなかつた。アレほど整つたシチュエーションに出会つたことがなかつたのでついな……」

「シチュエーション?」

「……君は、ブラッドボーンというゲームを知ってるか?」

「ええ、知ってますよ」

「!……そうか、ではそのDLCもやったことあるか!」

「ありますねえ!」

「……おお、……おお!まさかこんなところでブラボが分かる人に出会えるとは……!」

(……なんかめっちゃ嬉しそうだな、その割には顔が全然笑つてないけど)

少女の表情は表情は薄いがとても嬉しそうな雰囲気を出していた。その様子を某が眺めていると少女は咳払いをして話を戻す。

「……すまない。それで話の続きだか先程の状況がマリア戦のムービーに酷似していたのでなつい、言ってみたくなったのだ」

「……あく確かに、よく似てましたね。さっきの」

某が先程の状況を思い出して納得していると少女が口を開いた。

「……そう言えば、自己紹介がまだだったな……私の名は室府^{むろふくたま}久玉という、室府と呼んでくれ」

「分かりました、室府さん。私のことは某と呼んでください」

「……某か……変わった名だな。……某はここへは何をしに？」

「あつ！えつと、ですね……かくかくしかじかでして……」

某は室府に説明する。それを聞いた室府は顎に手をやって考え出した。

「……なるほど、服か……確かにここで行動するにはその服装では心許ないな……。よし、ついてきてくれ。先程満足させてもらった礼だ。案内しよう」

「え？いいんですか？」

「……特に用事など決まっていなから構わないさ」

そう言うのと室府は歩きだし某も立ち上がって後を追う。

「そう言えば、室府さんって歳はいくつなんですか？」

「……今年で14になるな、某はどうなんだ？見たところ、年下のように見えるが？」

「私は今年で12になりますね」

「……なるほど、2歳年下か……その年でよくブラボを知っているな。誰か身内にやっている者がいたのか？」

「実は親戚の兄さんがやっています……」

「……そうか、羨ましいな。身内にブラボ好きがいるのは……私には居なかつたからな」

「そうなんですか……室府さんってブラボの他には何かゲームはしているんですか？」

「……そうだな、例えば——」

某は室府に案内されながら何気ない会話に花を咲かせていた。そして、十数分程歩いたところで室府が足を止めた。

たどり着いたのは店名がひらがな四文字あの服屋。室府は某の方を向いて言った。

「……着いたぞ」

「あくよかった〜（KNN姉貴）これでやつと寒さから解放される……」

某は冷えきった体を擦りながら、ホツと息をはき、室府の向いて頭を下げた。

「本当にありがとうございました。おかげで凍え死なずにすみませす」

「……礼などいらさないさ。それより、早く着替えるといい。さ……」
お寒いでしょう」

室府がそう言いながら建物の中を指で指すと、某は笑いながら答えた。

「ハハ、今度は幼年期の始まり√の人形の台詞ですね。でも、本当に感謝しているので私に出来ることならなんでも言ってく下さいね。それでは、ちよつと着替えて来ます！」

「……ああ、考えておく。……では気を付けてな」

某は店内に入ってしまった。その背中を室府は見ながら呟くように言った。

「……あれがナビゲーターの言っていた『お気に入り』か……なるほど、確かに普通ではないな……」

室府は先程、某の腕を掴んだ時のことを思い出した。某に触れたあの時、一瞬だか膨大な数の人の鼓動を感じた。一人、二人ではなく数百、数千あるいはそれ以上の……とてもじゃないが普通ではない。はつきり言つて某の体は異常だった。

「……だから、天の神に目をつけられたところか……」

室府は顎に手をやって考える。人類抹殺を決めた天の神がなぜ某に目をつけ。そして、某に力を与えるような真似をしたのか？と、今のところ、その答えを決定付ける材料は某の異常性しかないため室府は某が天の神に選ばれた理由をそう決めつけた。

「……しかし、わからないな。某の体はいつたいていどうなっているんだ？」

室府の疑問は消えない。あの膨大な数の人間が生きたまま一人の人間の形に圧縮されたような某の体。あんなものが自然に生まれるものだろうか？

「……もしかしたら、某の存在はこの神々の戦いを左右するかもしれないな……」

おそらく、この地上で唯一の特異な性質を持つ某。その存在がこの戦いの行く末を決めるかもしれないと室府は予想した。

「……だから、そちらも監視を付けて見定めているんだろう？……自分たちにとつて有益であるかどうか」

チラリと横目で見ながら言う室府の視線の先には某に付いてきたマスコットの一体ピンクの牛がいた。

「……確か牛鬼といったかな、君は……。それで？どう思う？君たちから見て某は……」

室府はピンクの牛「牛鬼」に問いを投げ掛けてみるが牛鬼からの返事はない。

「……やはり、答えないか……それとも、答えられないのか……」

室府も最初からわかっていたのかその事について特に言う事はなく目をつむる。

「……まあいいか……、ああそうだ、某のことなんだがもし、天の神もそちらも要らないのであれば」

室府は少し間を置いて牛鬼を見ながら言った。

「……私がもらっても構わんよな？」

室府の言葉に牛鬼はノーリアクションでその場から消えた。

「……行ったか。……さて、今後について考えるか」

室府は壁にもたれて目を瞑った。

店に入った某は寒冷地での活動に適した服を探していた。しかし、あの化け物が襲来した日が夏場だったためか冬用の服が少ない。

「うくん、なんかビミョーだな……」

《……なあ、もういいだろお？服なんかテキトーでいいんだよ》

「いいわけないでしょーが！私だって女の子ですからおしやれしたいんですー！」

《えっ？女の子？お前が？……プハッ！》

「なに笑ってんだよ……！」

某の物言いに吹き出したカーナビに最高最善の魔王並にキレル某。

《ククク……いや、悪かった悪かった。そう怒らんでくれよ。しかし、どれを着てもたいして変わらんさお前は》

「は？……それは私がなにを着ようとダサいって言いたいのか……キレそう」

《いやいや、逆だよ逆。お前さんがなにを着ようとお前さんの魅力は変わらんと言うことだよ》

「えっ……そうかな、そうかなあ……！」

カーナビの言葉を聞いてヘラヘラと笑いながら照れる某。しかし、お分かり頂けただろうか？カーナビは変わらないと言ったのであって決して某の魅力値が高いとは言っていない。実際、カーナビは

《(こいつちよろいわwww)》

内心、大爆笑で嘲笑していた。

「へへ……じゃあ、なんでもいいやーこれとーこれとー」

さつきまでの悩みはどこへやらさくさくと服を選び試着室で着替える。

「よーしー！戻ろうー！」

そして、着替えた某は意気揚々と室府の元に向かおうとする。

《なあ、ちよつといいか……》

「ん？何ですか？」

突然、カーナビが某に声をかけた。

《お前、あの室府って奴のことどう思う？》

「室府さんですか？……別に、少し変わった人だと思えますけどいい人ですよ。」

《いや、お前……ついさつき出会ったばかりの奴に警戒心無すぎだろ……。まあいい、それよりも、あの室府って奴普通の人間……いや、もしかしたら人間ですらないかもしれないぞ》

「……は？それってどういう？」

《結構前の話だがお前が諏訪に行く前に人の集まっている場所をお前に教えたよな？それは、俺が人間を感知するセンサーみたいなものを持っているからなんだ。だから、俺には人間の居場所がすぐに分かるはずなんだが……なぜかアイツには反応がなかったんだ》

「……センサーが壊れたとかはないんですか？」

《センサーってのはものの例えだ実際には、そうだな、ドラゴンボールの気を探るみたいな感じだ。だから、壊れる事はない》

「じゃ、室府さんって一体……」

《わからん。今のところはなんともな……とにかく警戒はしておけ》
「……分かりました」

・

「室府さーん、お待たせしま……した」

「グゴー……グゴー……」

建物から見た見た某が見たのは壁に体を預け立ったまま寝ている室府

の姿だった。その姿を見た某は

(あつ今度はダクソの玉ねぎですか)

と思いつながら苦笑いし近づいて驚かせないよう小声で声をかける。

「室府さーん？お待たせしましたー」

「……ん？すまない、考え事をしていた」

「いやいや、寝てましたよね？」

「……ハハハ、それよりもそれが新しい服か、似やっっているよ」

「(ざらつと流しましたね……) そうですね？ありがとうございます！」

服を誉められた某は照れながら嬉しそうに笑う。

ちなみに某の服装は劇場版アマゾンズの水澤悠が着てたブルゾン
をセーターの上から羽織っておりズボンはジーパンに靴もスニ
カーに変えている。

「……そうだ、お礼について考えていたんだか、さつそくいいか？」

「えっ？はい、いいですけど。なにをすればいいですか？」

「……抱かせてくれないか？」

瞬間、空気が凍った。某は聞き間違いかと思ひもう一度聞き返す。

「……何て言いました？」

「……抱かせてくれないか？」

「……仕方ないですね、なんでもすると言った以上拒否するわけにい
きませんし……経験はありませんが出来る限り頑張ります」

そう言うとき某は服を脱ごうとする。それを見た室府はそれを手で
制止した。

「……いや、服は着たままでいい」

「着たままでですか!？」

「……？いや、脱いでしまえば寒いだろう」

「でも、服が汚れてしまいますよ？」

「……ん？抱えるだけなのになぜ、服が汚れるんだ？」

「へ？……かか、える？」

「……そうだが？……と、どうした？顔が赤いぞ？」

「い、いえ、大丈夫です。気にしないでください……」

某は赤面し俯いた。自分の汚れ具合に恥ずかしくなったのだ。そんな某の顔を心配そうにのぞく室府。

「……嫌ならやめるが……？」

「……いえ、やります。やりましょう！」

恥ずかしさでどうにかなってしまいそうな某。もう自棄になっている。

「……では、いこうか」

室府は近くのベンチに座ると某に自分の上に座るように促す。そして、某はゆっくりと室府の上に座ると室府は某の体を優しく抱いた。

「……どうでしょうか？」

「……ああ、とても暖かいな某の体は……」

「そうですか……」

「……そう言えば、某はこの後どうするのだ？」

「北海道に行くつもりです。そこに人が集まっているところがあるので……」

「……そうか、……某」

「はい」

「……私もついていっても構わないか？」

室府の提案に某は笑顔で答えた。

「！……はい！いいですよ！」

「……そうか！ありがとう。では、改めて……これからよろしく頼む」

「はい！こちらこそよろしくお願います！」

・

新たに室府という謎の多い人物を仲間に加え、物語の舞台は北海道へ以降する。そこで某達は一つの闇を目撃することになる。果たして、それに対して某達はどうするのか。

お楽しみに

寒さと熊と勇者と危険を感じる

新たに室府を仲間に加えた某は北海道に行くためさらに北上していた。

「寒いなあ……」

さくさくと降り積もった雪を踏みながら歩いている某。着替えたもののやっぱり寒いのでついつい呟く。

「……そうだな、それに吹雪いてきた。今日はもう、どこかで一泊した方がいいんじゃないか？」

某の言葉を聞いた室府が空を見上げながらそう言うと言った某は首を横に振る。

「いえ、出来れば今日中には北海道にいきたいです」

某がそう言うと言った室府は顎に手をやって少し考えた後某に言った。

「……なら、急いだ方がいいだろう。このままでは雪で前が見えなくなる」

「えっそんなに降るんですか？」

「……恐らくな」

「なら、走りますか！」

「……ああ、だが滑らないよう気を付けてな」

二人は滑らぬよう気をつけながら、雪の中を走り抜ける。

「……そう言えば、某。君はどうやって北海道に行くつもりなんだ？」

室府が走りながら某に言った。

「空を飛んでいこうと思ってますけど……」

「……空を飛んでか……ふむ」

某の言葉を聞いた室府は難しい顔をして考えて後、某に言った。

「……空を飛んでいくのは難しいだろう。陸路で行こう」

「えっ？北海道って歩いて行けるんですか？」

室府の提案に驚く某。

「……ああ、青函トンネルと呼ばれるトンネルがある、そこを通ろう。こっちだ」

室府はそう言うと、先頭を走る某を追い越して誘導する。某も置いていかれぬようについていく。

・

室府の案内で某は青函トンネルの入り口に来た。

「ここから、行けるんですね」

「……そうだ」

某の言葉に室府は頷く。

「当たり前ですけど、やっぱり暗いですね……」

トンネルの中を覗きながら某は少し不安そうに言った。

「……そうか？フロムゲートの暗さよりはマシだと思うが」

「いや、比較対象それですか……」

室府の言葉に某は苦笑いを浮かべながら呆れたように突っ込む。

「それに、これだと足元が見えないから危ないですね」

某の言葉を聞いた室府は薄く笑みを浮かべると着ているコートの中に手を突っ込み懐から懐中電灯を取り出した。

「……これなら、少しは見えるだろう」

「あれ？いつの間に、そんなものを？」

「……こんな事もあるうかと町で手に入れてきた」

「やりますねえ！」

室府は少しどや顔で某に言う。某も室府の好プレーに賛辞を送った。

「……では、行くか」

「はいー」

室府は懐中電灯の電源を入れ、中に入り某も続いて入った。

「うひゃく……わかつてはいたけどメチャクチャ暗いな。ライトがあっても全然見えないや」

「……とりあえず、足元は気をつけてくれ。ケガをすると危ない」

「はい」

二人は暗いトンネルの中を慎重に進んでいった。

・

トンネルを抜けると二人に凍りつくほどの冷たい風が突き刺さる。

「寒っ！向こうより寒っ！」

「……そんなに寒いか？」

某がガチガチと歯を鳴らしながら震えていると室府はその様子に首をかしげる。

「寒いですよっ！むしろ、なんで平気何ですかっ！」

全く寒くない。といった感じの室府に突っ込みつつ、某は周囲を見渡す。

「もうすっかり日が暮れてしまいましたね……」

「……そうだな、今日はここまでにしてどこかで休むか？」

室府が某にそう訪ねると某は首を横に振る。

「いえ、このまま人がいるところにいきましょう」

「……わかった。では、そうしよう」

室府は頷くと某の前を歩く。某も遅れぬようついていく。

歩き始めて一時間程たった頃だろうか、急に室府は振り返り某方を向いた。

突然のことで驚いた某だったが室府が深刻そうな表情をしていたため某は「何かあったんですか?」と訪ねた。すると、室府は人指し指で頬を掻きながら申し訳なさそうに言った。

「……すまない。人がいるところがわからない」

まさかの言葉にずっこける某。

「わからないのに先頭歩いたんですか!?!」

「……すまない。年上なのにすまない」

目を反らして、謝罪する室府。

そんな室府に某は「ええ……」と困惑しながらも、カーナビに人がいるところを聞くことにした。

「カーナビさん、人がいる所の案内をお願いします」

《待ってる……スパイダー感覚に閏知あり、なんと50キロの地点!

(絶望)》

「デタラメユウナ(OMO#)お前はいつから東映版のスパイダーマンになったんだ。真面目にやれ」

《悪い、悪い。……そこから、7020キロだ。》

「ヒトヲオチヨクツテルトブツトバスゾ(OMO#)ブレイドネタで繋げてきやがってこつちは寒くてイライラしてんだよ」

某は「ああ……」と首を回しながら苛立ち気にカーナビに言った。

《しようがねえな……(悟空)あつちにずーとまっすぐ行けそしたら町に着くよ》

「あつちってどつちだよ?」

《俺に質問をするな》

「ナニイツテンダブチャケルナ!(OMO#)」

某がカーナビと揉める中、室府はその光景を見て首をかしげる。

「……すまない。少しいいか?」

「あつはい。何ですか?」

「……一体、誰と喋ってるんだ?」

「誰ってそりやあ……、あつ、そつかあ……（理解）そういえば人前でカーナビさんと話すの初めてかもしれない。えつとですね、カーナビさんっていう私に助言してくれる人？がいますてその人と話してたんですよ」

「……ああ、なるほど。案内人ナビゲーターと会話していたのか」

某の説明を聞いて頷きながら納得する室府。

「ナビゲーター？」

室府が言った専門用語っぽい言葉に今度は某が首をかしげた。

「……ナビゲーターとはその名の通り案内をする者のことだ。私もよく助けられているよ」

「あつ、室府さんもカーナビ持つてるんですね」

「……持っている」と表現していいかわからんが、まあおおむねその通りだ」

《おーい、ちよつといいか？》

突然、カーナビが某に話しかけてきた。

「何ですか？また、ふざけたことを言うんじゃないでしょうね？」

某は苛立ち気に応じるとカーナビは続けて言った。

《お前さんが目指してる人のいる場所なんだか——現在進行形であいつらが襲撃してるぞ》

「はあ!?それを早く言え！」

カーナビの言葉に某は驚愕し同時に怒りを露にする。

「方角はどっち!？」

《お前から見て一時方向に真っ直ぐだ》

「わかった！」

某はすぐさま行動に移った。

「——変身！」

空から一つの光が尾を引いて某に落ち、光輝く。

光が消えると某の背には金属の翼が生えていた。

「……なんだ、それは？」

室府が某の起こした現象に困惑し某に訪ねる。

「すみません！時間がないんで後で説明します！」

「……何があった?」

某の切羽詰まった表情を見て室府は某に聞いた。

「私の目的地が襲撃を受けているんです!急いで助けにいかない!」

「……なに?わかった。急ごう……だが、その格好からして飛んでいくのだろうか?私は飛べないのだから大丈夫か?」

「……私に良い考えがある!」

某は鏡を人一人を乗せれるぐらいの大きさにして室府の近くに浮遊させる。

「それに乗ってください!乗り心地は保証します!」

「……ありがとう」

室府は鏡に飛び乗った。

「——っ!」

それを確認した某も翼の羽ばたかせ上昇、そして、一気にカーナビが示した方角へ急加速した。

・

「これは、ひどい……」

移動速度の関係で先に到着した某が目にしたのは半壊した建物と化け物に襲われたであろう人の血溜まりだった。

地上に降りて血溜まりを確認するとまだ、新しかった。

しかし、これをやった化け物の姿が見当たらない。

「間に合わなかったか……っ!」

某は悔しげな表情で俯いて、拳を握りしめた。

すると、どこからか大きな音が聞こえた。

「——っ！そっちか!？」

音の大きさからしてここからそう遠くない場所に化け物がいると確信した某は再び飛び上がり音のした方へ向かう。

「!……誰か戦ってる!？」

某の視線の先には複数の白い化け物に槍を投擲している少女の姿が見えた。

「——っ！」

某はさらにスピードを上げ、その勢いのまま化け物を三体切った後、少女の前に滑るように着地した。

「おまたせ！加勢するけどいいかな？」

「えっ……?どちらさん……!?!何で羽生えてんの!?!」

「質問は後にして！それよりも早くこいつらを片付けるよ！」

突然現れた某に驚愕する少女にそう言って剣を構える某。

「わ、わかった！」

少女も槍を構え向かってくる化け物を見る。

「——セイヤーアーツ!!」

某は飛び上がると気合いの叫びと共に高速で化け物に接近、すれ違い様に切っていく。

「——オリヤッ！」

地上からは少女が槍を投擲し、化け物達を串刺しにしていく。

(よし、このまま一気に……!)

順調に化け物の数を減らせてきたので大技で一気に決めようとしたときだった。

「……ひぐっ……ぐすっ」

某の耳に子供のすすり泣く声が聞こえた。

あわてて泣き声のした方を見れば物陰に十にもなっていないであろう女の子がうずくまって泣いていた。

(逃げ遅れたんだ！早く助けないと！)

某は女の子の元へ行こうと体の向きを変える。

すると、それを隙と見たのか化け物たちが一斉に某へ突進してき

た。

「うおっ!?!……ちよー……邪魔すんな!」

突進してきた化け物を間一髪で避けるがそのせいで女の子との距離が開いてしまう。

「やばっ……どりゃーっ!」

距離が開いたことで焦った某は斬撃を飛ばし周りの化け物の数を減らす。

しかし、直撃を免れた一体が不運にも女の子の近くに落下する。

「ひっ……あっ……あっ」

突然落ちてきた化け物に女の子は驚きそして、恐怖で動けなくなる。

そして、そんな動けない女の子を化け物が捕捉した。

「っ……まずいっ!」

その光景を見た某は急いで向かおうとするが周りの化け物に妨害される。

ちらりと地上にいる槍の少女を見るとそちらも同様に化け物に邪魔され動けないようだった。

化け物は女の子に大口を開けて襲いかかる。

「イヤアアアアアッ!!」

女の子は恐怖のあまり叫び声を上げて目をつむる。

すると、上空から円盤状のなにかが化け物と女の子の間に落ち、女の子を化け物から守った。

遅れて、今度は化け物の上に人影が落ちる。

「……すまない。遅れた」

——落ちてきたのは室府だった。室府は着地したついでに刺した槍を化け物から抜くと女の子の元へ歩き。

「……ケガはないか?もう大丈夫だぞ」

かがんで女の子と目線を合わしながら安心させるように言った。

「……ひぐっ……えぐっ……うわああああん!!」

室府の言葉に緊張の糸が切れたのか女の子は室府に抱きついて大声で泣き始める。

室府はそんな女の子の背を優しく撫でて後、女の子を抱き上げ某の方を向いた。

「……こちらはもう大丈夫だ！手早く済ましてくれ！」

「了解です！」

室府の言葉を聞いた某は剣にエネルギーを込めてその場でくると一回転する。すると、巨体な輪のような斬撃が某を中心に広がるように放たれ、某を囲んでいた化け物を全滅させる。

「槍の人！うまいこと避けてくださいね！」

「槍の人？……それって私のこと？……つていうかうまいこと避けろとは……？」

某の困惑する少女。しかし、某はそんなことお構いなしだ。

「オーツ！リヤーツ!!」

某は斬撃を少女を囲んでいた化け物に向け放った。

「ちよーちよーちよー待って!!——ウワアアア!!」

少女はあわてて飛び込むように斬撃を避け、放たれた斬撃は地面を抉りながら化け物を消滅させた。

「ふう……うまくいってよかったよかった！」

某が着地すると少女は某に怒りの形相で走り寄った。

「全然よろしくないよ！なに今の、完全に私ごと葬る気だったよね!？」

某の肩を掴んで揺らしながら怒鳴る少女。

「そんなことないですよ!?!第一、やる前に警告したじゃないですか!？」

某は首を横に振りながら弁明する。しかし、少女の怒りはおさまらない。

「警告したじゃないですか、じゃないよ！警告から放つまでの時間が短すぎるよー！」

「それは……一刻も早く助けなきやと思って……」

「じゃあ、あのはかけた火力はなに？明らかに過剰でしょうよ」

少女は先程の某の攻撃で抉れた地面を指さしながら叫ぶ。

それを指摘された某は少し考えた後こう言った。

「貴女なら避けれると思ひまして……」

「いやいやいや、何でそんなに私に対する信頼度が高いのさ……私ら

まだ名前も知らない仲よ?」

「あつ、そつかあ……(迂闊) じゃあ自己紹介しましょうか」

「いや、この流れでやる?普通……」

「……二人ともそのへんにしておけ」

言い争う二人の前に一旦、避難していた室府と女の子が戻ってきた。

「あつ、室府さん!女の子はもう大丈夫ですか?」

「……ああ、問題ない。ただ……この子がな……」

室府が困ったような表情で女の子を見ながら答える。

すると、女の子が前に出て某を見上げながら言った。

「あのね!お姉ちゃんお願いがあるの……」

「うん?なあに?」

某はしゃがんで女の子に優しく声音で聞いた。

「おうちにね、置いてきちゃったの!だいじなもの!だから、取りに行きたいの!でも、こわくて……だからねつれて行ってほしいの!」

「え、それは……(困惑)」

某は返答に困った。室府や槍の少女に目をやるが二人とも首を横に振っている。

某は二人の反応を見て頷くと女の子に言った。

「ごめんね……危ないからそれはできないんだあ……ホントにごめんね……」

「えー!なんで、なんで!」

女の子は某の服を掴んで揺らしながら駄々をこねる。

(困ったなあ……あつそうだ「閃き」)

「じゃ、こうしよつか!お姉ちゃんが代わりに取りに行つて上げるよ。だから、待つててくれないかな?」

「え、いいの?」

「いいよ!だから、おうちの場所とだいじなものを教えてくれないかな?」

「……えつと、おうちの場所わかんない……」

「ええ……それは困ったなあ……なにか目印になるものつてない?」

「うん……あつ！お花！」

「お花？」

「うん！おかしさんと折り紙で作ったお花貼ってるよ！」

「そうなんだ……。それで？……だいじなものってなにかな？」

「ダディ！……赤いリボンのつけてる熊さんのぬいぐるみだよ！」

「わかったよ。ダディを絶対持つてくるから待っててね？」

「うん！」

……

あの後、女の子を女の子のご両親の元へ送り届け、某と室府、そして槍の少女は女の子の家を探していた。

「あっそうだ（唐突）自己紹介してないよね。私は某だよ」

「……私は室府 久玉という。室府と呼んでくれ」

「今更やるのか……某さんに室府さんね。私は秋原 雪花。ここでは

一応、勇者をやっているよ。よろしく」

「こちらこそよろしく！雪花さん！」

「……よろしく頼む」

そして、自己紹介を終えた三人は再び女の子の家を探す。

「あつ、あれじゃない？」

雪花が指さしながらそう言うと二人もその方を見る。すると、窓に折り紙で作った花が貼つてある家を見つけた。

「……間違いなくあれですね」

「……だが、どうする？鍵がかかっているようだが」

「そうですねえ……あつそうだ。良いこと思い付いた」

某は屋根に跳び移り窓に近づくと剣を構えて

「FBI open up!!」

窓を叩き割って侵入した。

「なにしてんのさーっ!!」

雪花の迫真のツツコミが静かな住宅街に響いた。

「さて……ダディはどこだあ……う」

そんなことは置いておいて某はダディを探す。

「おっ……これかな？」

部屋のすみに置いてあるおもちゃ箱に熊のぬいぐるみの頭が見えた。そして、某はそれを引っ張り出した。

「……なんで、この熊亀甲縛りされてんの？」

なぜか、ダディは亀甲縛りされていた。

(まさか、これじゃあないよね?)

某は念のためおもちゃ箱を漁るがこれ以外に熊のぬいぐるみはなかった。

「……まじか、これなんか……」

某は釈然としない表情のままダディを角度を変えながら観察する。すると、腹の辺りになにか固いものが入っていることに気づきそれを触る。

「オレモイッチャウウウウウ!! イイイイイ!!」

「ファッ!!」

突如、ダディから大音量でおぞましい鳴き声が鳴り出した。

某はその声に驚きダディを床に落としてしまう。

「アッ……アッ…… (余韻)」

床に落とされてなおダディからは虫酸の走る声が出ている。

その光景を見て某は思った。

(あの子、絶対ろくな大人にならねえな……)

なお、他人事のように言っているが某も人の事は言えない模様。

そんなこんなで某は無事ダディを見つけ、家からでて二人に合流する。

「おまたせ！ 戻るけどいいかな？」

「いいかなじゃないよ！ なにやってんのさ！ 他人んちの窓割っちゃつ

て!どうすんの!?!」

雪花、再び猛烈なツツコミを某に浴びせる。

「しよーがないでしよーが、あーしなきや中入れないんだもの」

一方、某は特に反省する気のない態度で返す。

「……おいおい、二人ともその辺にしておけ。某、探し物は見つかったか?」

「もちろん!」

そう言つて某は先程見つけたダディを二人に見せる。

「……それが、あの子のいつていたダディ……か?」

「なんで、縛られてんの……?」

「……やっぱ、そうゆう顔になりますよねえ……」

そのダディの姿に二人は困惑し、マジでこれなん?と言いたげな表情をする。某も二人の反応を見て同情する。

しかし、こんなことに時間をかけたくないので某は戻ろうかと二人に提案する。

「……そうだな」

「私も賛成。正直、戦つた後だから疲れたよ……」

「じゃあ、あの子にコレを私にいきますか」

某は女の子が待つ避難所へ歩き出す。それに二人もついていく。

「……某」

「なんです?」

「……私達は必要だったか?」

「……正直、私だけでもよかったですね……」

「まあ、いいんじゃない?多い方が見つける手間も減るでしょ」

「ん、そうですね」

「……そうだな」

雪花の言葉を聞いてそれもそうかと思ひ二人は気にしないことにした。

・・・

「はい、ダディ見つけてきたよ」

「わあくダディだ。ありがとうお姉ちゃん！」

避難所に戻った某は女の子にダディを渡す。受け取った女の子は大喜びでダディを抱きしめ某たちにお礼を言おうと親のもとへ走っていった。

「結局、なんで縛られてたんだらうね」

「知らないほうがいいわ（触らぬ神のなんとやら）」

「……きつと、複雑の家庭環境なんだろう。放っておけ」

「それもそうだね。忘れよ」

雪花は縛られたダディのことが気になったが某と室府は（気に）してはいけないと思いい雪花に詮索をしないように言う。それを聞いた雪花もそれほど興味はなかったのですぐに忘れた。

「さてと、それで？君らはこれからどうすんの？」

「あー……そういえば、そのへん考えてなかったな……」

雪花の言葉に某は寝泊まりする場所について考えてなかったことを思い出し頭を抱える。

その様子に雪花は苦笑いしながら言った。

「ええ……。今晚はかなり冷え込むし避難所はもういっぱいだよ？どうすんの？」

「……野宿、だな」

「ここをキャンプ地とする！（震え声）」

「君ら……死ぬ気？」

現在の気温はマイナス10℃、これから日が沈んでさらに気温が下

がる中、某達は野宿すると言う。バカじゃねえの？（嘲笑）

しかし、それでも彼女らはやるだろう彼女らは優しいから人に迷惑かけないよう黙って死んでいくだろう。

「はあ……しよーがないな。さっきは助けてもらったし……二人ともよかつたらうち来る？」

「……すまない。恩に着る」

「ありがとうございます」

雪花は考えなしのバカどもに自分の家に来ないかと誘う。雪花の提案を聞いて室府は頭を下げ、某は土下座した。

こうして某達は極寒の地、北海道に上陸し、北海道の勇者、秋原雪花に出会った。諏訪や四国よりも遥かに過酷な環境の中、某はこの先生き残れるのだろうか？

近いうちに続く

蟹、襲来

某達が北海道に着いてから早くも1ヶ月が経過した。季節はもう冬から春に変わる辺りだと言うのに未だ北海道は極寒のままであった。

雪花が言うには天の神と北海道を守護する神カムイの戦いの影響で環境がかなり変わってしまったらしく、あの日からずっと、こんな天気だという。

さらに、某達が北海道での初陣を行った日から連日、化け物が襲撃してくるようになった。そのため、某達は交代で見回りをする事になった。

そして、雪花の見回り時間が終わり某の番になったのだが……。現在、某は一人が入れるサイズのかまぐらの中で膝を抱えた状態で震えていた。

「アカン……寒い……寒過ぎるで工藤う……！」

「いや、工藤って誰よ……。それより、交代の時間なんだけど……。とりあえずかまぐらから出てくれる？」

ひよっこりとかまぐらの中を覗きながら見回りを終えた雪花が出てくるように言う。それに対して某は震えながら雪花を見る。

「嫌でござる。絶対に働きたくないでござる」

「……かまぐら崩すよ？」

雪花がそう言いながら槍をちらつかせると某は青ざめながら叫んだ。

「ど”う”し”て”そ”ん”な”こ”と”す”る”の”!?”わ”た”し”を”こ”ろ”し”た”い”の”オ”!?”」

「はい、カウントダウン。5、4、3」

バンッ!

しかし、雪花は某の訴えをスルー。さらに、カウントダウンまで始めたが3の段階で槍をかまぐらに叩きつけた。

「あ。あ。あ。あ。あ。!!雪が服の中に!中に!」

かまぐらを潰され雪に埋もれる某。その際、服の中に雪が入りその

冷たさに叫び声を上げる。

「ぜーっ、ぜーっ、……何て事をしてくれるんですかねえ……！」

雪から転がり出て、息を整え、雪花に不満そうに訴える。

「いやいや、三人で話し合って決めたことだし……それに、私もやったんだからさ」

「同調圧力ひで」

「?……ひで?なにそれ?」

「なんでもないです。……はあ、よっこいせ……」

某はため息を吐いて立ち上がると服に付いた雪を払い支度を始める。

「ほんじゃ、行ってきまーす」

支度を終わると某は見回りに行った。

「行ってらっしやい。さてと、ふあ〜……寝よ」

雪花は某を見送ると欠伸をしながら家に入っていった。

・・・

(さてと、今日はどのあたりを見回ろうかな)

「これはこれは、勇者様ではありませんか」

(げっ……)

どこから見回っていくか考えていた某は背後から聞こえてきた声に嫌そうな顔をするが、表情を直して振り返る。

すると、そこにいたのはあの日以前にこの地域一帯の指導者を名乗る男。その男は笑みを浮かべながら近づく。

「いつも苦勞を掛けますな。君たちのお陰で私達はこうして生きられている」

「いやいや、そんなことないですよ。他の皆さんも必死で頑張ってくれてるからですよ」

男の言葉を某は作り笑いをしながらやんわりと否定する。

「そう謙遜しないでくれ。勇者様……いや、あえて某君と呼ばうか。君の働きは誰よりも私が評価しているよ」

「ははは。偉い人からそう評価してもらえるのはありがたいですねえ……」

(そんなこと一切思っていないでしょうに……)

某は内心、悪態をつきながら男に礼を言う。

「だから、私の家に来ると良い、身寄りもないから心細いだろう」

「ははは。でも大丈夫ですよ今はこの勇者の家に厄介になってますので……」

「この勇者……秋原君のことか。彼女もご両親が亡くなられて大変だろうから。なんだったら彼女と君と一緒に来た……室府君だったかな？ 二人も一緒に来れば良い」

「……そうですね。今度、相談してみますよ。では、私は見回りに戻りますので」

「ああ、よろしく頼むよ。某君」

某は男に頭を下げた後、逃げるようにその場を後にした。そして、見回りをしながら疲れたように呟いた。

「あくあ……あの人だけじゃないけど会うたびに声をかけては家に来ないかと誘ってくるのはどうかと思う」

某達がここに来てからというものここの役員を勤めていた者達の勧誘がほぼ毎日行われている。某は最初は向こうが諦めてくれるのを待っていたがいつまでたっても勧誘をやめる気配がなかった。

「やっぱり、戦っているのを見られたのがまずかったなあ……」

某はつい先日の化け物の襲撃の事を思い出す。あの時はいつもより比較的規模が大きい群れが襲撃してきた。その時の見回り当番は某でいつものように一撃で群れを屠った。その光景を見た住人らはこぞって某を家に誘うようになり、住人から話を聞いた役員らも誘うようになった。無論、こういった勧誘は元々いた雪花や室府にも行わ

れているが某が集中して誘われる。

理由としては、まず、室府は未だ人々目の前で戦っていないため人々も室府の実力が分からないことと雪花の方は今までここを守ってきた実績があるため某の次に誘われることが多いが某に比べ言い方は悪いがインパクトに欠ける。そのため、某は役員達や住人に目をつけられている。

しかし、この状況下で徐々に精神が弱りつつある人々にとってまったく歯が立たなかったあの化け物の群れを簡単に屠る某の存在は希望のようなものだろう。だから、人々は「某に側に居てほしい」「優先的に守ってほしい」という思いで某にすがる。

「でも、もうちょよつと頻度抑えてほしいな……」

某もその気持ちはよくわかっていた。彼女とてあの日より前は普通の少女であり、自分もあの日の恐怖を知っているからだ。しかし、それでも毎日、毎日保身に走った言葉を聞かされていると気が滅入る。

「今度、室府さんに住人の人達に見つからないように化け物を倒すコツでも教えてもらっおかな」

先程も言ったが室府は一度も人々の前で戦ってはいない。というよりも、なぜか室府が当番の時間帯は化け物の襲撃が無いのだ。誠に不思議である。

「——つと、考えながら歩いてたら端の方まで来ちやったか」

気付けば某は町の端の方まで来ていた。これ以上先には用はないので引き返そうと振り返ると

「……うわ」

某の視界に映る建物の物陰からいくつもの視線を感じた。これには思わず一歩引いてしまう某。

(……アイドルが顔を隠して生活するのもよくわかるわ……これはストレスたまる)

自分に刺さる無数の視線に某はめんどくさい気持ちになるが別に悪意を向けられているわけではないので何も言えない。

(屋根の上を通っていこうか……)

このままずっと見られているのもいい気はしないので某は屋根の上に跳ぶ。それにより、先程より視点が高くなったので某は化け物の襲撃でボロボロになった街全体を見回した。

「諏訪に比べるとやっぱりひどい有り様だなここは」

《そりやそうだ。諏訪には四国程じゃないが結果があつたが、ここにはそれがない。あるのは精々人の存在を認識しづらくする程度の力モフラージュだけだからな》

「あつ、カーナビさんおはよう」

《good morning! 某。いつもいつも、くそ野郎共の保身に走つた台詞を聞かされてどうだ? 気分は?》

「……正直、良くはないですよ。けれど、仕方ないですよこんな環境じゃ……保身に走りたくもありませんつて」

《相変わらずお優しいこつた。俺なら見限るわ》

「そんなこと言わないでくださいよ。それに、それは一部の人だけですから」

《一部? 俺にはほとんどの人間がそんな感じに見えるが?》

「……………気のせいです。さつ! そんなことより今日も索敵お願いしますね」

《へいへい》

見えないところにいる化け物の索敵をカーナビに任せ某はまた、街を見回す。ちよつとした異変でもすぐに気づけるように

・
・
・

時間さらに進んで某の見回り時間は終わりを迎えようとしていた。

「あー……やっと終わる。今日は何事なく終われそうだなあ」

等と体を延ばしながら某がフラグっぽい事を言っていると

《クハハ！ フラグ乙く、ククツ、あいつらが来たぜく》

「フ○ツク！」

思わず、壁をぶん殴って壊す某。そりやそうだ仕事の終わり際に仕事追加されたら誰だって怒る。

《しかも、久々の大物だく！クククツ！》

「……ちようどいいや。最近、小物ばかりで足りなかったんだ。楽しみだなく、ははは……」

そう笑顔で言いながら二人もフラフラと化け物へ歩く某。その目には憤怒の炎が激しく燃えていた。

・
・
・

「ここかあ、祭りの場所はあ……」

数分後、某は化け物の元へたどり着いた。そして、某の視線の先には大型の化け物がゆっくりと街もう目掛けて進んでいた。

その姿は某が今まで戦ったどの化け物とも一致しないもので大きな六枚の板状のものが浮いていた。初めて見るタイプの敵に某は顔をしかめた。

「見た感じ……あの板っぽいので何かするんだろうけども……相変わらず読めないなあいつらの行動パターン」

《見た目で能力がわれるような設計してないからな……まずは偵察すると良いだろう》

「ん、そうですね」

某は剣を抜いて構え、ゆっくりと近づきながら様子をうかがう。しかし、いつまでたっても敵は攻撃することはなくただただ移動していた。

「あれ……？今までのやつならもう攻撃してくるんだけどなあ……もしかして、こいつ攻撃手段がないのか？——なら、こつちからいくよお！」

某は剣の刀身にエネルギーを込め振り上げる。剣先から放たれた斬撃はまっすぐ大型の化け物に向かっていく。

すると、ついに大型の化け物が動き出した。向かってくる某の斬撃を板状のもので防いだ。

「うっそお……今まで避けられることはあっても防がれたことはなかったのに……堅すぎだろあの盾みたいなの」

某は板状の物もとい盾の防御力に驚く。先程放った斬撃は某が出せる最大の出力で放ったものだ。それを防ぐとなると今の某が取れる戦法はかなり減る。

「——なら、直接ぶった切る！『酉！』」

某がそう言うと、空から光が某に落ち、某は光に包まれる。光が晴れると某の背に金属の翼が生える。

「ハアツ!!」

某は高速で接近し、エネルギーを込めた剣で盾を切りつける。すると、盾の表面についた丸い装飾が光を放ち爆発する。

「うわああああああ!!」

至近距離で爆風を浴びた某は空中に留まることができず吹き飛ばされ半壊した民間に突っ込む。

「……某！」

「某さん！大丈夫!？」

そこへ、室府と雪花が騒ぎを聞き付け合流する。雪花は某を吹き飛ばした大型の化け物を見て戦慄した。

「何あれ……あんなの倒せるの?」

「……? 雪花、君は大型と戦うのは初めてなのか?」

「そうだよ室府さん。今までは小さいのしか襲ってこなかったから……」

「……そうか、実は私も初めてだ」

「えーっ!……これは、厳しい戦いになりそうだなや」

「——大丈夫だって!でかいのは小さいのに比べて強いけど倒さない訳じゃないから」

初めて戦う大型の化け物に対し険しい表情を浮かべる雪花に瓦礫を押し退けながら某は安心させるように言った。

「くそつたれ……服がボロボロになったじゃないか……」

某は先程の爆発でボロボロになったブルゾンを脱ぎ捨てながら大型の化け物を見る。

「……某。寒くないのか?」

今はもうすぐ日が落ちかけ気温が下がっている中で服を脱いだ某を心配する室府。そんな室府に某は自分の首にかけてある勾玉を見せながら言った。

「すっかり忘れてたけど勾玉のおかげで寒さは大丈夫です!」

「えっ!?それってそんなことできるの!?!」

「大体のことが出来ちゃうのがこの勾玉君のすごいところなんだよ。あつそうだ、はいこれせっさんと室府さんの分」

某は紐で繋いである勾玉を二つとると二人に投げ渡す。

「えっ、いいの?こんな良いもの貰っちゃって」

「いいよいいよ!まだ、あるから!」

「……某、ありがとう」

二人は某から受け取った勾玉を懐に入れるとすぐに変化が起きた。

「……暖かいな」

「うわっすご!まるで暖房の効いた部屋にいるみたいに暖かいし、それになんか力がみなぎってくる?」

「あつそうそう。勾玉使うと身体能力が上昇するのとあと、なんかバリアが出るよ」

「うつそ?!マジ?!そんなこともできるのコレ!？」

某の説明を聞いて驚く雪花。そんな雪花を見て得意気にどや顔を
する某。

「……む?——某!小型が別方向から向かってきているぞ!」

「このタイミングでできたかあ……しょうがない、二人は小さいのを
願ひ、大きいのはこっちで何とかするよ」

「……いや、某。君と雪花で大型の相手をしてくれ。小型は私一人
十分だ」

「えっ? でも、かなり多そうですよ?」

「……大丈夫だ、問題ない。この前君が一蹴した群れに比べれば小
さい。それに、君もあれは初めての相手なんだろう? なら、味方は
多い方が良いだろう」

「室府さん……わかりました。小さいのは室府さんにお任せしま
す!」

「……任された!」

室府は群れに向かうためその場を後にした。残った二人はそれぞ
れの武器を構えて大型の化け物を見据える。

「それで?何か作戦とかある?某さん」

「とりあえずさつきの手応えから考えてみると非物理的な攻撃は効か
ないっぽいね。それでも、近づいて直接攻撃するとさつきみたいに爆
発するからダメだね」

「じゃあ、どうすんのさ?」

「それなんだけどね。せっさん、ちよつと盾に向かって槍投げてくれ
る?」

「わかった。せーのっ!はあーっ!!」

雪花は言われた通りに槍を盾に向かって投げた。

槍が盾に当たると盾の表面にある装飾が爆発、先程の某のように吹
き飛ばされる。

「……言われた通り投げてみたけど、コレって意味あるの?」

「さつき、爆発したところ見てみて。表面にあつた装飾がなくなつて
るでしょ」

某は指を差しながら雪花に言った。雪花もそれを確認したが首をかしげる。

「うん？　それがどうかしたの？」

「つまりね、あの装飾が無いところなら爆発しないんじゃないかなって」

「……ああ!!そうゆうことね!!」

某に言われようやく納得がいった雪花。さっそく、先程爆発した所に投げ込もうとするが投げる前にあることに気づいた。

「某さん！盾の装飾が元に戻ってるよ！」

「……マジか。ということは爆発直後狙わないといけないのか。となると、一発で決めないとなあ……よし！」

某は雪花に言われ盾を見てみると確かに爆発した部分の装飾が元に戻っていた。この事に某は少し焦るがその時、某の頭の中でひとつの作戦が閃いた。

「せっさん！槍貸して！」

「？。わかった、はいどうぞ」

某は雪花から槍を受けると槍にエネルギーに込め始める。そして、槍が耐えられるギリギリまでエネルギーを込めると槍を雪花に返した。そして、雪花に先程思いついた作戦を話す。

「せっさん。私もう一度、近づいて爆発させるからせっさんはその槍をそこに向かって投げて、うまいこと盾ごとあいつを串刺ししちゃって！」

「ええ……そんな難しいこといきなり言われても……」

「そこをなんとかお願い！　せっさんにしかできないことだからさー頼むよー……」

無茶を言っているのは某自身が一番分かっているため手を合わせながら頭を下げてお願いする某。そんな某を見て雪花は小さくため息をはいた。

「はあ……そこまで言われたら引くに引けないじゃん……まかせんしやい！一発で串刺しにして見せるよ!!」

「その言葉が聞きたかった……！」

某は再び上空に飛び上がった。

「はあーっ！ せいやーっ!!」

盾に近づき雪花から狙いやすい場所を剣で切りつけた。

「ぐう……っ！」

そして、盾の装飾が爆発し吹き飛ばされる某。そして、思いっきり叫んだ。

「いつけええええええ!!せっさんんん!!」

「はあー……っ!!おおりやーっ!!」

雪花は全力で槍を投擲した。放たれた槍は光の尾をひきながらまるで流星のようにまっすぐ装飾の無くなった部分に向かいそのまま、盾を貫き、本体に突き刺さる。

突き刺さった瞬間、槍に込められたエネルギーが解放され本体の内
部で炸裂し爆発が起きた。

「うわっ！すごい威力……」

爆発で起きた爆風で乱れる髪を押さえながら雪花はあまりの威力に驚く。

「……すごいな。あれを一撃で倒したのか」

そこへ室府が合流した。

「あつ、室府さん。そっちも終わった感じですか？」

「……ああ、今しがたすべて殲滅したところだ。ところで某はどこにいったんだ？」

「そういえば、まだ戻ってませんな」

「某。ただいま戻りましたーと」

噂をすればなんとやら遅れて某が合流する。しかし、なぜかその表情は暗く服装もなぜかジャージになっていた。それも、マゼンタ色に各所に動物のワッペンが付いたダサイジャージ。

「……某、服はどうしたんだ？」

疑問に思った室府が某に聞いた。すると、某は弱々しい声で言った。

「じつは、さっきの爆発で着ていた服がダメになっちゃってそれでさっき突っ込んだ民家から拝借したんですがサイズが合うのがコレ

しなくて……」

「……そうか、それは災難だったな。しかし、まあなんだ……ずいぶん
と、その、個性的なジャージだな」

「ぷっ……ははっ、ダメだ……我慢できない……っ！はははっ！」

「笑うなあーっ！このっ！」

「はははっ！ごっごめんって！はははっ！」

某のジャージがあまりにも可笑しかったからか我慢できず笑い出す雪花。そんな雪花に掴みかかる某。けれど、ツボに入ったのか笑い止まらない雪花。

「謝るんなら笑うなあ！ちくしよー、またジャージかよーっ!!」

そんな雪花に怒りながら、また服装がジャージに戻った某の悲痛な叫びが荒廃した街に響くのがあった。

苦戦

大型の一件から数週間がたった頃、某は室府、雪花の二人を雪花の自宅のリビングに呼び出した。

「某さん。何か話があるって聞いたけど、どうかしたの?」

「……何か、悩みごとか?」

突然の呼び出しに疑問に思い、某に訳を聞く二人。そんな二人に某は口を開いた。

「その前に二人に聞きたいんだけど、最近のあいつらのことで何か気づいたことない?」

「気づいたこと?」

「……そうだなあ」

二人は腕を組んで最近の化け物を思い浮かべる。しかし、特にこれといっておかしいところは見つからなかったようで二人は首を横に振った。

そんな二人を見て某は声をかける。

「本当に?些細なことでも良いから言ってみて」

「えっ?うーん……あつ、そういうえば最近、攻撃が当たりにくいような気がする」

「……ああ、確かにな」

雪花の言葉に室府は頷く。すると、某もやっぱり……とわかっていたかのように頷いた。その様子を見て室府は某に言った。

「……今日、呼び出したのは最近のあいつらの行動についてか?」

「そうです。最近のあいつらの動きが統率がとれたものになっています」

「それってあいつらに知性があるってこと?」

雪花が某の言葉を聞いて思いついた事を話すと某は首を横に振る。

「その辺りはよくわかんないけど、なんだか嫌な予感がするんだよね」

某の言葉を聞き二人は同意するように頷いた。

「わかった。とりあえず警戒しておくよ」

「……こちらでも何か分かればすぐに知らせよう。……それと、あまり

気が進まないが役員達にも事情を話して住民があまり外に出ないように指示を出してもらおう」

「その方がいいですね。守りながらの戦いはかなりキツイですから」
今後の方針が決まった。まず、住民達の外出の制限。これは、住民達の命を守るためと同時に自分達の負担を少なくするためだ。次に見回りの強化、今まで当番制で見回っていたが今日からは三人全員で24時間体制で見回る。

ブラック企業顔負けのスケジュールだが疲労や多少の負傷は十二支の「未」で回復出来るのと某の勾玉のおかげで外に居ても快適な温度下で活動できるので問題はない。

三人は以上の方針を元に各々行動に移った。某と雪花は見回りに室府は役員に先程決めたことを話しに向かった。

...

しかし、そう簡単には事は進まなかった。役員達との話を終え某達に合流した室府。

「室府さん、どうだった？」

「……すまない。役員達に掛け合っただがダメだった」

「そんな……!どうして……」

某は室府の言葉に驚き同時になんで?と思った。

「……役員達曰くそのような勧告は住民達の不安を煽り、パニックになりかねないとのことだった」

「人が死んでからじゃ遅いんですよ!?!何考えてるんだ、あの人達は!」

役員の言い分を聞いて某は怒りを露にする。そんな某を見ながら室府は話を続ける。

「……勿論、すべての役員がそのようなことを言った訳じゃない。何人か賛同してくれた人がいた。だが、あの及川という役員が賛成の意見を振じ伏せた。及川曰く君達に市民について指図する権利はない。それは私の役目だと」

「……あのおじさんか……！権利なんぞいつてる場合じゃないだろうに……クソツ！」

某は怒りのあまり近くあつた民家の塀を殴り付ける。怒りの炎に燃えている某に室府はさらに油を注いだ。

「……ああ、それと三人で見回りをするのは無駄だから一人は自分の警護をするようにとも言つてたな」

「——ナニツテンダ！プジャケルナツ！（OMO#）」

怒りの叫び声を上げながら某は塀を殴り壊した。

「ぜえ……ぜえ……こうなったら私が私が直接言いに行つてやる」

「……止めておけ。某が言いに行ったところで私と同じような事を言われるだけだ。それよりも、今は何が起きてもいいように備えるべきだ」

「……わかりました」

自分で直接頼みに行こうとする某を室府は首を横に振りながら止める。室府の言葉を聞き不機嫌な表情を浮かべながらも渋々引き下がる某。

「しかたない……なら、こっちはこっちで好きにやらせてもらう」

こつちの話を聞かないくせになんでそつちの話を聞かないやいないんだと思ひながら某は呟くと緊急連絡用に用意したトランシーバーのスイッチを入れる。

「せつさん聞こえる？」

『うん、問題なく聞こえるよ。何かあつたの？』

「えつとね、市民の外出制限のことなんだけど。却下されたよ」

『……えつ、なんで？普通に考えてその方が安全でしょうに』

「及川さんで察して」

『……あく、はいはい……なるほどね。あの人なら突っぱねそうだね。会議なんかでも誰かが意見を言ったら否定的だったし……』

「そマ？・会議の意味ある？」

『でもまあ今更何をいっても遅いわけだから運が無かったと諦めますか。……それで？・それだけじゃないよね？・』

「ああ、うん。とりあえずさっきの案が却下された時のために考えたことがあるんだけどね。出来るだけ街から離れた地点で化け物を倒そうと思うんだけど、どう？」

『私は良いと思うよ。万が一私らの防御が抜かれても距離がある分避難する時間は取れるはずだから』

「よかった、じゃあそれでいこう。室府さんもそれでいい？」

「……大丈夫だ。問題ない。」

「よし、そうと決まればさっそく行くか！」

某と室府は街の外側に向け跳んだ。途中、雪花も合流しそこで細かく話し合い以下のような動きになった。

三人で三つに分かれ、街を囲うように一周しながら警戒し異変があった場合、一人で対処が難しい場合はすぐに連絡する。また、何もなくても、30分おきに連絡を入れる。

これが今の某達が出来る対処法だった。

(……これで、うまくいけばいいけど)

しかし、某の嫌な予感が消えることはなかった。そして、その予感
は早くも的中することになる。

・
・
・

日付が変わり、もうすぐ昼時になる頃、それは来た。

襲来したのは大型や中型でもなく、小型の白い化け物。某達にとっては雑魚であり、何百体と倒してきた存在。しかし、今日はいつもとは様子が異なっていた。

「こちら、某。白いのがやって来たけど……飛びかたがおかしくない？」

『……こちらでも確認した。こちらもいつもとは違う飛び方をしている』

『私のところもおかしいよ。あと、すごく高いところを飛んでる。こっからじゃゴマ粒にしか見えなくらいに』

化け物は三方向からやって来た。数は少ないがいつもと違い戦闘機のように陣形を組み、かなり高い高度で飛んでいた。雪花が言ったように勇者の強化された視力をもってしてもゴマ粒にしか見えないのであれば普通の人間には見えないだろう。

『……某、どうする？』

室府が某に指示をおおぐ。某は少し考えた後、室府と雪花に言った。

「とりあえず、私が一発牽制してみる。それで様子を見よう」

『……わかった』

某は剣を構え、エネルギーを剣に込める。そして、全力で上空の化け物に放つ。

しかし、やはり遠すぎたのか某の攻撃は当たる前に気付かれ避けられる。

「まあ、そうなるよね。さて、どう動く？」

某は上を見上げ、化け物の動きを見るが特に変化はなく元の陣形に戻って前進していた。まるで某のことを無視するように

「……やっぱり変だ。いつもなら真っ先に向かってくるのに」

某がいつもとは違う反応をする化け物に困惑しているとトランシーバーから二人の慌てたような声が聞こえた。

『こっちのやつらが急に速度を上げてきた！』

『…………こちらもだ!』

「……………とりあえず、一旦戻ろう!」

『了解!』

某は嫌な予感がし大急ぎで町へ戻った。

……………

「うわああああ!!」

「いやああああああ!!」

「助けてくれええ!!」

町に着くとそこは阿鼻叫喚の渦に包まれていた。住人たちは逃げ惑い、上空からは白い化け物が雨のように降り注ぐ。

「あ——」

「ツ!?危ない!」

住人の一人に白い化け物が迫る。それに気づいた某が慌てて手を伸ばすが某の目の前で住人が食われた。

「ツ……………そんな…………」

『ほう?……………高高度から位置エネルギーを利用して加速して地上の人間を襲うか……………成長してるなア』

「感心してる場合かツ!!」

某はカーナビを怒鳴り付けながら融合形態“酉”を発動、翼を広げ

降ってくる白い化け物に飛び込んだ。

「はあああああああッ!!」

一体、二体とすれ違うように上昇しながら切り捨てる某。そこへ別方向から一体突っ込んできた。

「こんの……ッ!」

某は突っ込んできた化け物を切り裂いた。

「なっ!?!」

切り捨てた化け物のすぐ後ろにもう一体、化け物がおりそれを見た某は目を見開いて驚いた。

化け物は大口を開け某に迫る。それに対し某は攻撃直後だったこともあり、少し体をずらすことしかできなかった。

ガリッ!

ずらしたことで化け物の歯は某に当たることはなかったが左の翼に噛みつかれてしまう。片翼が使えなくなったことにより飛ぶことが出来なくなった某の体は落下し始める。

「ぐ……ううー!」

某は残った翼を使い、なんとか落下を止めようとするがそこへ畳み掛けるように次々と白い化け物が襲いかかる。

「うう……っ!」

一体が右の翼に噛みつき、さらにもう一体が某に迫る。某は剣で化け物の突撃を防ぐ。

しかし、位置エネルギーで加速された突進はすさまじく翼を封じられた某はどうすることもできず地面へと叩きつけられた。

さらに、叩きつけられた某に旧劇のエヴァ量産機の如く化け物が群がる。

「この……っ!」

某は自分を食おうとする化け物を押し返そうとするがさらに上から別の化け物がのしかかってくる。

「重……い……っ!、……ッ!……ああっ!?!」

某は自分にのしかかる化け物達の隙間から人々が次々と食われていくのを見た。

「止める……」

懇願するような声を思わず出す。しかし、化け物は無情にも住人たちを食らっていく。

「止めろおおおおおッ!!」

某が叫んだその時、天から光が某に落ちた。

光が某を包んだ瞬間、のし掛かっていた化け物達が吹き飛ばされる。

「——うおおおおあああああッ!!」

怒りの叫びをあげる某の姿は先程とは変わっていた。

背の翼は消え、両腕に巨大な拳のようなが装着され某の体には凄まじい力が迸っていた。

その名も、融合形態『申』

十二支の申と融合した。接近特化の形態である。

「——ぶっ潰すッ!!」

某は化け物に向け跳ぶ。

そんな某に化け物達は次々と突進する。

「ハアッ!!」

一方、某は正面から突進してくる化け物達を砕いていく。

「——っ!」

化け物は正面からは不利と判断したのか四方向から某を囲うように突撃する。

「せええやあああッ!!」

某はその場で回転するように裏拳を放ち。四方向から来る化け物を砕く。

「化け物は………全部、ぶっ潰すッ!!」

次の化け物に向け某が飛びかかる。そして、先程とは同じように砕いていく。

「アアアアアアッ!!」

何度も何度も目に写るすべての化け物を潰しまくる某。

気づけば、某の周囲にいた化け物はすべて某の手によって砕かれた。

「はあ……はあ……」

某は周囲に化け物がないことがわかると膝をつき、肩で息をしながらうつむいていた。

「某さん！大丈夫!？」

「某、無事か!？」

そこへ室府と雪花が合流する。二人は某の様子がおかしいことに気づき駆け寄る。すると、某が振り返った。

「室府さん……せっさん……」

「……某、なんで泣いているんだ?」

某は泣いていた。それを見た室府はかがんで某の両肩に手をおいて聞いた。すると、某は泣きながら答えた。

「街の人たち……守れなかったよお……っ」

「……某」

「目の前にいたのに……っ助けてられなかった……っ……あああああああ……ッ!」

某は室府の胸に顔を埋め、涙を流す。

「……大丈夫だ、某のせいじゃない」

室府はそんな某の背を優しく撫でながらそう言った。

「でも……っ、私、……っ!」

しかし某は納得がいかないのかまるで自分を責めるように自分の気持ちを吐露する。

「そうだよ、某さんのせいじゃない。むしろ、良くやった方だよ、これは」

「え……っ?」

すると、雪花も某の頭を撫でながら励ますように言った。某は雪花の顔を見上げながら困惑した。

「だってそうじゃん。今までの見回りのやり方だったら間違いなく出遅れてもつと人が死んでたかもしれない……だから、某さんは良くやったよ」

「でも……、一人でも死んだら……意味ないよ……」

「いくら私たちが強くても所詮は子供だし、すべての人を助けることなんてできないよ。だからさ、ほどほどでいいんだよ」

「ほどほど……?」

「そ。ほどほどにね」

某は雪花の言葉を聞き考えた。確かにいくら強くてもどうしようもない事がある。それでも、助けられるのなら助けるべきだろう。だから、自分はすべての人を助けるように思った。でも、それは力不足で叶わなかった。

(……ならばア答えは一つ……っ！特訓して力をつける……っ！すべての人を助けるために！)

某は決心した。力をつけ必ずすべての人を救ってみせると。某は涙を手で拭い立ち上がり、室府と雪花を見た。

「室伏さん、せっさん……私は決めたよ」

「なにを?」

「私の前で人が殺されるのは今日で最後にする。必ず……必ず救ってみせる……だけど、今の私じゃ力不足だ……だから強くなる。そのために……改めてお願いします。二人の力を貸してください!」

「某……」

「某さん……」

某の決意表明を聞き二人は互いの顔を見合わせた後、笑い某の方を向いた。

「今さらなに言ってるのさ。お願いされなくなったら私の力でよければ貸しますよ」

「ああ、いつでも力を貸すぞ」

「室伏さん……せっさん……ありがとうございます……」

某は二人に感謝した。そして、絶対に強くなろうと思った。某の言うすべての人に二人も入っているからだ。

「よし、そうと決まれば早速、特訓……といきたいけど、その前に被害状況の確認をしようか」

「そうだね……」

「ああ……」

その後、某達三人は手分けして生存者の搜索や被害の確認を行った。

船を探せ

釧路にあるとある港に某、雪花の二人はやって来ていた。(室府は留守番)

「よし！それじゃ始めようか！」

「ねえ某さん、本当にやるの？」

「もちろん！そのためにわざわざいん なとこ ろにやってきたんですから！」

「でも、ほんとにうまくいくの？ 船で北海道から脱出するなんてこと」

雪花が不安そうに言った。それもそのはず某達が本拠地としている旭川から今いる釧路はかなり距離がある。そのため、雪花は釧路に着くまでの道中で化け物に襲われるのではと思った。

「大丈夫、大丈夫！へーきへーき、平気だから！」

某は雪花の方を向いて笑って言った。某は以前、諏訪にいた際に諏訪から神戸までの道を(物理的に)切り開き住民を全員四国へと送り届けた実績がある。

そのため、今回も某は道を切り開いてここに住民城を連れていき船での四国入りをしようと考えている。

「さてと、んじや手分けして使えそうな船でも探そつか」

「まだ、壊されずに残ってたらいいけどね」

二人は手分けをして使用に耐えられそうな船を探す。特に大型クルーズ船(贅沢)のようなもの又はそれに近いものを二人は探している。

「あったよ！船が！」

「でかした！」

雪花の吉報を聞いて、某は雪花にお礼を言いながら雪花の元へと駆け寄る。

「船はどこ……どこ？」

「あっちだよ」

雪花の元へと来たものの船が見当たらずキョロキョロと辺りを見

回す某。すると、雪花は指をさして船の場所を某に教える。

「はえ〜スツゴい遠い…」

雪花が指さした先に確かに船はあった。しかし、そこは港から10キロ離れた沖の方であった。

「どうする、某さん？」

「ウーン…」

雪花が某に聞いた。某は首をひねりながら考える。どうやって沖にある船をここに持ってこようか？と

「…ちよつと、良い案が浮かばないから。とりあえず、船のところに行つてつかえる見に行こうか？」

考えること数分、良い考えが浮かばなかったので某は一旦考えるのを止め船の様子を見に行く事を雪花に提案した。

「いいけど、見に行くつてどうやってさ？私、某さんみたいに飛べないよ？」

「そこは大丈夫こいつに乗って行くから」

そう言つて某は鏡を二人の乗つても十分なスペースができるぐらいの大ききにして浮かべる。

「わっ!?すごっ！これこんなことできたの!？」

「そうわよ（肯定）じゃ、行こうか…（せつかち）」

「わかつたよ、…よっこいしょ…あつ、以外と安定してる」

某が鏡に飛び乗ると雪花も続いて恐る恐る乗る。そして、鏡の安定感に少し驚く。

「それじゃ、出発〜」

某は雪花が乗つたのを確認した後、鏡を動かす。すると、鏡はスィーと滑るように動いた。

「わあ、スツゴい静か…後、なんか慣性が働いてくない？」

「あつホントだ。言われて気づいたよ…慣性がないや」

雪花の言葉に某は気づいた。鏡で移動中、慣性が働いていなかった。おかげで鏡に乗つての戦闘でも振り落とされることはない。原因は不明。

「…おつ、近くで見るとでかいねー」

「ホントだね。これなら旭川の住人全員が乗っても余裕ありそう」

船の近くまで来て見ると船の全容を確認できた。船はかなり大型のフェリー船だった。おそらく、あの日から放置されていたのだろう。船体は錆び付き所々ボロボロになっていた。

「まるで、現代版の幽霊船みたいだあ…」

「いやいや、某さん。今からこの船の中に入ろうって時にそんなこと言わないでよ」

「えつなに怖いのか？あんな化け物と戦ってるのに？」

「あれはまだ倒せるからいいけど幽霊は倒せないでしょうよ」

船の周りをぐるりと回って船の状態を見た某が素直な感想を言った。その言葉に雪花は怪訝な表情を浮かべ某に言った。

「大丈夫だって幽霊なんていないよ」

雪花にそう言いながら某は鏡を船に近づけ、乗船する。

続いて雪花も降りると鏡を元の大きさに戻して自分の近くに浮遊させておく。

「さつてと…次は中の確認だね…ん？」

フェリーの内部に入るため、ホントだ扉を開けようとする某。しかし、なぜか扉は開かなかつた。押しても引いても、スライドさせようともびくともしない。

「カギがかかっているんじゃない？」

「かもしれないね…しゃーないあんまり壊したりとかしたくないけど…やるか」

そう言う某は雪花を扉から離れさせると自分も少し離れクラウチングスタートの体勢になる。

「位置について…はい、よいスタート（棒）」

なんとも気の抜ける掛け声と共に駆け出し

「オリヤーツ!!」

扉に向かって飛び蹴りを放って扉を蹴破り中に侵入する。

「…うわ、くっさ…何この臭い」

浸入した某は室内に充満する何とも言えない嫌な臭いに顔をしかめ鼻を摘まむ。

「某さんどうかし……臭ッ！」

外にいた雪花が中に入ろうとして室内の臭いに悲鳴をあげる。

「……、これはひどい……」

室内には腐敗あるいは白骨化した死体が大量にあった。さらに、良く見れば床や壁に血のようなものも付いていた。

「……まるで、殺し合いでもしたみたいだあ……ん？」

某は室内の惨状から人同士で争ったと予想した。そして、詳しく死体を調べるとくしゃくしゃのメモ用紙を見つけた。

某はそれを拾いメモを調べた。すると、メモには書きなぐったような文字が書かれていた。

「こわいたすけてみんなころされるなんでおなじひとなのにころすのだけかたすけて」

と、読みづらいがそうメモには書かれていた。

「……なんてことを」

某の予想は当たっていた。ここにある死体は人同士の争いで亡くなった人たちのものだった。

「……某さん、これは一体？」

雪花が周囲に転がる死体を見ながら某の側に来た。某は雪花にメモを渡した。

「……あくなるほど、そういうことですかそうですね……なんで、こんな大変な時だったのに下らないことやってんだらうね？」

雪花はメモを読んだ後、どこか呆れたように呟いた。

「本当にそうだよね……まあ私たちのところもそろそろヤバイけどね」

「……あくそういえば、そうでしたね……」

この船で起こったことは某達にとっても他人事ではなかった。似たような事をやらかしそうな人が一人旭川にいるからだ。

「カムの力を高めるための生け贄を用意しようとしたり、勇者の力を解析して子供に与え戦わせようとしたり、病人や老人を囚にして自分達の盾にしようとしたり……あげていけばキリがないねあの人の過激な提案は……」

「これは及川さん、いつか街の人達を殺すかもしれないね……」

「いや、逆に殺されるかもしれないよ?」

最近の及川の発言を思い出しながら二人は危機感を募らせる。何かしらの対策を打たなければ、いずれこのこと同じことが旭川で起こるだろう。

「及川さん関連はまた今度考えるところとして、とりあえず船の中をよく調べますか?」

「…まさか、某さん。この船を使うつもり?」

「使いたくはないけれど…もし、この船以外に使えそうなのが無かったら…使うことになるかもね」

「うわあ…どうか、そんなことになりませんように」

死体に乗っていた船なんぞ誰も使いたくないだろうがそんなこと言ってられる状況ではないので某は使わざるおえなければ住民に内緒で使うだろう。そして、某の言葉を聞き雪花はそうならないよう祈るのであった。

「う…ここも随分と匂うな…」

死体の転がっていた広間からさらに奥に行くと強烈な悪臭が某達に襲いかかる。某は近くにある扉を開けるとすぐに閉じた。

「何があったの? 某さん?」

「…死体があった。けど…さっき見た死体よりなんか酷いことになってた…見ない方がいい」

「…わかった」

先程見た死体よりひどいとはどういうことか?と雪花は疑問に思ったが若干顔色が悪い某の表情を見て精神衛生上よろしくない判断、見ないようにした。

「…さて、次はどこを見ようかな」

どうせ、どこもあんな感じなんだろうなあーと諦め混じりに考えながら探索を続けようとしていると

—ガタンツ

「!?!」

突如、どこからか物音がした。二人は一斉に音のした方を見て各々の武器を構える。

「…せつさん、聞こえた今の?」

「聞こえたねえ…はつきりと…」

「なんだと思う?」

「ネズミとかじゃない?」

「…だといいんだけどね」

そんなこと言いながら二人は音のした部屋へと近づく。そして、某はドアノブに手をかけると深呼吸をした。

「開けるよ…イイネ?」

「アツハイ…いつでもどうぞ」

某はドアノブひねりドアを開け放つ。同時に、二人は飛び退き様子を伺う。

「…中に入るよ」

「気を付けてね…」

某は中を覗きこみ確認した後、恐る恐る部屋の中に入る。しかし、部屋の中には特に変わったものはなかった。某はあれーおかしいね、何も無いね?と疑問に思いつつもホツと安堵した。

しかし、次の瞬間

腐敗した死体が背後から某を抱き締めた。

「□%‡##◆#▲≡△≡■\$△%▲#▲#▽ツツツ!!?」

某はもはや人のものとは思えない叫び声をあげながら抱きついてきた死体を掴むと全力で壁に投げつけた。そして、すぐさま部屋から飛び出し雪花に抱きついた。

「某さん!?大丈夫!」

「……!!」

しかし、雪花の言葉に某は答えない。いや、答えられない。突然のことにビククリして声がでないのだ。顔面蒼白でガタガタ震えなが

ら雪花に抱きつく某の様子も見て雪花は一旦外に出ようと考えた。

「某さん：外に出よう！ここは：なんかヤバイ！」

「あああ、当たり前だのクラッカー：早く出ようや：！」

二人は来た道を引き返そうした。しかし、廊下の向こう側からぞろぞろとまるでゾンビのように腐敗した死体がこちらにやって来ていた。

「何がどうなってるの：!？」

「これがバイオハザードの新作ですか？リアリティーありますねえ！（レビュー）」

「某さん！すっかりして！現実逃避してないで正気を保って！」

「なに言ってるんのよ！私は正気だよ、せっさん。いやー最近のVRはすごいよね、ホント」

「：ダメだこりゃ」

某は先程の不意打ちで精神的にやられていた。ハイライトのない目でなにもないところを見ながらメニュー画面はどこ：ここ：？とうわ言を言っている。雪花はそんな某の手を引いて逆方向に走り出す。

「なっ!?!：こつちからも!？」

しかし、そちらからもゾンビのような動きで腐敗した死体が近づいていた。

「ツ：こうなったら、強行突破しかない！某さん、ほら武器持って！戦うよー！」

「ちよつと待ってせっさん。武器の装備の仕方がわからないの」

「だから、これはゲームじゃないってば！しっかりしてよお!!」

ポンコツ以下と化した某はいまだにこの状況をゲームと勘違いしている。仕方なく雪花は一人で応戦することにした。

「せいッ！」

雪花は槍を死体達に投げた。すると、後方にいる死体を巻き込んで串刺しにしていく。

「次はこつちーやあーッ！」

今度は逆方向に槍を投げ同じように串刺しにする。

「よし、このまま数を減らしていけば…!？」

突破できると思ったときだった。突如、雪花の腰に雪花より年齢が低いだろう子供の死体が抱きついた。

「この…離し…!？」

雪花はすぐさま子供の死体を引き剥がす。しかし、その隙に他の死体が雪花に襲いかかった。

「ギャ…!？」

槍を振るおうにも廊下では狭すぎて出来ず、雪花は死体達に押し倒される。なんとか押し退けようとするが手足を押さえつけられ、身動きとれない。

「イヤ…離して…!？」

雪花が死体に襲われている間に某にも死体の魔の手が迫る。しかし、某はいまだに正気に戻らない。

—ガリッ

「!?…イッテエエエエエエ!?」

すると、牛鬼が某の近くに現れると某の手を噛んだ。瞬間、某は痛みあまり絶叫し噛みついた牛鬼を投げ飛ばした。投げ飛ばした牛鬼がたまたま雪花を襲っていた死体に当たりボウリングのピンのように吹き飛ばした。

「あー痛かった。ん？せっさんどうしたのそんなところに寝転がって？」

某が噛まれた手をぶらぶらさせながら雪花に聞いた。すると、雪花は立ち上がって某に近づくと某の両肩をつかみ。

「フンッ!」

「ゴフッ!？」

膝蹴りを某の腹に繰り出した。蹴りを食らった某は腹を押さえてうずくまり痛みを震える。

「せ、せっさん。どうして…?」

「どうしたもこうしたもないよ某さん!あんたが役立たずの池沼になったせいで18禁展開になりそうだったんだよ!」

「ええ…」

かつてないほどに怒っている雪花に困惑する某。よろよると立ち上がりながら雪花に事情を聞こうとして雪花の後ろの動く死体を見た。

「…これがバイオハザードの新作ですか？リアリ―」

「フンツ！」

「ゴフツ！」

「同じネタを繰り返さないでくれるかな某さん？」

「アツハイ、ごめんなさいです、はい…」

同じボケを繰り返そうとした某に雪花の回し蹴りが放たれる。そして、崩れ落ちる某をゴミを見る目で見下ろしながらツツコミを入れる。そんな雪花の様子を見て某はふざけたら殺されると思った。

「…はあ、某さんあれどうにかできる？」

気を取り直して雪花は死体を指差しながら某に聞いた。某は少し考えたあと何か思い付いたのかポンと左の掌を右の拳で叩いた。

「辰、融合ー」

某がそう言うのと某の頭上に光が落ちる。まばゆい光が周囲に放たれ雪花は眩しさのあまり目をつむる。やがて、光が止み目を開けると「じゃじゃーん！と融合形態・辰ってね！」

そこには、金属でできた竜のような尻尾と角が生えた某がいた。

「んじゃ、パパパッと終わらせますか！」

そう言うのと某は手を死体に向ける。すると、死体から突然発火する。火は瞬く間に死体の体全体に燃え広がり一分足らずで灰にする。

「あははーもつと燃えるがいいさー」

なぜかハイテンションになっている某はさらに能力を発動し視界に映るすべての死体を燃やしていく。

「すげーい…」

「終わったよーせつさん」

その光景に雪花は圧倒されていた。そして、気づけば廊下には灰だけが残った。

「某さん…」

「ん？」

「そう言うこと出来るならもつと早くやってくれない？」

「…ごめんね、まだ融合した時の能力を把握してる訳じゃないからおそれと使えないんだ…ごめん」

雪花の不満の言葉に某は頭を下げた。無理もないそんな力があるなら出し惜しみせず使えと言いたくなるだろう。しかし、融合の能力は確かに強力だか使いこなせるかどうかは別の話だ。プロティラとかハザードみたいに暴走して味方を攻撃してしまうかもしれない。だから、某はあまり新しい融合を使いたがらないのだ。

「まあ…お互い無事だったからいいけどさ…」

雪花はなんとなく某の考えを察してそれ以上はなにも言わなかった。

「さて、某さん。この後どうする？」

「もうこの船には用はないね…他の船を探そうか」

「はあ…また、振り出しかあ…」

「ははは…まあ、頑張っっていこう」

雪花はため息を吐いてげんなりとして某はそれを見て苦笑いを浮かべた。

その後、二人は船から脱出すると再び船の搜索を再会し今度は死体のない使えそうな船を見つけるのだった。

そして、その事を旭川で待っている室府に伝えるため旭川に帰るところにした。

その道中で某はふと考える。

(あの死体はなんで動いていたんだろう?)

しかし、その疑問も疲労からきた眠気に塗りつぶされ某は考える止めてしまったのだった。